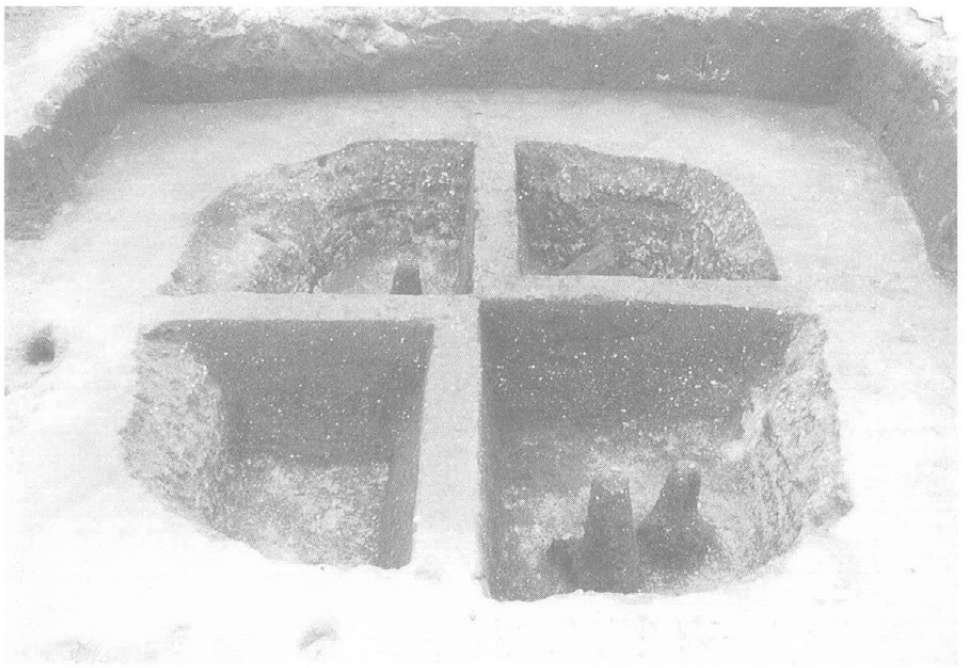
図版20

本池遺跡
B区　全景

B区　SA1
検出状況

B区　SA1
完掘状態

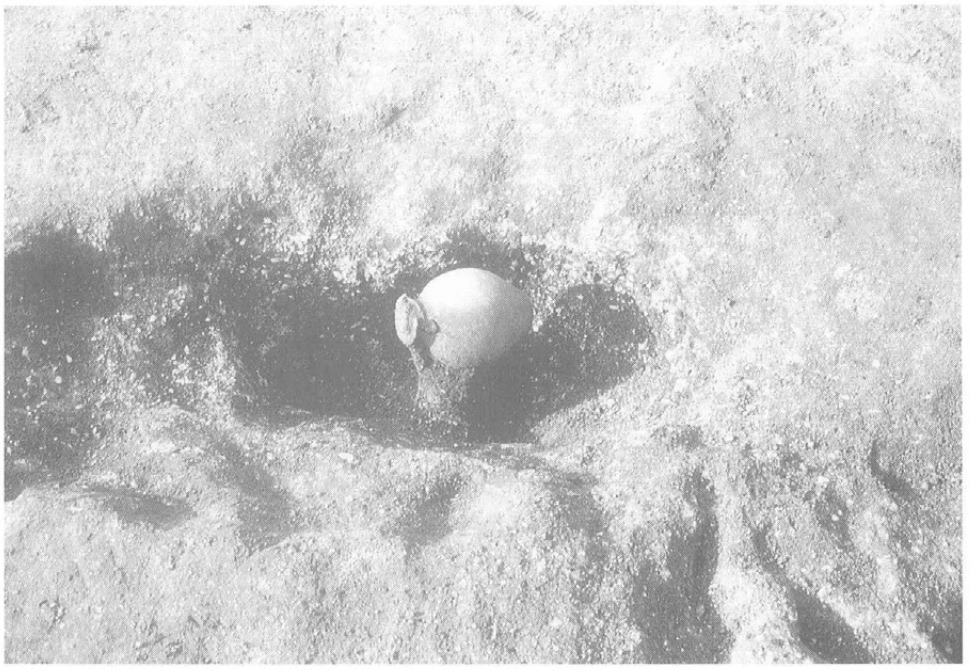
B区　ＳＡ１
ステップ状遺構



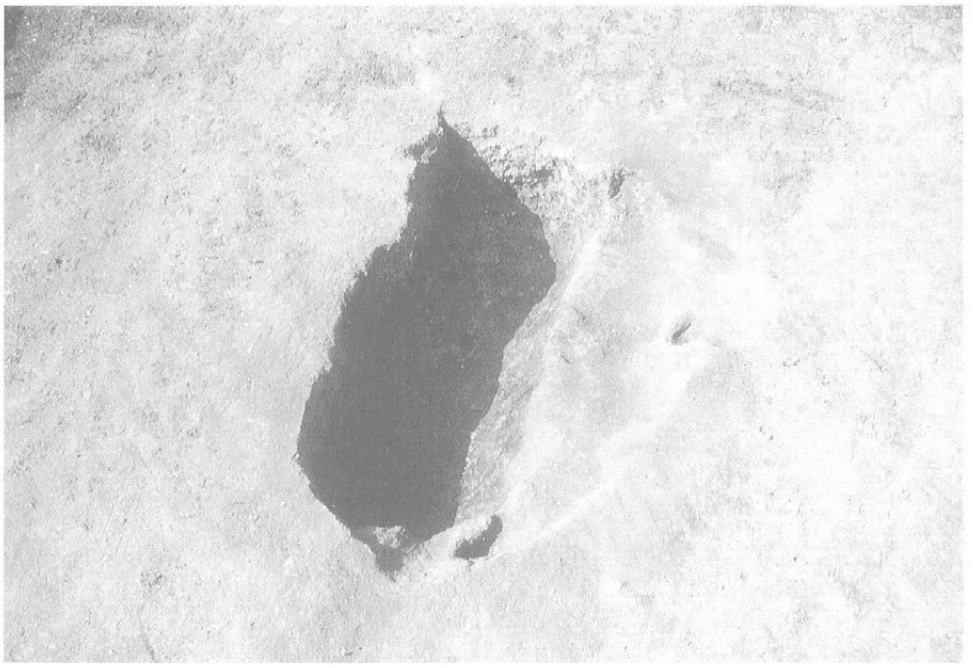
B区　ＳＡ２
土層断面

B区　ＳＡ２
完掘状態

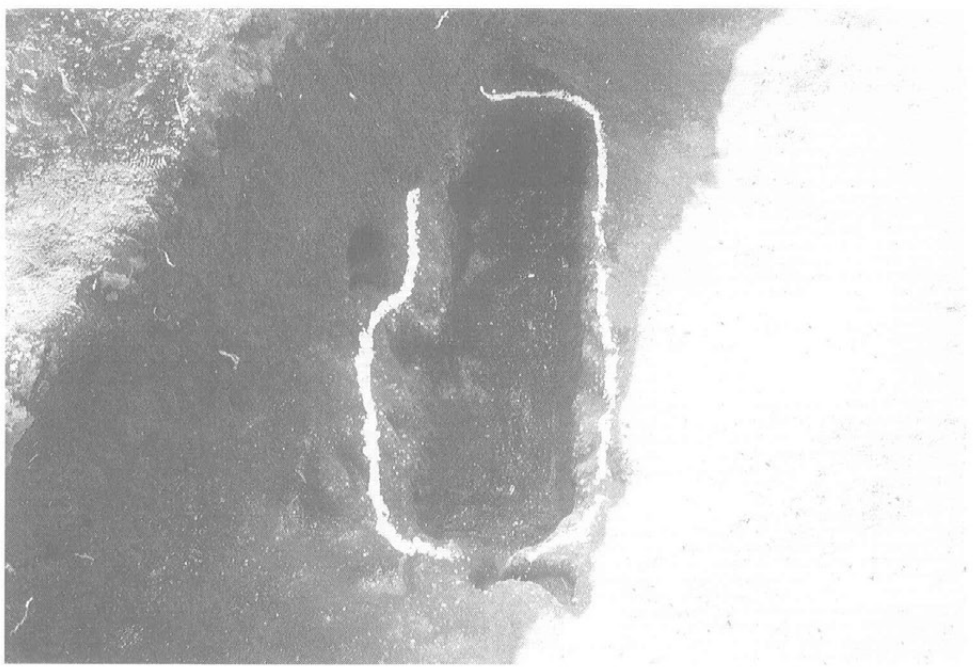
図版22



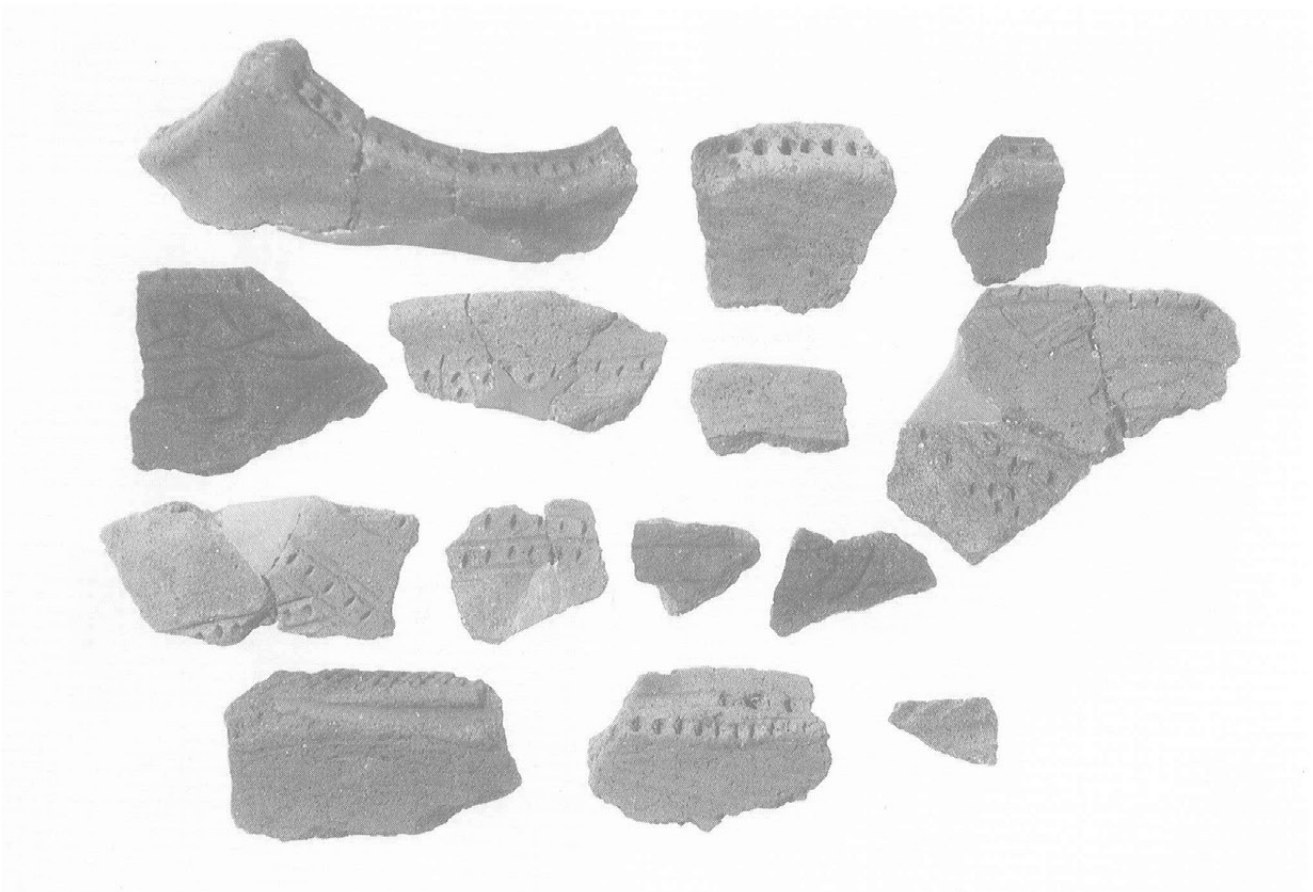
B区　SC1



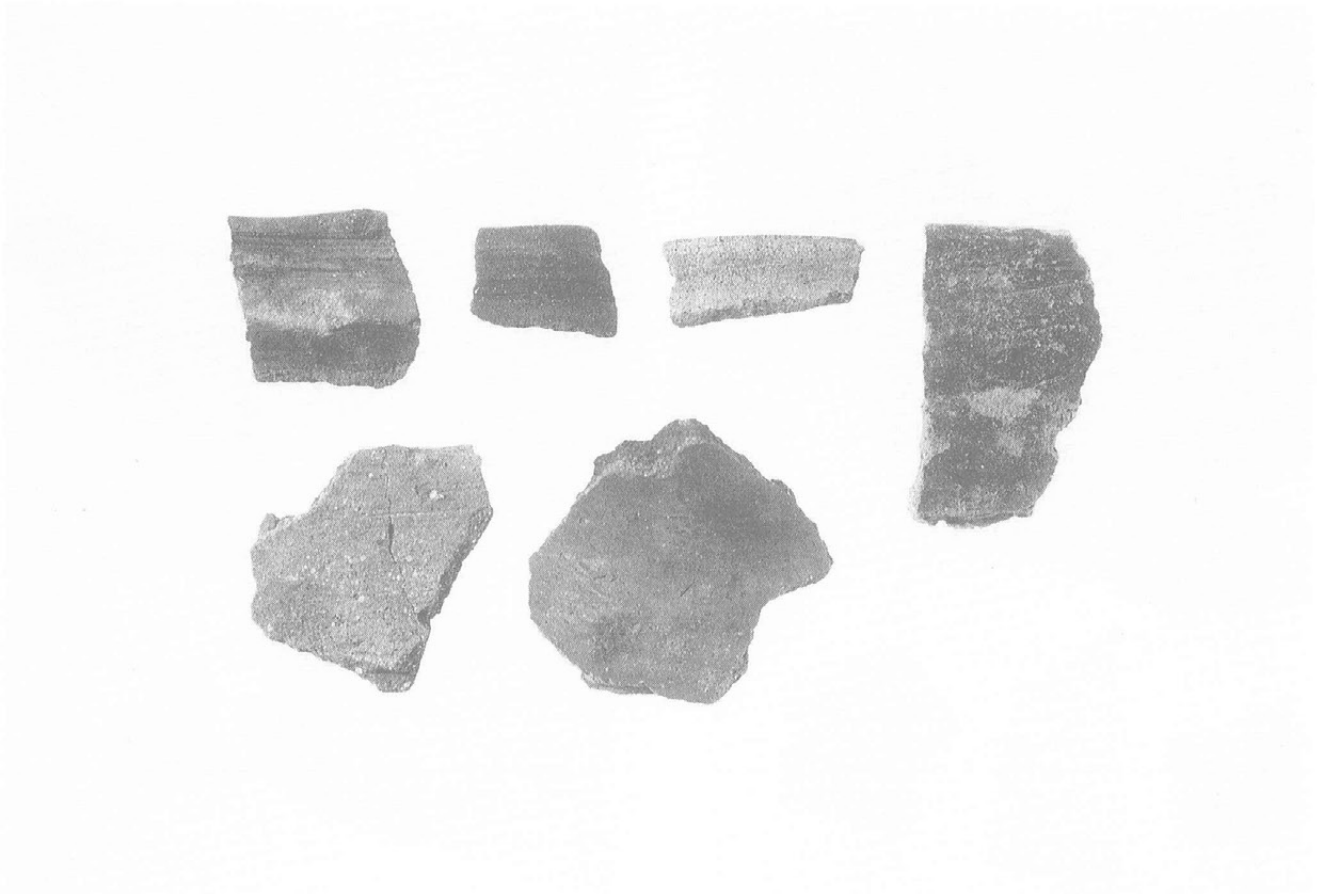
B区　SC2



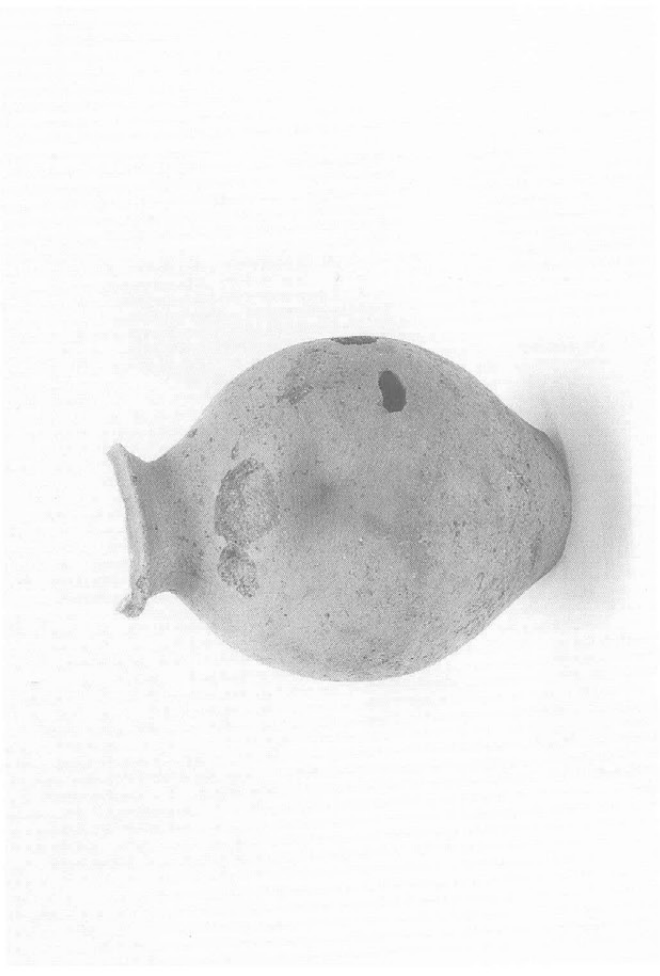
B区　SC3



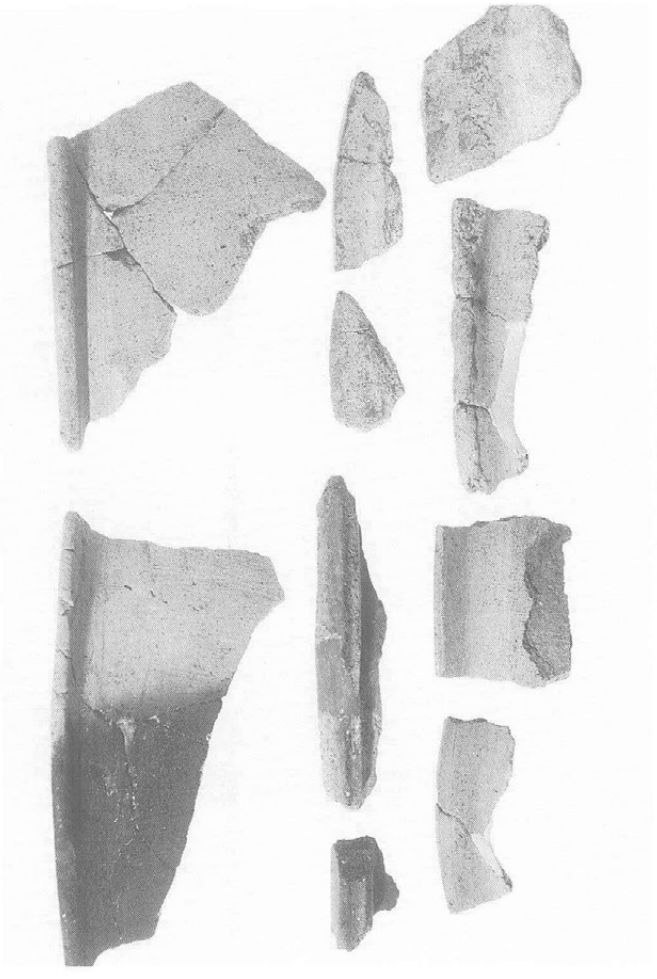
B区出土縄文土器(1)



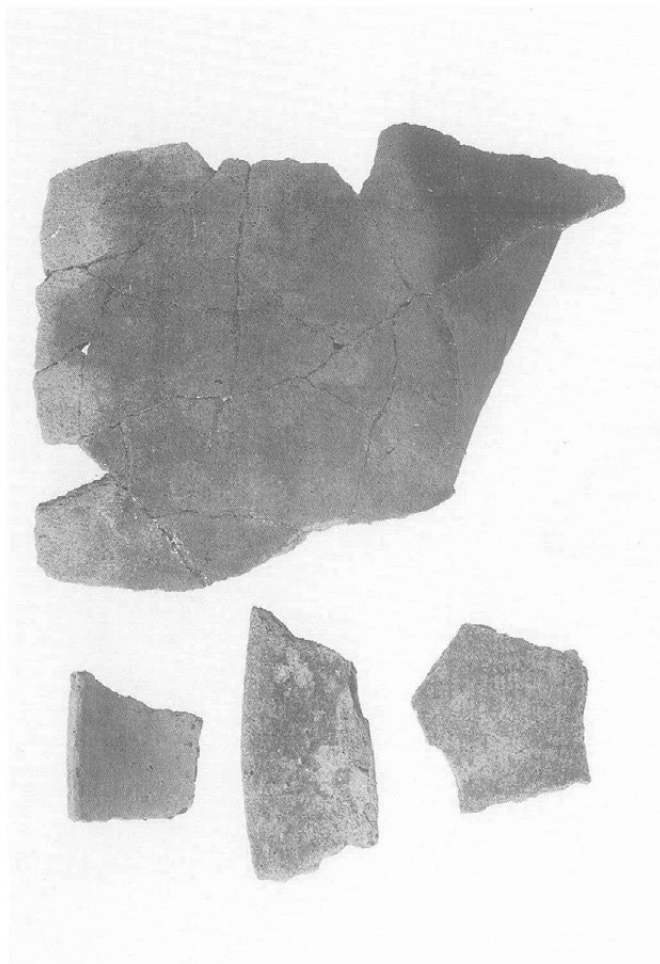
B区出土縄文土器(2)



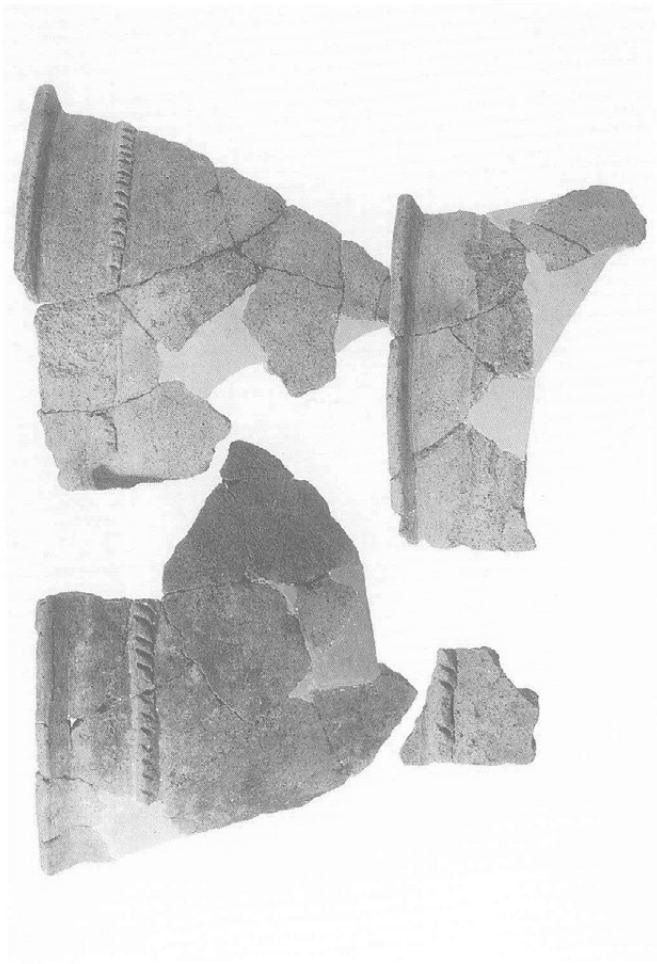
B区 出土弥生土器(2)



B区 出土弥生土器(4)

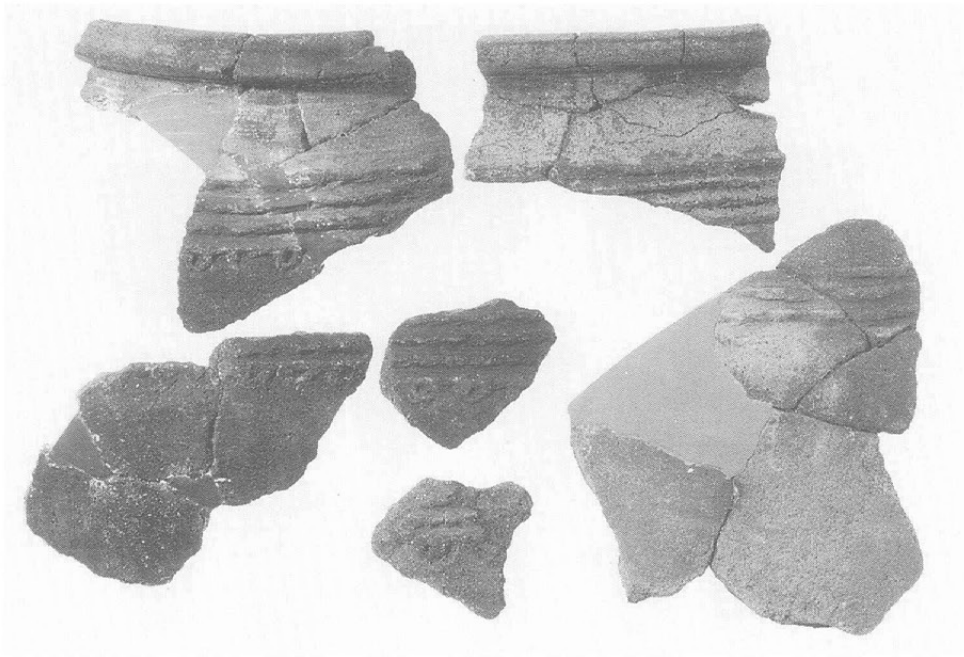


B区 出土弥生土器(1)

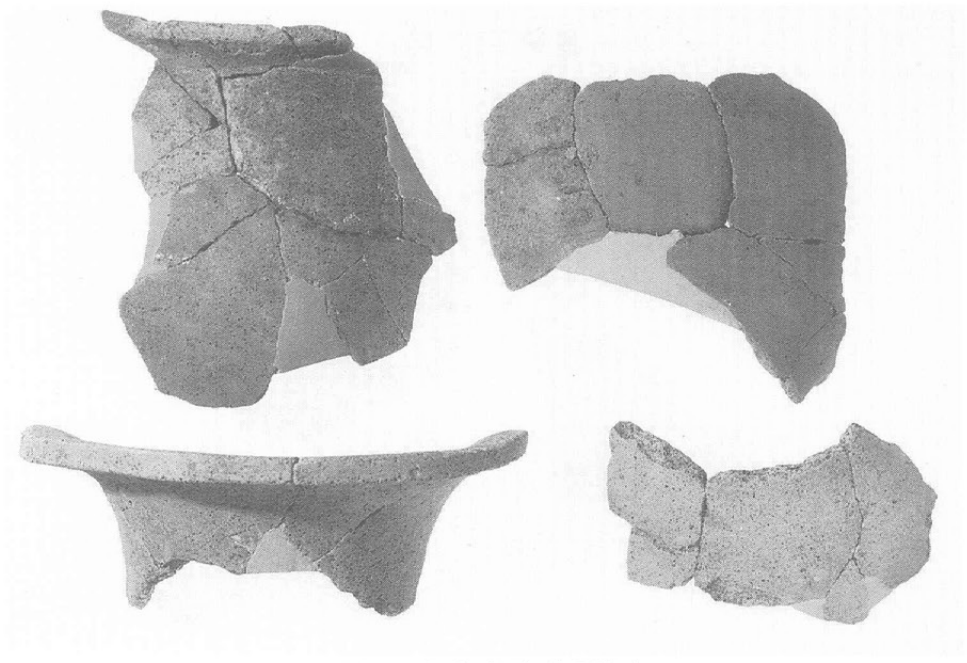


B区 出土弥生土器(3)

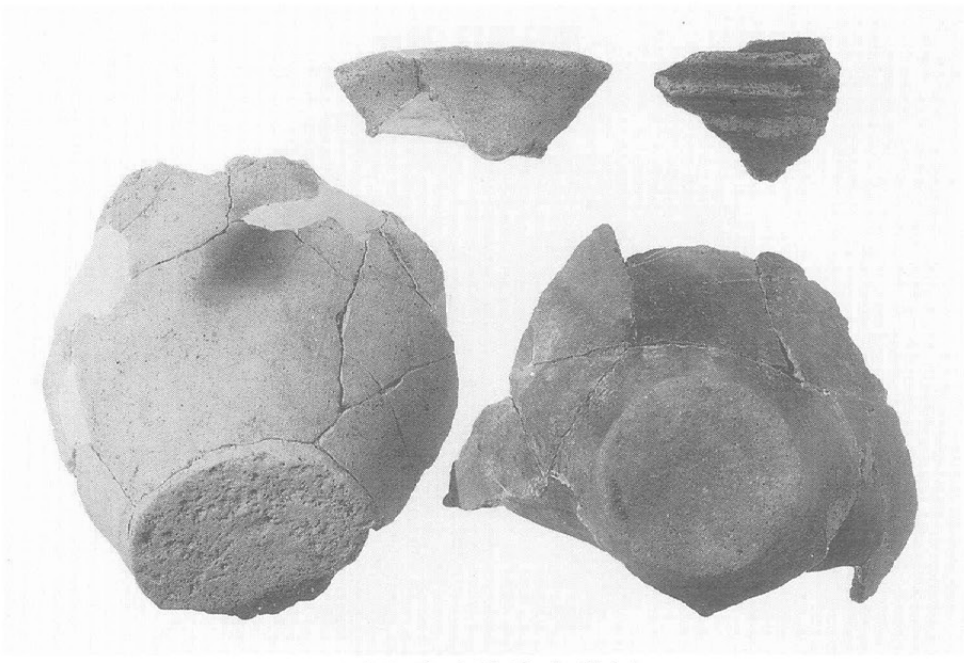
B区 出土弥生土器(5)



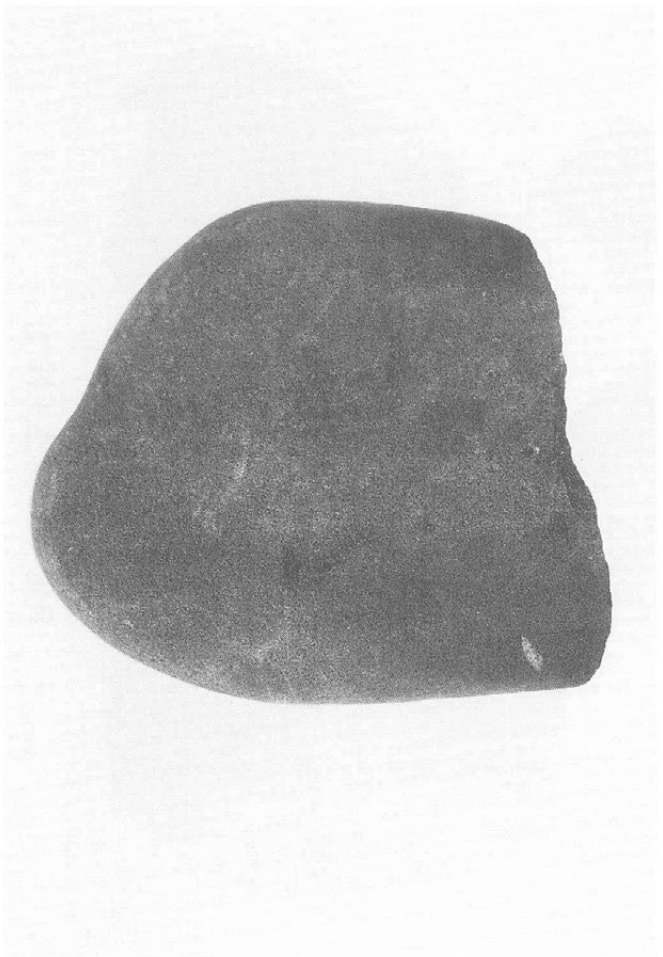
B区 出土弥生土器(6)



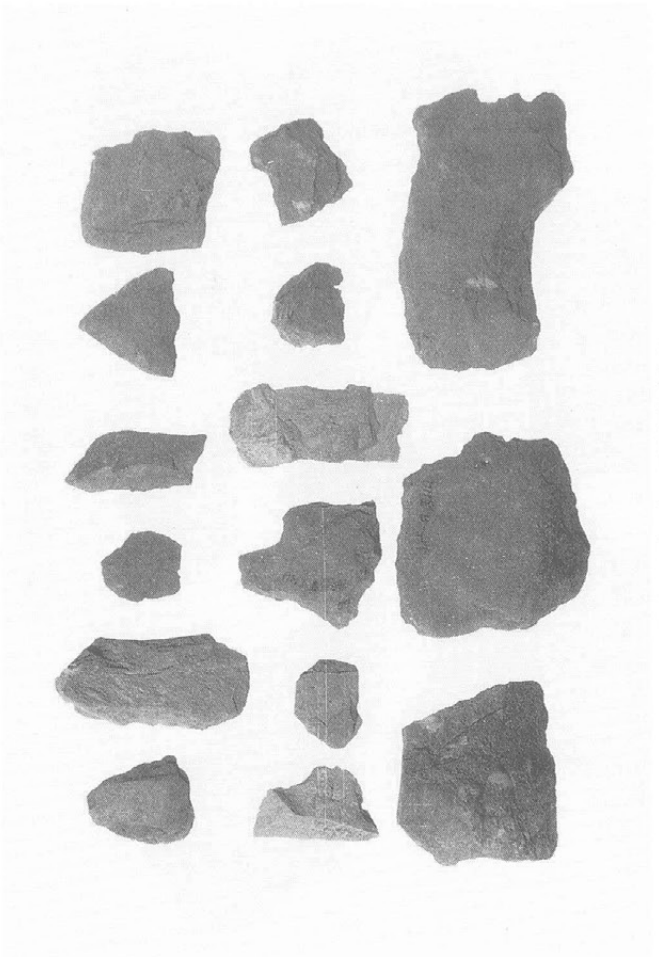
B区 出土弥生土器(7)



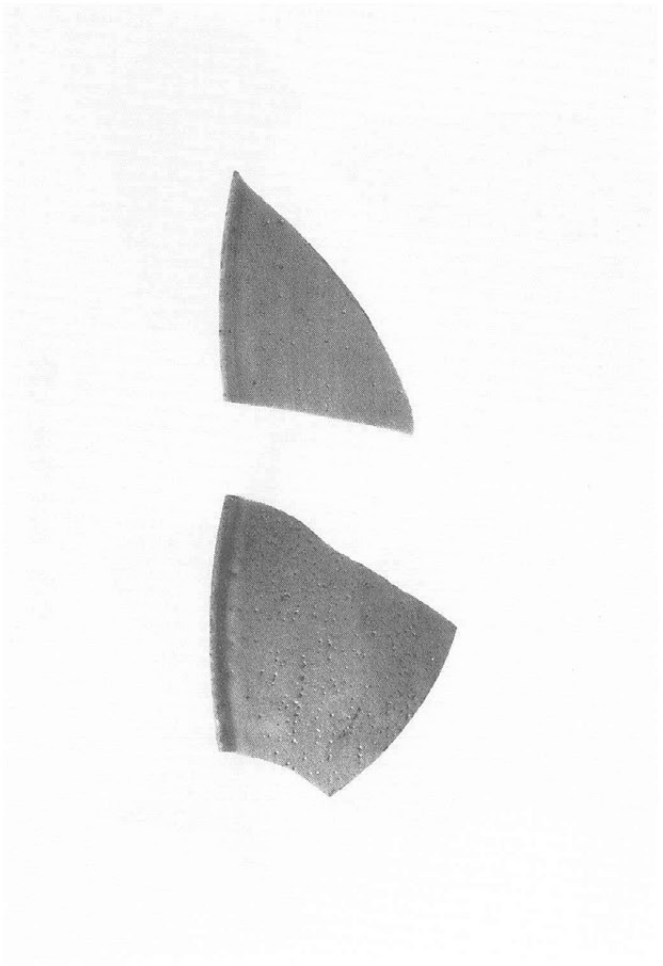
B区 出土弥生土器(8)



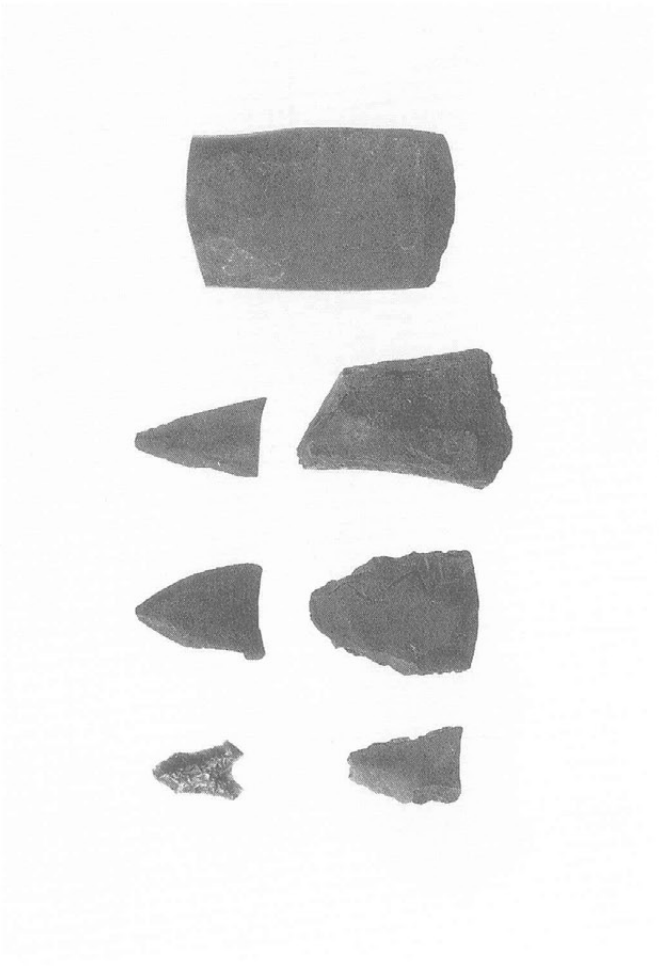
B区 出土石皿



B区 出土石器未製品



B区 出土磁器



B区 出土石器

MAEHATA

前　畑　遺　跡

第５章　前畑遺跡の調査

第１節　遺跡の立地と環境

前畑遺跡は、都城市丸谷町字前畑に所在する。東流する丸谷川が北に流れを変える部分、左岸低位段丘上に立地する。丸谷川の氾濫や後世の削平により、調査時は独立した小高い島状の地形となっていたが、本来は約30ｍ離れた段丘縁につながっていたものと思われる。周囲は水田として利用されていたが、遺跡部分は館の伝承地であったため削平を免れたものと思われる。水田面との比高差は３～５ｍで、栗園として利用されていた。

前畑遺跡の隣接地は、県道改良に伴い県教育委員会が平成５～６年度に調査を行った山ノ田第１遺跡である。弥生時代終末から古墳時代初頭の住居群が検出されている。また、本書に掲載している中大五郎第１・第２遺跡、河川改良に伴い県教育委員会が平成２年度に調査した下大五郎遺跡など、弥生時代各時期の遺跡が前畑遺跡周辺に点在していることが明らかになってきている。

古代～中世の遺跡も一連のほ場整備事業で確認されてきた。平成６年度に報告書が刊行された上大五郎遺跡では中世の館跡がその全容を現した。本書掲載の本池遺跡では、平安時代の遺構・遺物を検出している。後に都城盆地の政治的統一を達成する北郷氏の居館および北郷300町は、市北東部、山田町、高崎町付近に存在した可能性が高いとされている。前畑遺跡においても、中世の遺構、遺物が検出された。前畑遺跡の位置付けは、丸谷地区遺跡群全体の流れの中で読み込む必要があろう。

第２節　調査の概要

１．調査の経過

調査対象面積は約4,000㎡である。調査にあたり、国土座標に合わせた10ｍグリッドを設定した。重機により表土の除去を行ったが、表土は薄く、遺物包含層である黒色土が約30㎝の厚さで良好に残存していた。黒色土中での遺構検出は困難であり、時間的制約もあり止むを得ず黒色土を掘り下げ御池ボラ上面で遺構確認を行った。精査の結果、方形や円形の黒色土の落ち込みが多数確認され、遺物の出土状況等から竪穴住居跡であることが予想された。遺物の取り上げや調査の進行を考慮し遺構番号を付したが、完全にプランが確定していないものに対しても黒色土の落ち込みや遺物の集中が見られる箇所には仮番号を付した。そのため、調査の進展に伴い住居跡ではないことが確認されたものにも遺構番号が付き、若干の遺物が残ることとなった。整理作業の段階で遺構番号の再付も検討したが、大量の遺物整理に混乱を生じる恐れがあること、御池ボラ層に達しない深さの遺構が存在した可能性を完全には比定し得ないことなどから、あえて番号の変更は行わないこととした。

調査の結果、縄文時代の土坑１基、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡26基、土坑１基、中世の竪穴状遺構４基、土坑７基、道路状遺構２条、近世の土壙墓数基、溝状遺構２条、多数のピットが検出された。遺物は、弥生土器、土師器、陶磁器、石器、銭貨等が

出土した。

検出した遺構のうち竪穴住居跡、土坑（遺物を出土したもののみ）、竪穴状遺構については20分の１で実測を行った。道路状遺構（大溝）は、50分の１で平板にて実測を行った。その他の遺構および遺構分布図については、空中写真測量を行い、個別遺構の写真撮影の後調査を終了した。

２．基本層序

前畑遺跡の基本層序は、丸谷地区遺跡群の他の遺跡のそれと大きく変わらない。栗園として利用されていたため、部分的な攪乱は見られるものの、耕作は比較的浅く止まっており表土は薄い。御池ボラ層は、遺跡周辺では３～４ｍの厚さで堆積している。表土と御池ボラの間には軟質の黒色土が堆積しており、縄文時代後期以降の遺物包含層となっている。他遺跡では約50㎝の厚みが見られたが、前畑遺跡では約30㎝の堆積が見られた。黒色土と御池ボラ層の間には約10㎝の漸移層が見られる。

第３節　弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡

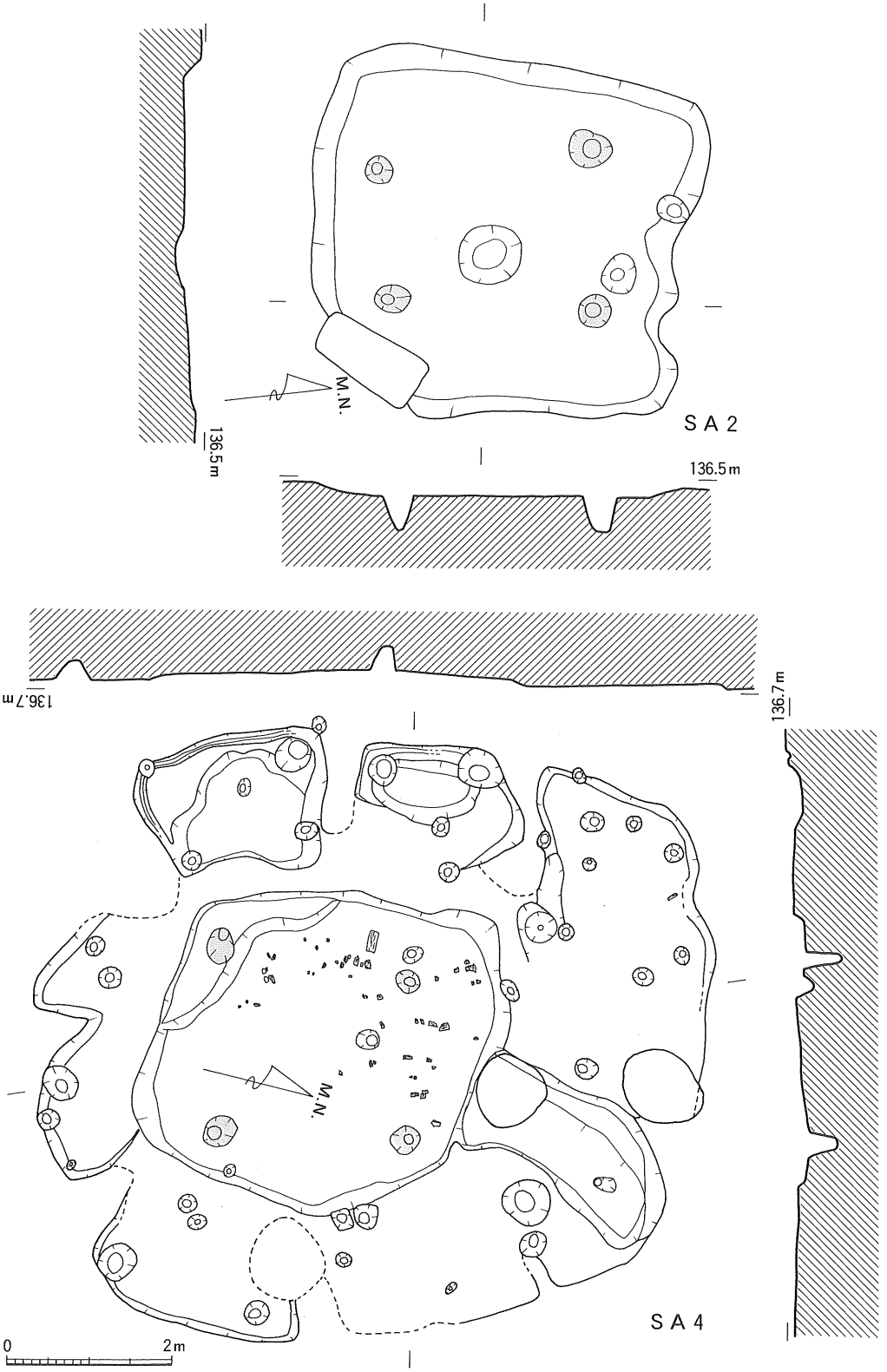
ＳＡ２・４（第２図）

ＳＡ２は、一辺4.40ｍの方形プランである。南東コーナーにＳＣ18が切り合う。床面は御池ボラ層で貼り床は見られない。検出面からの深さは約20㎝と浅く、主柱穴は４基である。床面中央に浅い落ち込みが見られ、炭化物を含んだ埋土が見られた。遺物は、破片であるが床面密着の状態で出土している（第４図３～７）。３は高坏の坏部から脚部である。接合は、坏部裏側の粘土瘤を脚に差し込んでいる。坏部、脚部ともに縦方向のミガキが顕著である。４は高坏の坏部である。内外面ともにミガキが顕著で、口縁部はほぼ水平に開く。５は高坏の坏部で、坏底部との境に明瞭な稜を持ち、外反しながら口縁部へと延びる。６は器台の脚部である。裾はあまり開かない。７は手づくねのミニチュア土器である。

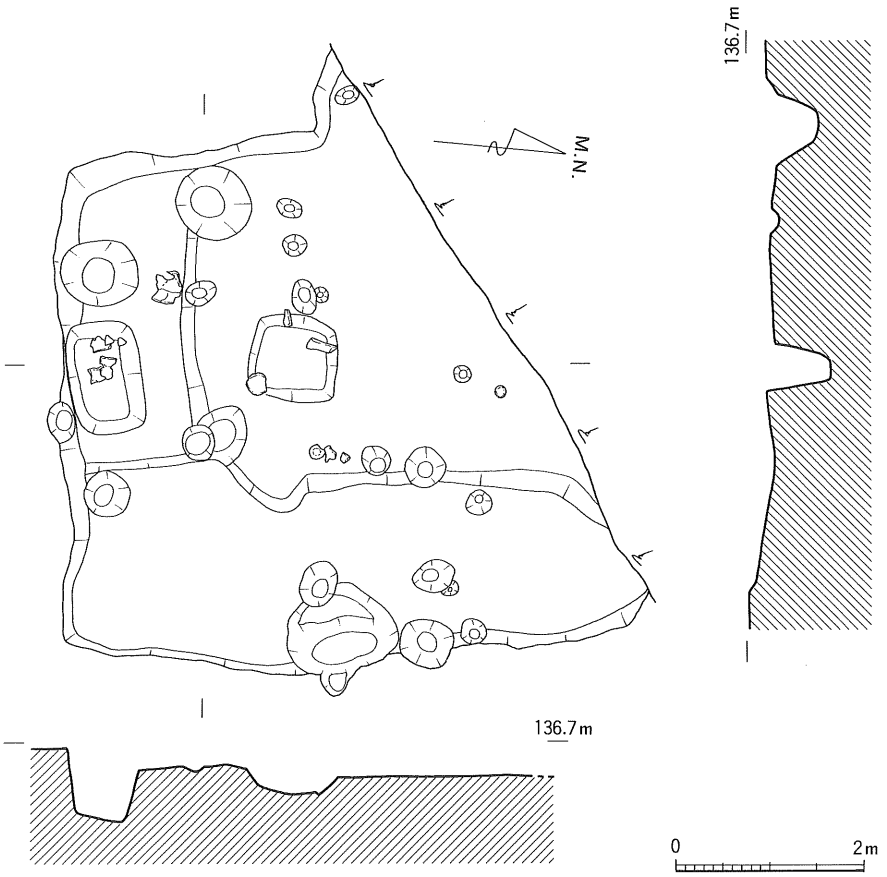
ＳＡ４は、方形基調の花弁状住居である。長軸8.2ｍ、短軸7.2ｍで中央部の床面は方形に段落ちする。張出部は全周に８ヵ所見られるが、検出面からの深さが非常に浅く、間仕切り壁が不明瞭な部分も見られた。主柱穴は４基であるが、各張出部に数基のピットが見られ、補助的な柱が想定される。西壁中央の張出部には方形の落ち込みが見られる。床面には若干の炭化材が検出された。床面に貼り床は見られないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。若干の土器類が床面近くから出土している（第４図８～14）。８は小型の甕である。脚台状の底部はやや上げ底気味である。口径と胴部最大径がほぼ等しい。９は複合口縁の壺である。内傾する拡張部に櫛描波状文が施される。10・11は高坏の脚部である。10は大きく開き、円形透かしを４方向に持つ。11は円柱状の脚で、円形の透かしが１箇所確認された。縦方向のミガキが顕著である。12は鉢である。底部は平坦面が殆ど見られず、丸底となる。13・14は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。

ＳＡ５（第３図）

第１図　前畑遺跡遺構分布図（Ｓ＝1／400）

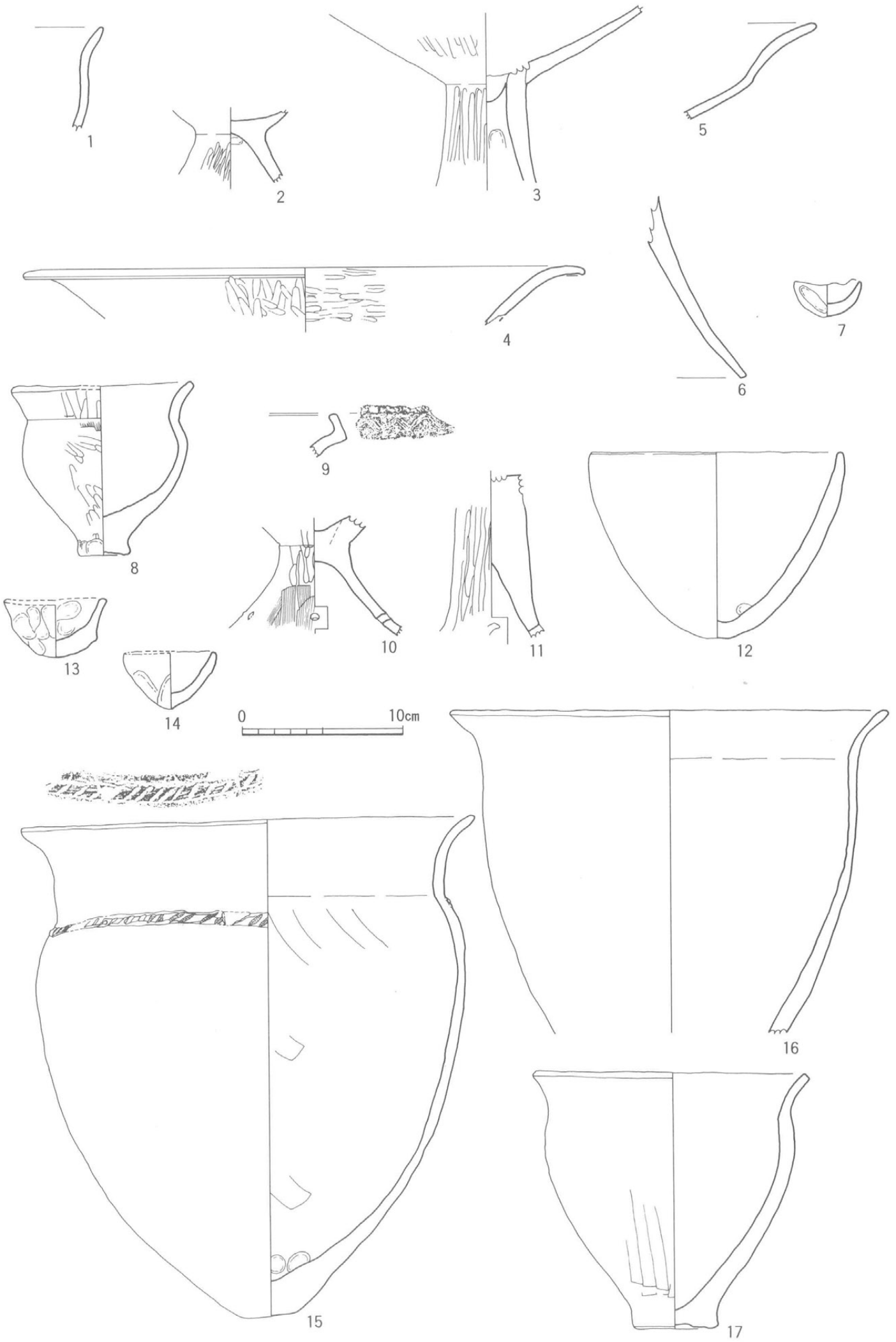


第2図　ＳＡ２・４実測図（Ｓ＝1／80）

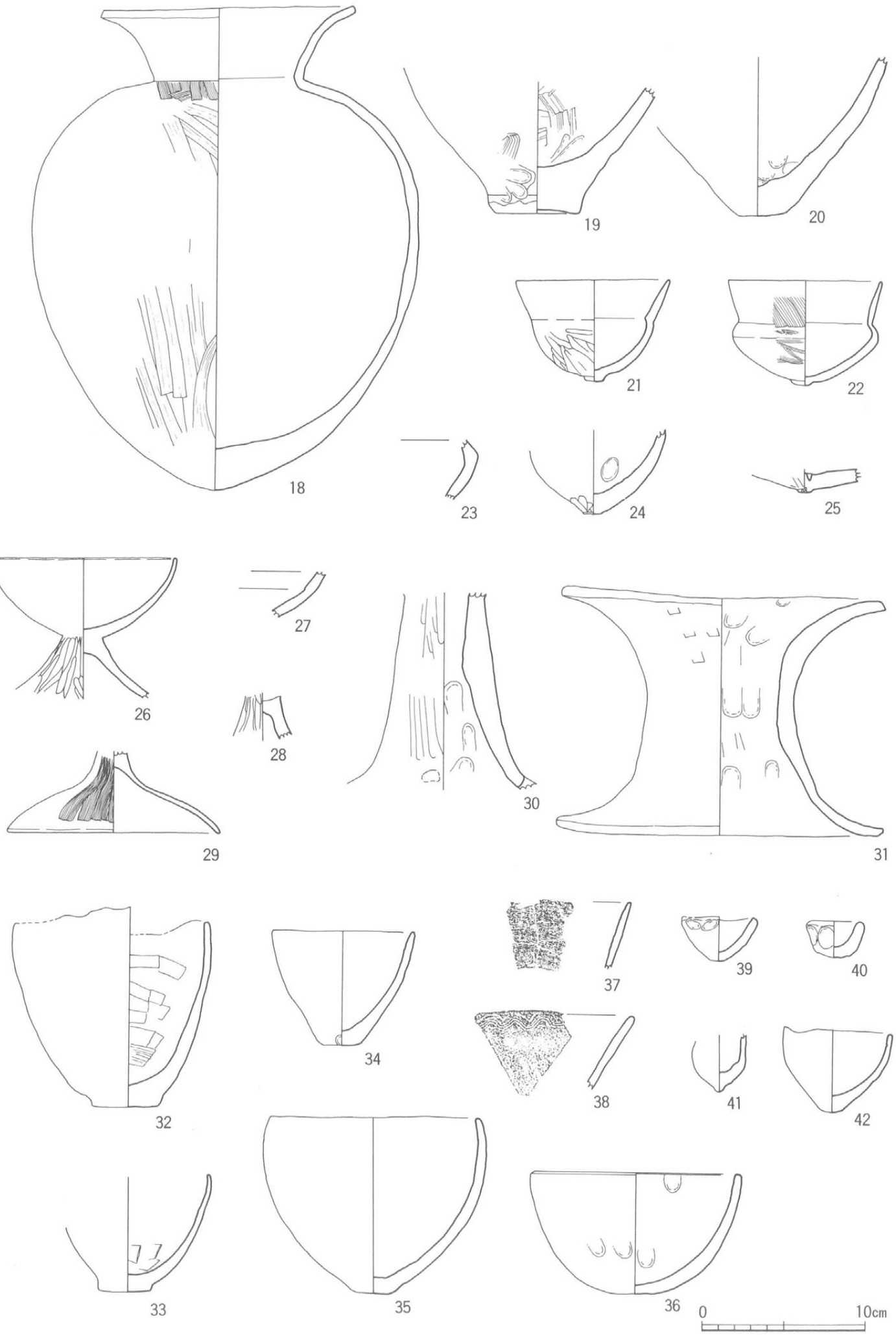


第３図　ＳＡ５実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＡ５は、調査区西端に検出されたが、北側が崖面で遺構の一部が崩壊している。一辺約６ｍの方形プランで、南側と東側の床面がベッド状に一段高い。主柱穴は２基で、プランの中央よりやや東寄りの位置に見られた。貼り床は見られなかったが、部分的に硬化した箇所が確認された。床面中央と南壁際に方形の掘り込みが見られ、完形土器が数点見られた。焼土等は確認されなかった。多くの土器が床面近くから出土している（第４図15～17、第５図）。15～17は甕である。15は、頸部に１条の刻み目突帯を持ち、緩やかに外反しながら延びる口縁部と僅かに肩の張る胴部を持つ。底部は平底であるが、平坦面は小さい。胴部最大径は胴上部にあり、口径がやや上回る。16は胴張りせず、口径が最大径となる。口縁部は外傾し、頸部は締まらずそのまま胴部へと続く。17は小型の甕で、緩やかに屈曲する頸部は稜を持たない。口径が胴部最大径をやや上回る。底部は平底である。18は壺で、肩が強く張る胴部に、外反し大きく開く口縁部を持つ。底部は、やや尖底気味の丸底である。器面調整はハケ目である。19・20は平底の壺底部である。19は指によるナデ痕が顕著である。21～25は、小型壺である。乳房状の底部を持ち、口縁部は外傾し直線的に延びる。いわゆる小型丸底壺の影響下に成立した土器形式であろうと思われる。25は、底部のボタン状突起を横に貫く径２㎜程の穿孔が見られる。器面調



第４図　ＳＡ１・２・４・５出土遺物実測図（1／4）



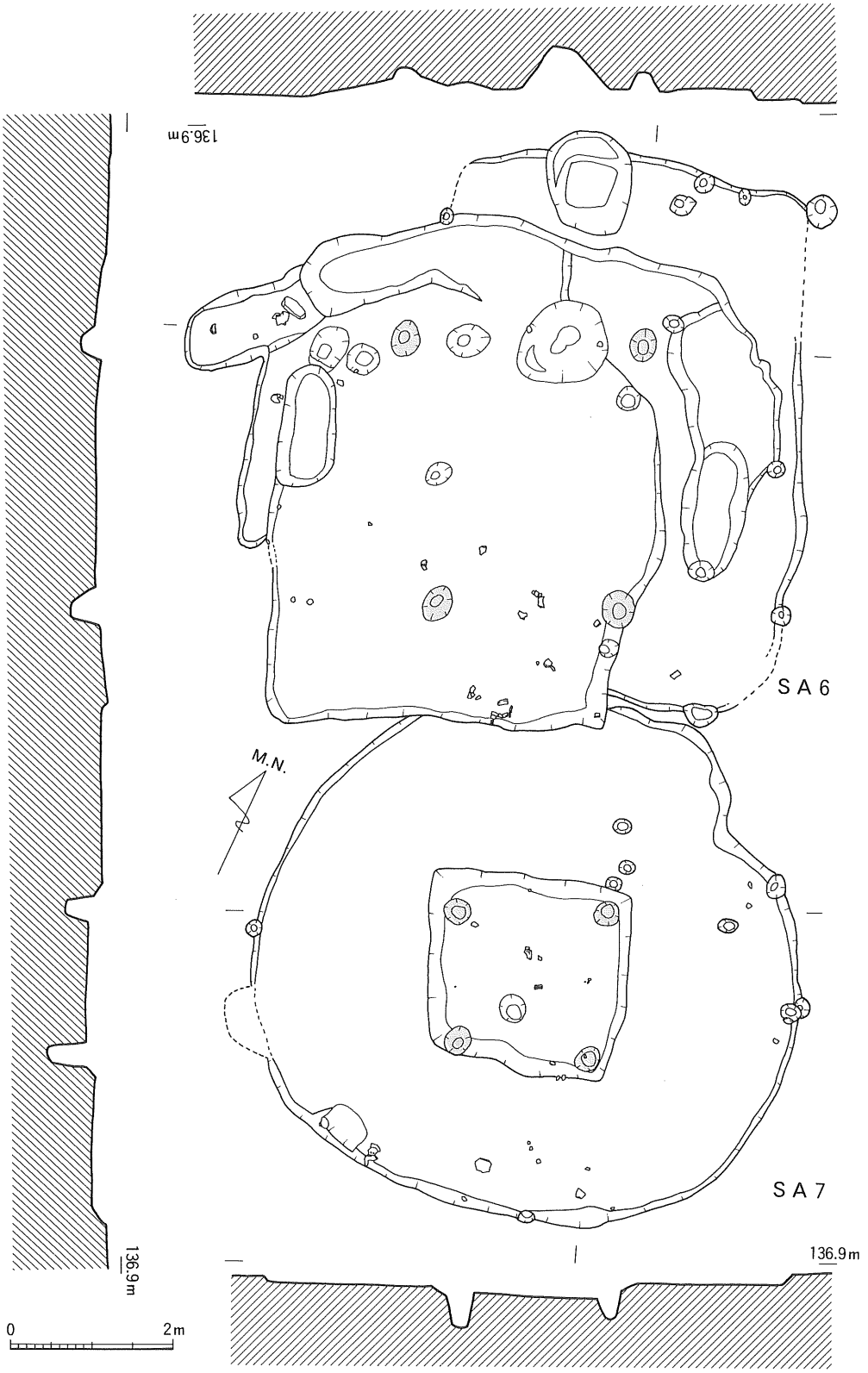
第５図　ＳＡ５出土遺物実測図（1／4）

整はミガキあるいは丁寧なナデである。26～30は高坏である。26は、半球形の坏部に裾広がりの脚部が付く。脚部は縦方向のミガキ、坏部はナデ調整である。27は、内面に屈曲の段を有する。28は、小型の高坏脚部である。29は、伏鉢形の高坏脚部である。30は、大型の高坏脚部である。円柱状の脚部に大きく開く裾部が付くものと思われ、境に円形の透かしが見られる。外面に縦方向のミガキ、内面に指頭痕が見られる。31は器台である。器受部、裾部ともに大きく外半し開く。器受部径、裾部径がほぼ等しい。外面はナデ、内面は指ナデである。32～38は鉢である。32と33は、円盤状の底部を持つ。35・36は丸みのある半球形のプロポーションである。37・38は外傾する口縁外面に櫛描波状文を持つ。39～42は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕は明瞭に残る。

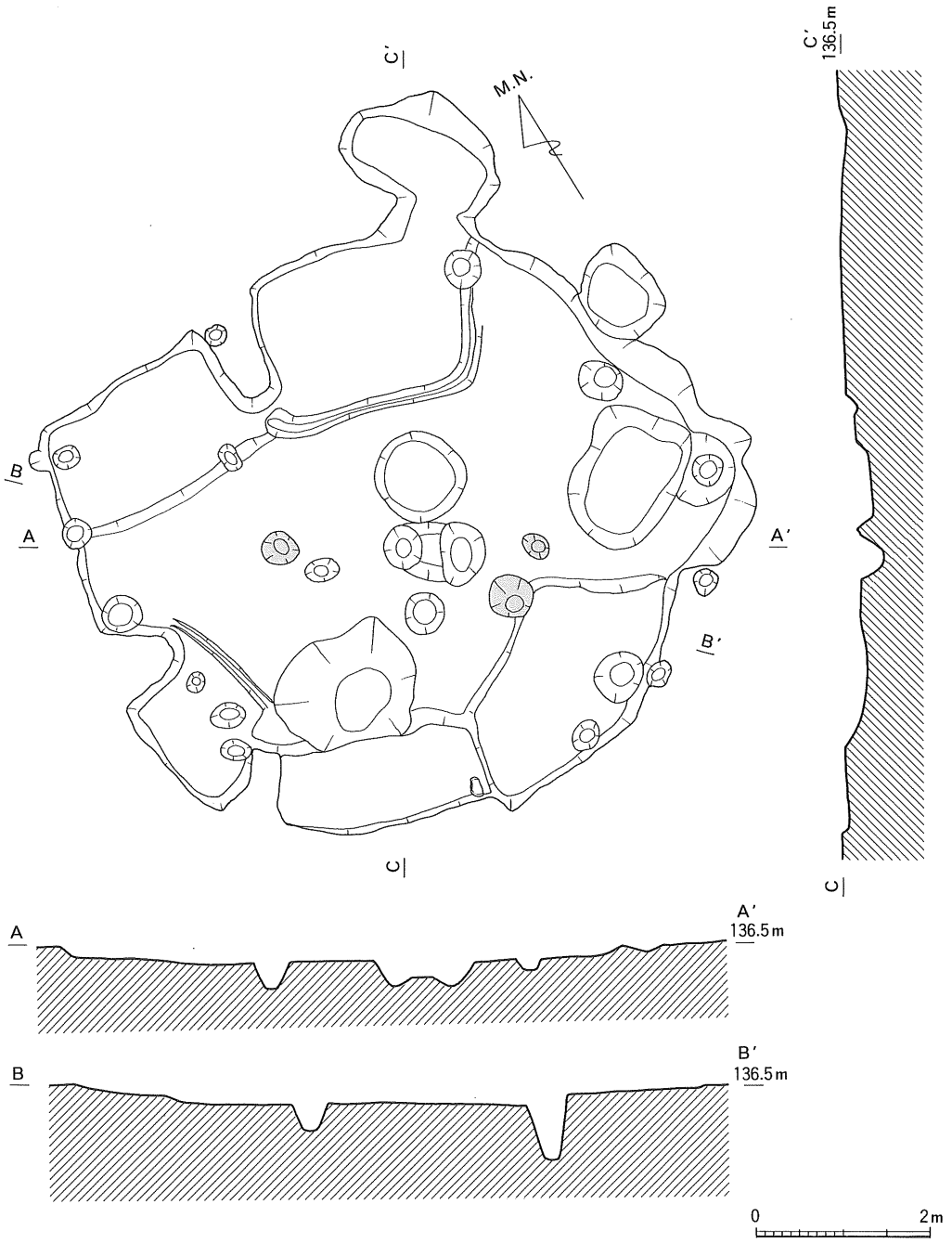
ＳＡ６・ＳＡ７（第６図）

ＳＡ６は、一辺７ｍの方形基調プランである。北側及び東側は外に張り出し、床面はベッド状に高まっており、プランの拡張の可能性も指摘される。主柱穴は４基で、床面には御池ボラと黒色土の混土が硬化した状態で約５㎝の厚みで見られた。西壁際には方形の土坑が見られ、完形の器台が出土している。他に若干の土器類が床面近くで出土している。（第８図43～50）。43は小型の甕の口縁部である。口縁部下に断面三角形の突帯が見られる。44・45は甕の底部で、45は僅かに上げ底となる。46は小型壺で、いわゆる小型丸底壺の影響を受けたものである。外器面はミガキが顕著である。47は、円柱状の高坏脚部で、縦方向のミガキが顕著である。円形透かしが見られる。48は住居内の方形土坑から出土した器台である。器受部、裾部ともに大きく外半し開く。器受部内面は丁寧なナデ、外面はハケ目調整である。脚部にはミガキが施され、円形の透かしが８ヵ所に見られる。49は鉢である。外器面はミガキが施される。平底であるが、平坦面は小さく丸底に近い。50は遺構検出面から出土した打製石器である。頁岩製で、偏平な剥片の両縁に細かな加工痕が見られる。先端部は僅かに欠損しているものと思われる。石錐的な機能が想定される。

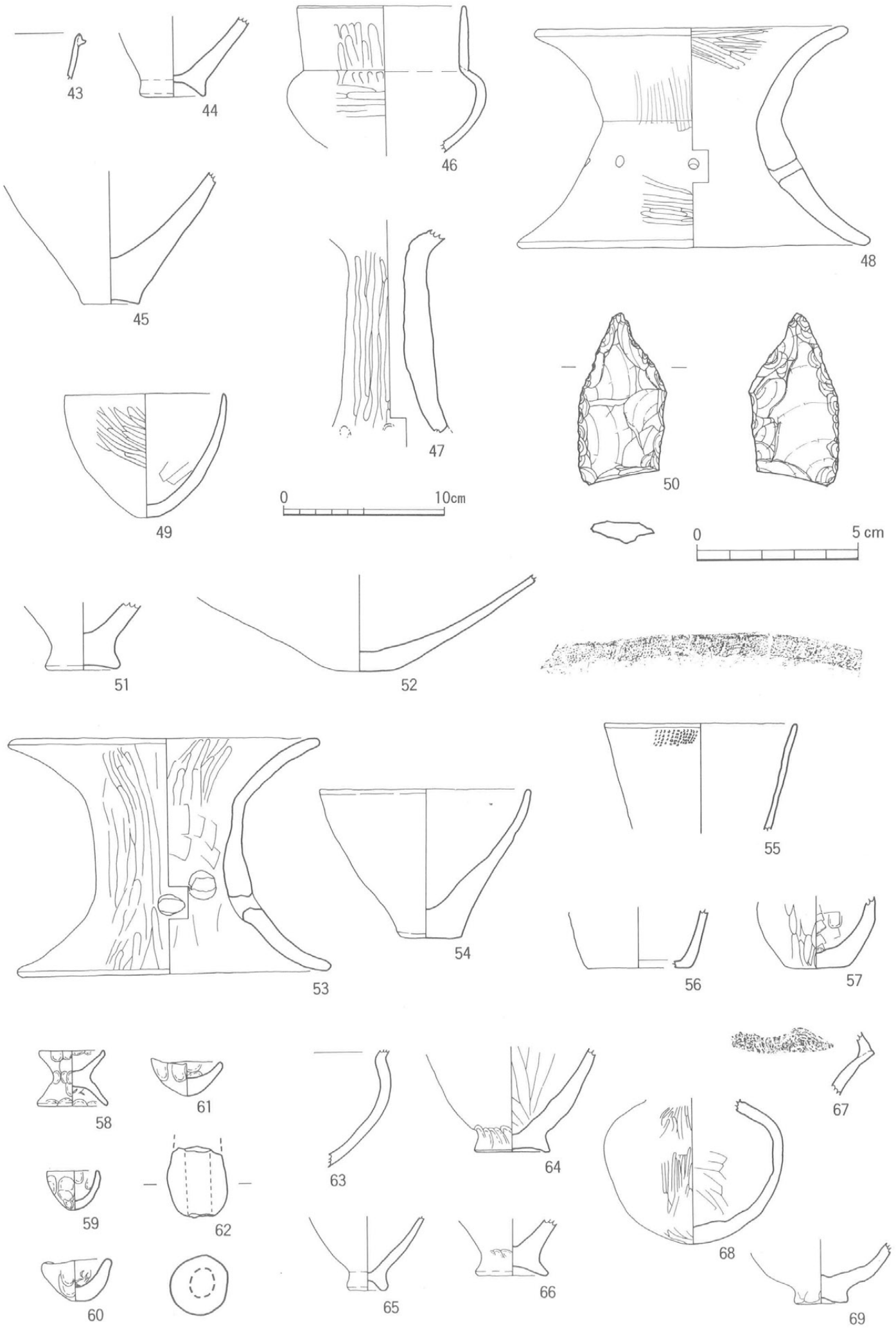
ＳＡ７は、ＳＡ６の南側に接して検出された。２軒ともに検出面からの深さが非常に浅く、埋土に明瞭な差が見られなかったものの、御池ボラの含まれる比率の僅かな差から、ＳＡ７が先行するものと判断された。径6.6ｍの円形プランで、床面中央部は一辺2.4ｍの方形に段落ちしている。主柱穴は４基で、方形の段落ちの四隅に位置する。床面には明確な貼り床は見られなかったものの、黒色土の若干滲んだ御池ボラ層が硬化している箇所が認められた。焼土等は確認されなかった。床面に密着する状態で土器が出土している（第８図51～62）。51は、甕の底部である。若干の上げ底となり、外に張り出す。52は、平底の壺底部である。器面は内外面ともにナデである。53は器台で、器受部、裾部ともに大きく外半し開く。器受部径、裾部径がほぼ等しい。外器面および器受部内面はミガキが施される。脚部には略円形の透かしが４方に見られる。54は平底の鉢である。内外面ともに丁寧なナデ調整である。55・56は底部から直線的に立ち上がる鉢である。55は、薄手の器壁に丁寧なミガキが見られ、口縁部には５条の櫛状工具による連続刺突文が施される。56は、薄手の器壁に丁寧なナデ調整が見られる。57はミニチュア土器である。平底の壺形となり、外器面はミガキが施される。58～61は、手づくねのミニチュ



第6図　ＳＡ６・７実測図（Ｓ＝1／80）



第７図　ＳＡ８実測図（Ｓ＝1／80）



第８図　ＳＡ６・７・８出土遺物実測図（50→½，他は¼）

ア土器である。58は高坏形である。指頭痕が明瞭に残る。62は土錘である。

ＳＡ８（第７図）

ＳＡ８は、方形基調の花弁状住居である。長軸約7.8ｍ、短軸約6.4ｍで、主柱穴は２基である。南、北、西の三方にベッド状の高まりが見られ、間仕切り突出壁を３カ所に持つ。床面に貼り床は見られなかった。焼土等は見られなかったものの、主柱穴間に見られた楕円形の落ち込みに若干の炭化物粒が認められた。方形を基調とするプランであるが、２本柱の柱穴配置と若干のズレが見られる。床面上で若干の土器が出土している（第８図63～69、第11図70～72）。63～66は、小型の甕である。63は比較的丸みを持った胴部である。64の底部はやや上げ底気味で、指による強いナデが見られる。65は、高台状の底部を持つ。66は、上げ底の底部で、強く外に張り出す。67は、複合口縁壺の口縁部である。内傾する拡張部には櫛描波状文が施される。68は、やや肩張りする丸底の壺である。外器面は丁寧にミガキが行われる。69は、壺底部である。丸みを持つ胴部に円盤状の底部が付く。70は、高坏の坏部である。明瞭な稜を持つ屈曲部から、大きく外反する口縁部が見られる。71は、器台の脚部である。「ハ」字形に開く直線的な脚部で、円形の透かしを持つ。72は、手づくねのミニチュア土器である。

ＳＡ９（第９図）

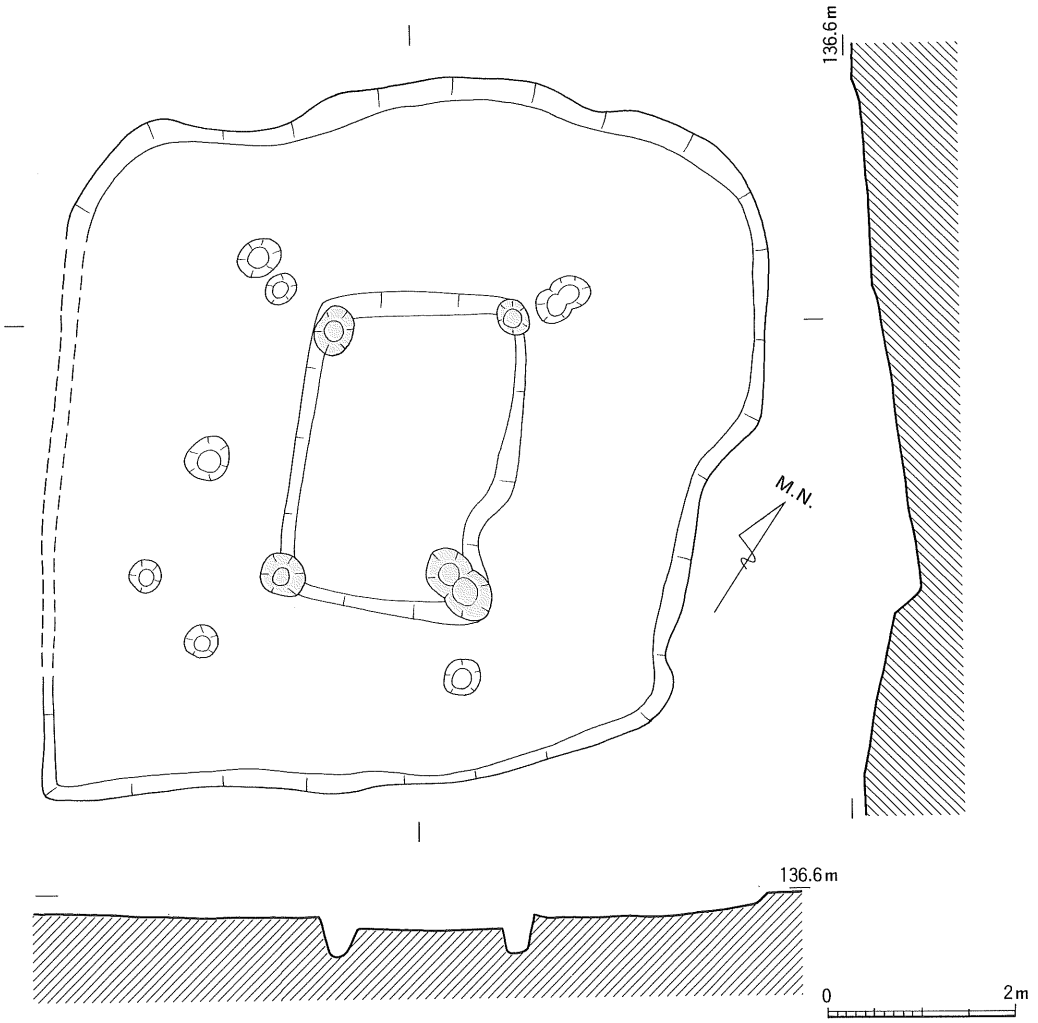
ＳＡ９は、一辺7.4ｍの方形プランである。南東コーナーがやや乱れており、多少歪なプランとなる。床面中央部に長方形の段落ちが見られ、その四隅に主柱穴を持つ。貼り床は見られず、焼土も確認されていない。床面密着で土器が出土している（第11図73～84）。73～75は甕で、73は胴張りせず、僅かに外傾する直線的な口縁部を持つ。74・75は、刻み目突帯を持つ直線的な口縁である。76は、尖底気味の壺底部である。77は、器台の器受部である。上方に折り返された口縁部には、櫛描波状文が施される。78・79は、大きく開く高坏脚裾部である。80～82は、鉢である。80は尖底気味で、砲弾形となる。81は、内湾する口縁部外面に櫛描波状文が施される。82は、器壁が厚くやや大型の鉢である。83・84は、手づくねのミニチュア土器である。

第11図85・86は、ＳＡ10の仮番号を付した位置から出土している。ＳＡ９の南東コーナーに接する位置で黒色土の落ち込みが見られたが、攪乱によりプランを把握し難く、住居跡と認定し得なかった。85は、小型の甕底部である。86は、球形の胴部と僅かに立ち上がる口縁部を持つ無頸壺である。風化が著しく器面調整は不明である。

ＳＡ11・ＳＡ12（第10図）

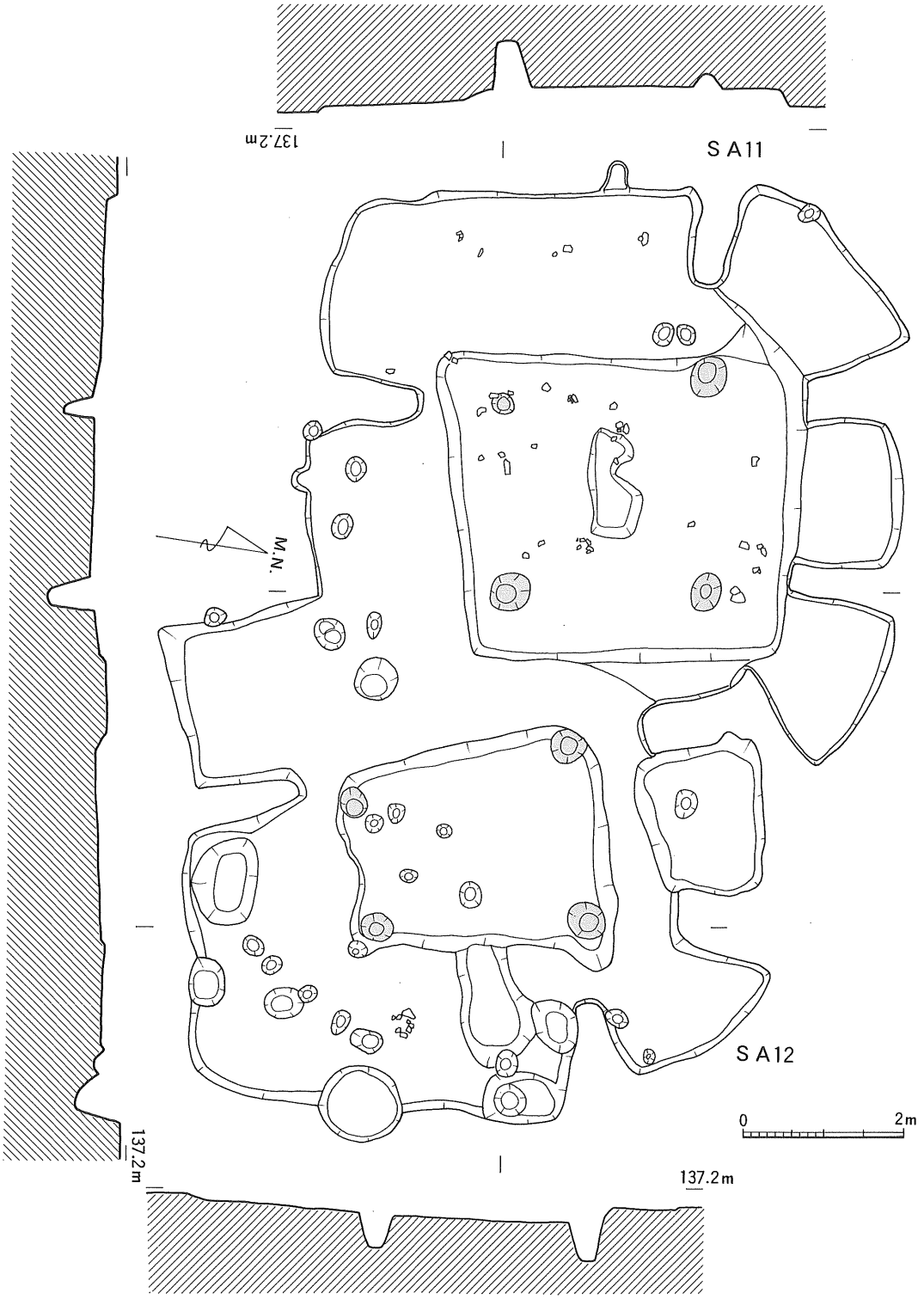
ＳＡ11とＳＡ12は切り合った状態で検出された。ともに方形基調の花弁状住居で、検出面からの深さが浅く切り合いの前後関係は不明である。

ＳＡ11は長軸7.4ｍで、床面中央は4.2×3.8ｍの方形に段落ちし、周囲の張り出し部はベッド状となる。主柱穴は４基で中央部に長方形の土坑を持つ。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。床面から多数の土器片が出土している（第11図87～95、第12図96～105）。87は、甕である。口径と胴部最大径がほぼ等しい。外器面に粗いナデ調整が見られる。88は、小型の甕である。口縁部は指で外へ折り曲げることで成形されており、指頭痕が明瞭に残る。89は甕で、口縁部下に指による押圧刻の

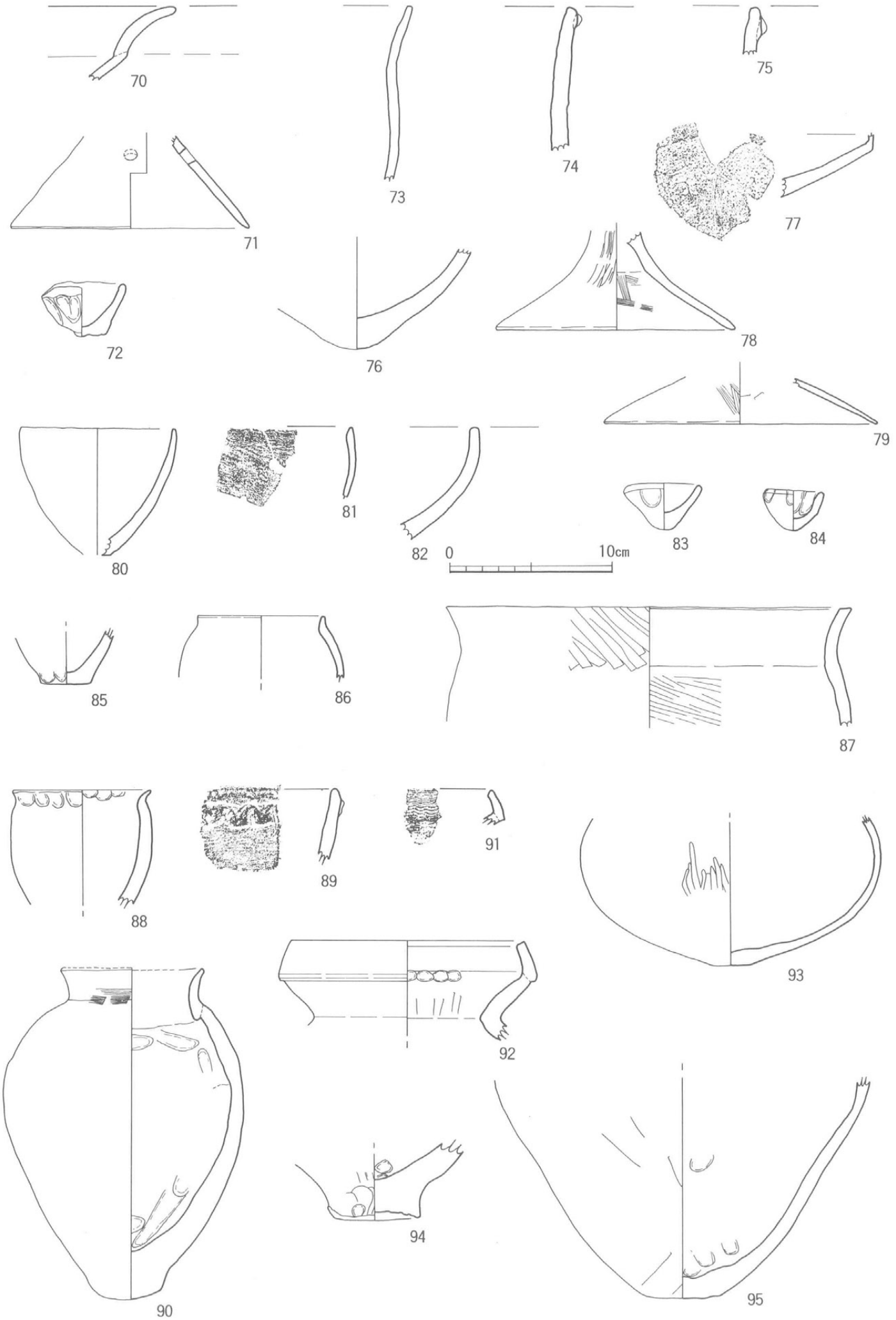


第９図　ＳＡ９実測図（Ｓ＝1／80）

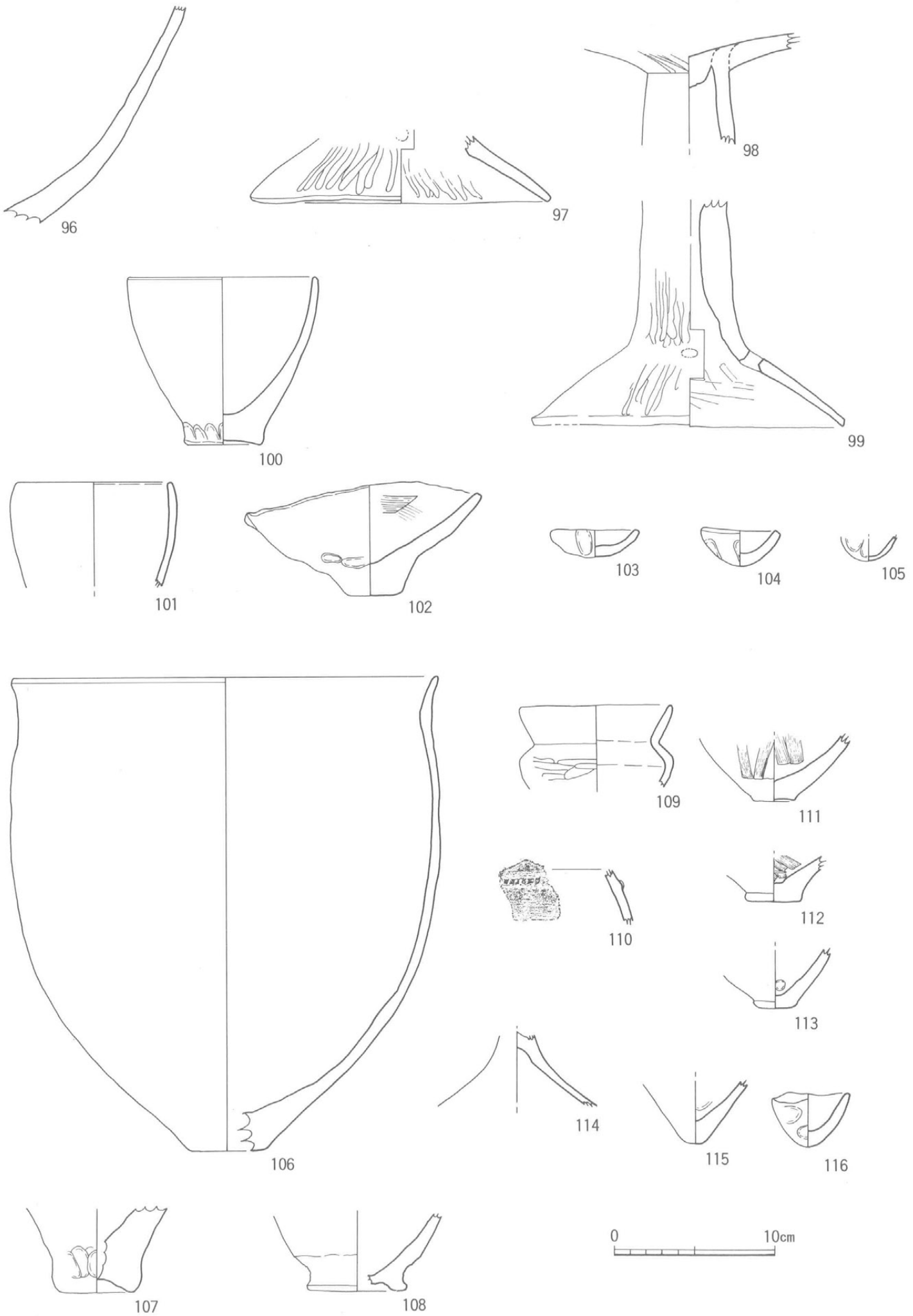
ある貼付突帯が見られる。90は長胴の壺である。口縁部は短く外反する。底部は平底で、粘土塊を貼りつけ肥厚させている。91は複合口縁の壺で、拡張部には櫛描波状文が施される。92は、複合口縁壺で、口縁部は短く「く」字形に屈曲する頸部を持つ。93は、タマネギ形の胴部を持つ壺で、器壁は薄く丁寧にミガキが施される。底部は、平坦面の小さな平底となる。94は円盤状の底部を持つ壺で、若干の上げ底気味になる。指頭痕が明瞭である。95は大型の壺で平底である。97は、高坏の脚裾部である。伏鉢形で内外面ともにミガキが見られる。円形の透かしが見られる。98は、高坏の坏部と脚部の接合部分である。坏底部の粘土塊を脚部に差し込み、脚部外面からも粘土を継ぎ足している。99は高坏脚部で、縦方向のミガキが顕著である。四方に円形透かしを持つ。100～102は鉢で、100・101はやや内湾気味に直立する口縁である。底部は若干の上げ底で外面に指頭痕が明瞭に残る。102は大きく開き器高が低い。全体に作りが粗雑で、口縁部も歪である。103～105は手づくねのミニチュア土器である。



第10図　ＳＡ11・12実測図（Ｓ＝1／80）



第11図　ＳＡ８・９・10・11出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）



第12図　ＳＡ11・12出土遺物実測図（Ｓ＝1／4）

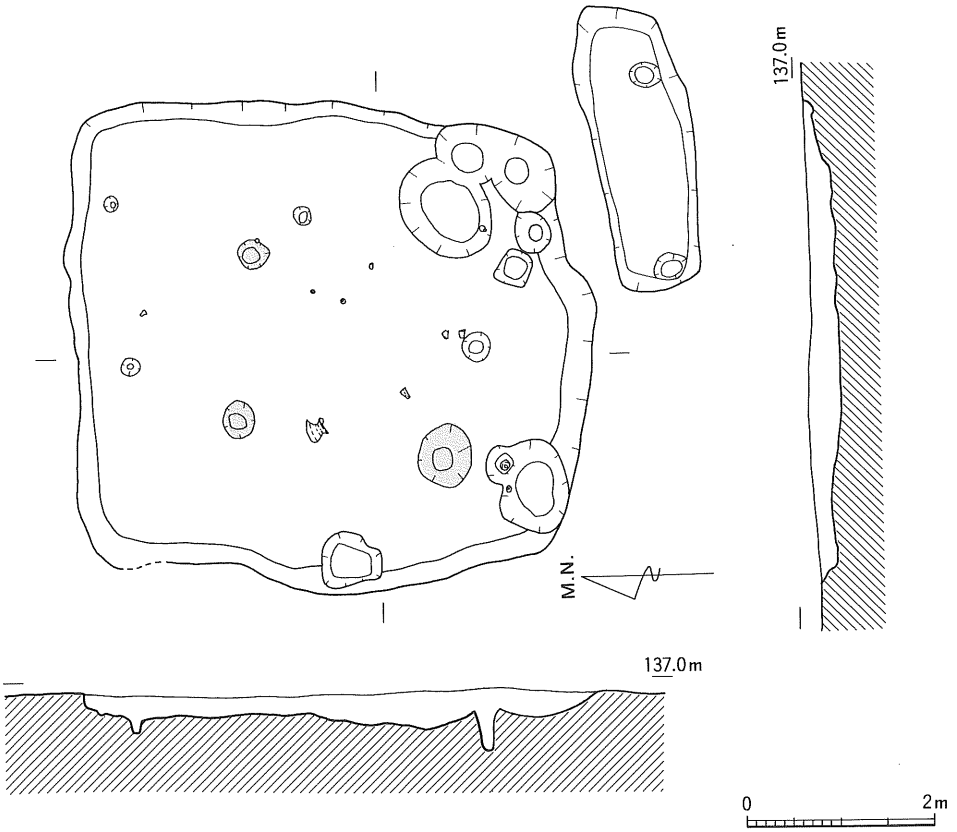
ＳＡ12は長軸7.2ｍで、底面中央は3.2×2.6ｍの方形に段落ちし、周囲の張り出し部はベッド状となる。主柱穴は４基で、床面の方形段落ちの四隅に位置する。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。床面から土器片が出土している（第12図106～116）。106は甕で、丸みを持つ胴部に屈曲の弱い頸部と短く外傾する口縁部を持つ。器壁は全体に薄い。107は、強い上げ底の甕底部である。108は高台状の底部を持つ。109は小型丸底壺の影響を受けている。外器面は丁寧にミガキが施される。110は肩部に１条の刻目突帯を持つ壺である。111～113は壺底部でいずれも平底である。丁寧なナデ調整である。114は小型の高坏で、裾広がりの脚部である。115は、尖底気味の鉢である。116は手づくねのミニチュア土器である。

ＳＡ13（第13図）

ＳＡ13は、5.5×5.2ｍの方形プランである。主柱穴は４基で、床面に貼り床は見られず、御池ボラの硬化も顕著ではなかった。焼土も確認されていない。検出面からの深さは約20㎝で、床面近くから完形の器台など土器が出土している（第15図117～130）。117～119は鉢である。いずれも平底である。117は完形で、円盤状の底部を肥厚させている。118は底部を肥厚させている。120は高坏の脚部である。三方に円形の透かしを持つ。121～124は櫛描波状文が施される装飾器台である。121・122は上方に短く延びる口縁帯外面に、123は口縁部外面に、124は外反する口縁部内面に見られる。125は器受部が大きく開く胴太の器台である。口径が底径を大きく上回る。三方に円形透かしを持つ。内外面ともに丁寧なナデ調整である。126～129は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。130は検出面に出土した打製石鏃である。細身の二等辺三角形状で基部がやや凹む。頁岩製。

ＳＡ14（第14図）

ＳＡ14は、方形基調の花弁状住居である。北、西壁のみにベッド状の張り出し部を設ける。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。主柱穴はＰ１、Ｐ２の２基と思われるが、北壁張り出し部のプランの歪み等を考慮すればＰ３～Ｐ６の４基あるいはＰ７・Ｐ８を加えた６基の可能性も考えられる。方形プランからの北、西側への拡張ととらえるならば、２本柱から４本あるいは６本柱への移行ともとらえられようか。床面近くから土器が出土している（第15図131～143、第17図144）。131は上げ底気味の甕底部である。132は外に張り出し強い上げ底となる甕底部である。133は壺の口縁部である。134～136は小型丸底壺の影響を受けたものと思われる。134は乳房状に突起を持ち、136は若干の平坦面を持つ。137は、焼成前底部穿孔の壺である。138・139は高坏脚部である。138は円柱状の脚に伏鉢形の裾部が付く。未貫通の円形透かしを四方に持つ。器壁は風化気味であるが縦方向のミガキ調整であろうと思われる。139は坏部との接合面で剥離している。坏底部の粘土塊が差し込まれるものと思われる。140は器台である。楯形の透かしが見られる。141は底部が大きく、直立気味の体部をもつ鉢である。薄手の器壁には丁寧なミガキが施される。142は平坦面の小さな平底の鉢である。143は、手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。144は両側に抉りを持つ石庖丁である。略長方形で、刃部はやや湾曲する。未貫通の穿孔

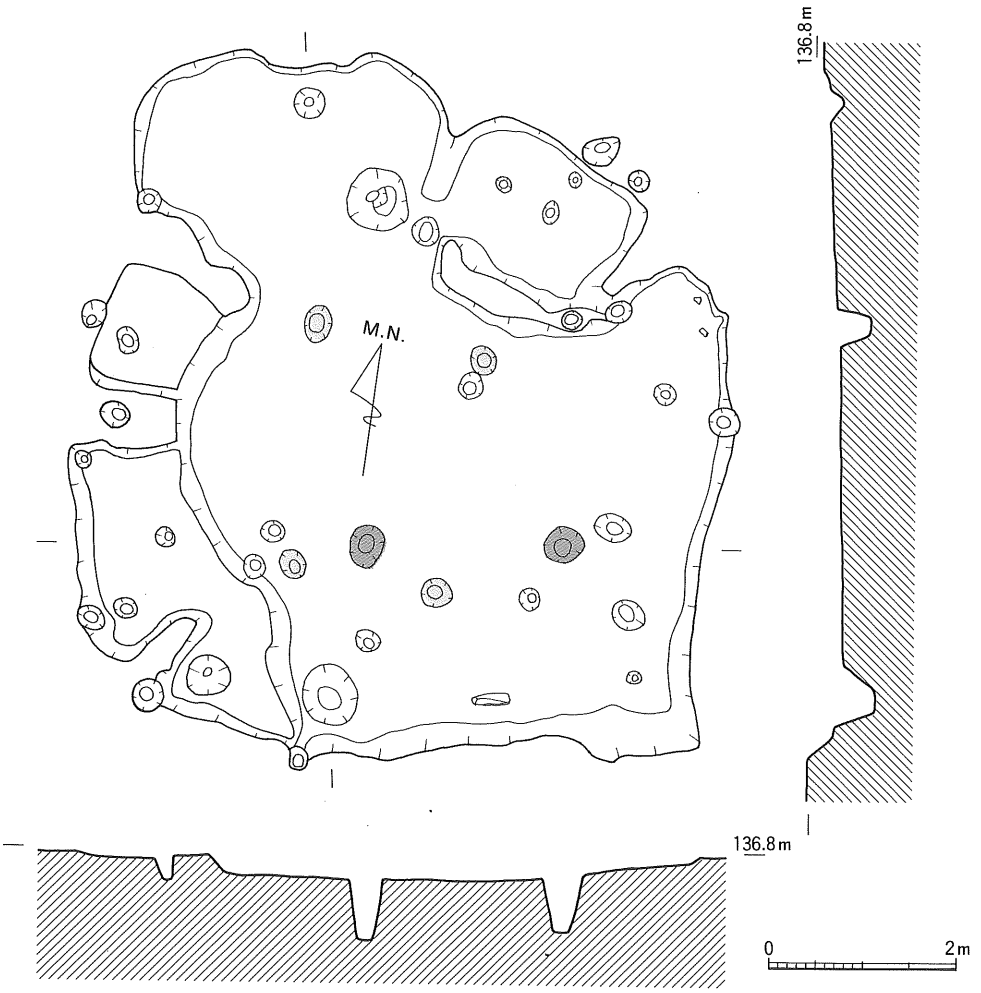


第13図　ＳＡ13実測図（Ｓ＝1／80）

が一カ所に見られる。頁岩製。

ＳＡ15・ＳＡ16（第16図）

ＳＡ15は、円形基調の花弁状住居である。長径7.6ｍ、短径7.0ｍで、突出壁が２箇所に見られる。床面中央には、不製円形の段落ちが見られる。主柱穴は円形配置の５基である。北、西壁際には壁帯溝が検出されたが、全周はしていない。床面に貼り床は見られず、黒色土の若干混じる御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。検出面からの深さは20㎝以下で、床面近くで土器が出土している（第17図145～154）。145は甕で、明瞭な屈曲を見せる頸部に短く外傾する口縁を持つ。胴部中位に最大径を持ち、口径を上回る。器面調整は、内外面ともにハケ目である。146は外反する口縁部を持つ甕で、頸部のくびれは不明瞭である。器面調整は、内外面ともにナデである。147は「く」字形の頸部を持つ壺で、口縁部は短く外傾する。内外面ともにナデ調整である。148は高坏で、内湾する坏底部に大きく外反する口縁部を持ち、内外面に明瞭な稜が見られる。器面は丁寧なミガキ調整である。149は小型の高坏で、坏底部の粘土塊を脚部に差し込み接合している。150は器壁が薄く内湾し半球形のプロポーションの鉢である。151は小さな平底を持つ鉢である。152は平底の片口鉢で、底部から口縁部に直線的に延びる。器壁は粗いナデ調整で、内面に指ナデが見られる。153は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。

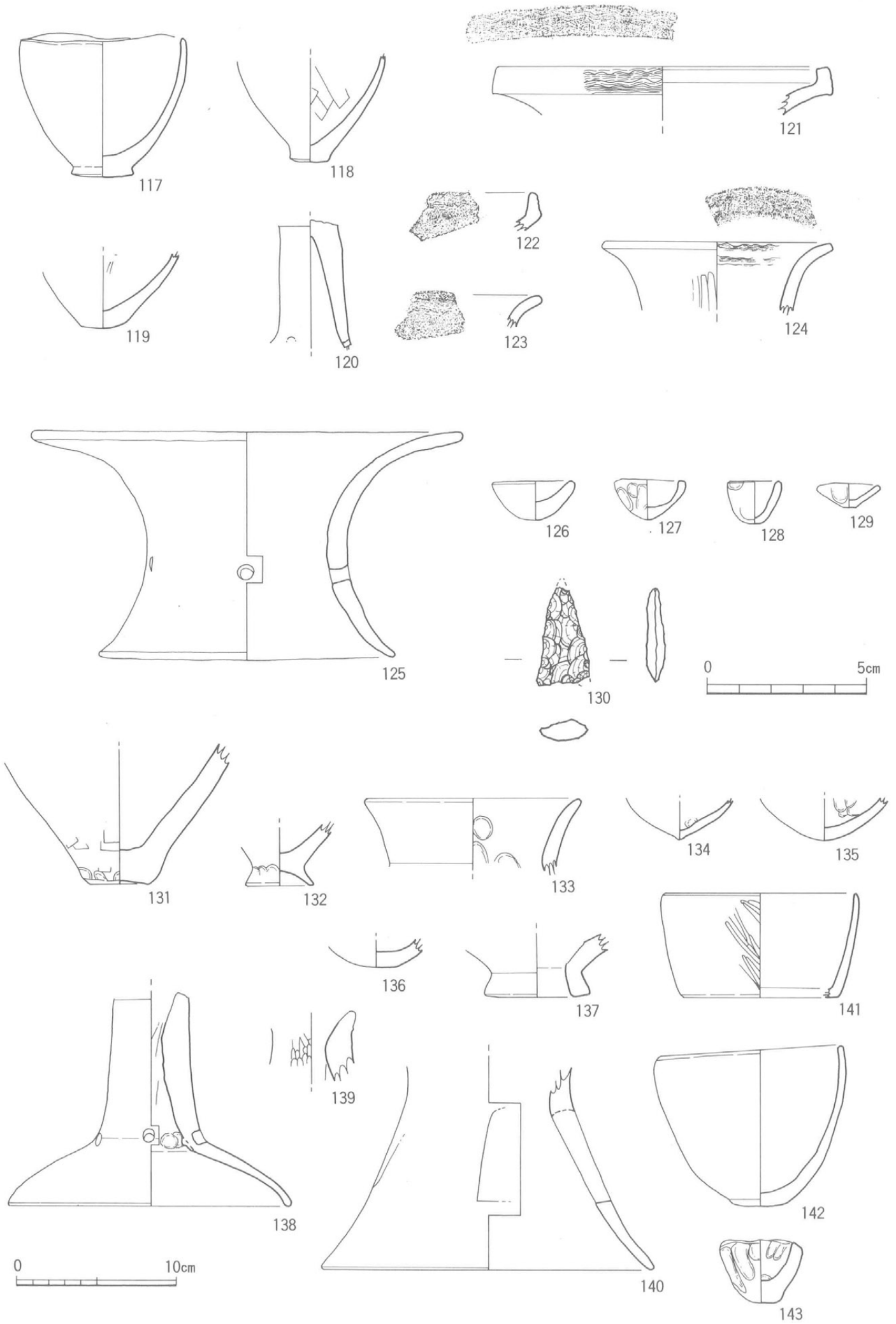


第14図　ＳＡ14実測図（Ｓ＝1／80）

ＳＡ16は、長軸4.4m、短軸3.8mの長方形プランで、北側約３分の１の床面がベッド状に高まる。主柱穴はやや歪な配置となるが４基であろうと思われる。床面には貼り床は見られず、御池ボラの硬化等も確認されなかった。床面からやや浮いた状態で若干の土器片が出土した（第18図155～157）。155は甕で、底部は平底である。器面はハケ目調整である。156・157は高坏脚部である。ともに縦方向のミガキが顕著である。156には、未貫通の穿孔が見られる。157は円形の透かしが見られる。

ＳＡ18・ＳＡ19（第19図）

ＳＡ18は、長軸3.25m、短軸2.8mの方形プランで、壁帯溝が部分的に検出されている。主柱穴は２基で、床面中央に円形の土坑が見られる。床面は御池ボラの掘り抜きで、硬化面は確認されなかった。焼土も見られない。若干の遺物が床面からやや浮いた状態で出土している（第18図158・159）。158は尖底の鉢である。器面にはハケ目調整が見られる。159は砥石である。表裏面ともに擦痕が明瞭に見られる。砂岩製。



第15図　ＳＡ13・14出土遺物実測図（130→½，他は¼）

ＳＡ19は、一辺8.2ｍの四方の方形基調の花弁状住居である。床面中央は5.0×4.8ｍの方形プランで、全周に７ヵ所の突出部が見られる。主柱穴はＰ１～Ｐ４の４基と思われるが、Ｐ５・Ｐ６を加えた５基の可能性もある。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。床面中央部には浅い土坑が見られ、若干の炭化物を含む埋土が見られた。床面近くから土器が出土している（第18図160～163）。160は甕である。ナデ調整の器面には厚く煤が付着する。161は壺胴部である。器面は丁寧なナデ調整で、内面には粘土の輪積痕が観察される。162は内湾し球形の胴部を持つ無頸壺である。薄手の器壁外面にはミガキが見られる。163は鉢である。斜め方向のナデ調整である。

ＳＡ20・ＳＡ22（第20図）

ＳＡ20は、長軸3.8ｍ、短軸3.5ｍの方形プランである。床面は御池ボラの掘り抜きで貼り床は見られず、硬化面も確認されなかった。焼土は検出されていない。壁際には壁帯溝が検出されている。約20基のピットが検出されたが、いずれも浅いもので主柱穴の判断はつかなかった。遺物はほとんど見られず、小型の高坏片が１点出土したのみである（第18図164）。

ＳＡ22は、一辺4.8ｍ四方の方形プランである。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。主柱穴は２基である。やや西寄りの位置に検出されたピットから完形の甕が出土している。その他若干の土器が床面上から出土している（第23図168～173）。168は甕である。やや上げ底気味の底部に、張りの弱い胴部、指ナデにより外反させた口縁部を持つ。胴上部に見られる最大径と口径はほぼ等しい。169・170は甕で、短く外傾する口縁部を持つ。171は高坏である。直線的な坏底部に外反する口縁部がつき、内外面に明瞭な稜を有する。器面は丁寧にミガキが施される。172は高坏脚部である。円柱状の器面は風化気味であるが、ミガキあるいは丁寧なナデ調整であろうと思われる。173は丸底の鉢である。口縁部は直線的に延びる。器面にはハケ目が明瞭であるが、外面には一部にミガキが見られる。

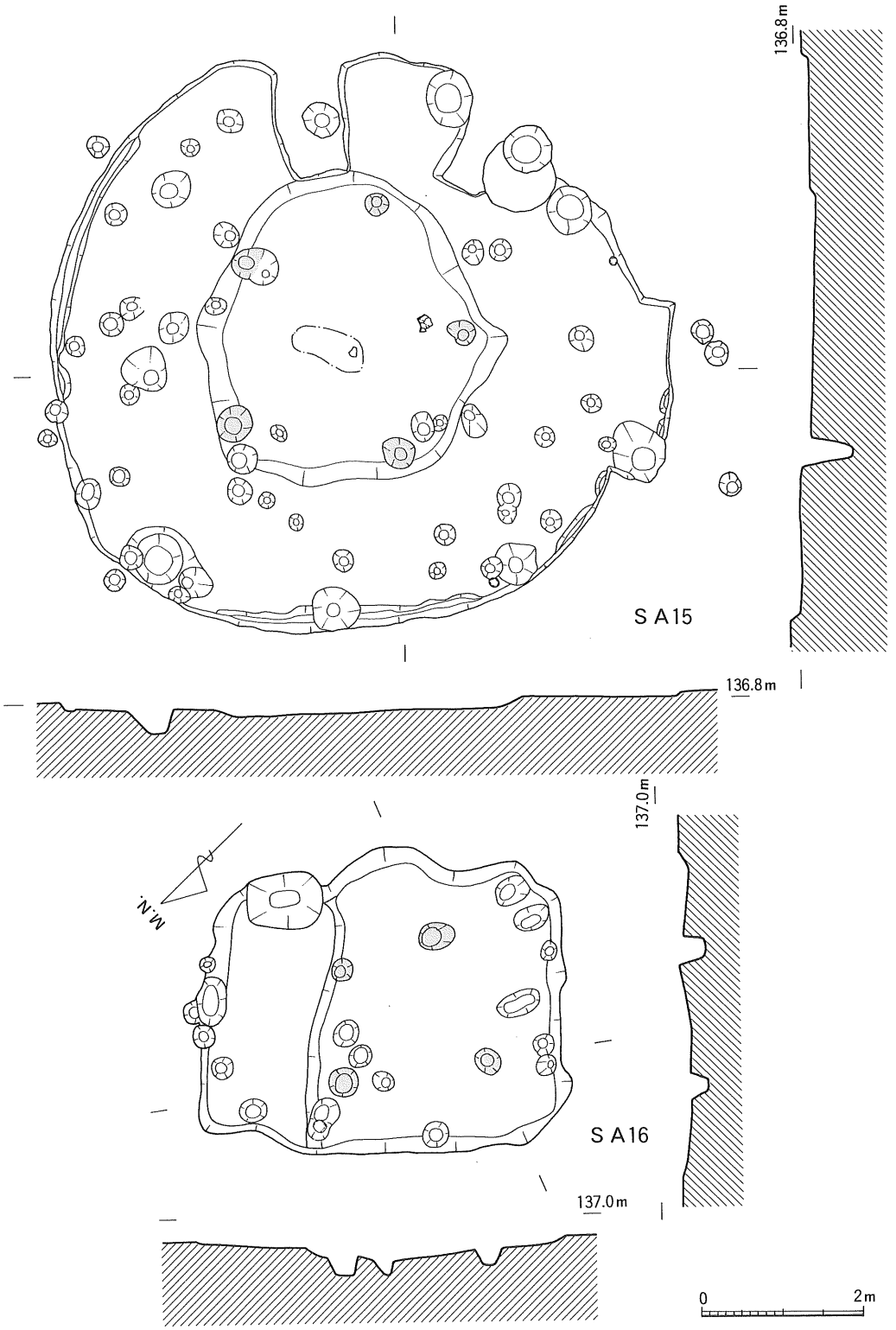
ＳＡ21・ＳＡ42（第21図）

ＳＡ21は、長軸4.0ｍ、短軸3.6ｍの方形プランである。床面には張り床は見られず、御池ボラの掘り抜きで、若干硬化した部分が確認された。焼土は検出されていない。主柱穴は２基で、中心よりやや北寄りに位置する。検出面からの深さは約20㎝で、床面上から若干の土器片が出土している（第18図165～167）。165は甕で、頸部は稜を持たず緩やかにＳ字状にカーブする。器面調整はハケ目である。166は甕の底部でやや上げ底気味となる。167は高坏の脚部で、円形の透かしを持つ。器面調整は丁寧なナデである。

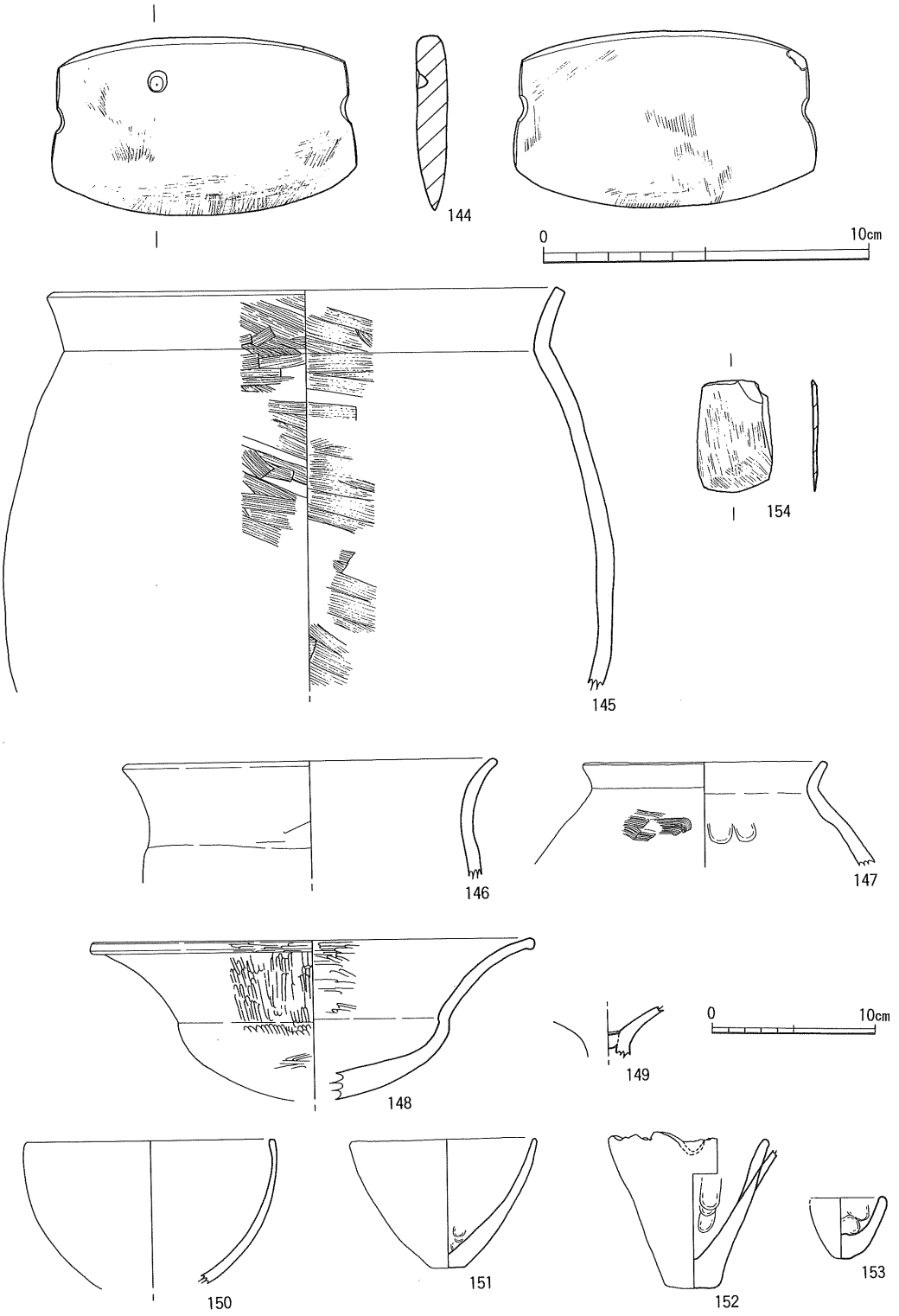
ＳＡ42は、ＳＡ21と切り合って検出された。主軸はＳＡ21と約45°のズレが見られる。検出面からの深さは約15㎝と浅く、床面は御池ボラの掘り抜きで硬化面は確認されなかった。主柱穴は判断し得ない。遺物は出土していない。ＳＡ21との切り合い関係は、埋土の観察よりＳＡ42が先行し、ＳＡ21が後出するものと確認された。

ＳＡ24・ＳＣ５～７・ＳＡ25（第22図）

ＳＡ24は、長軸4.6ｍ、短軸3.6ｍの長方形プランで、検出面からの深さは約30㎝を計る。床面



第16図　ＳＡ15・16実測図（Ｓ＝1／80）



第17図　ＳＡ14・15出土遺物実測図（144･154→½，他は¼）

に硬化面は見られず、御池ボラの掘り抜きである。ピットは床面中央に１基、東壁際に１基が検出されたが、上屋構造に関係する柱穴か否かは判断し得ない。遺物は出土していない。

ＳＡ24を切り込んで、ＳＣ５～７が検出された。ＳＣ５は、長軸1.4ｍの長方形土坑である。遺物は出土していないが、拳大の軽石が数点みられた。ＳＣ６は、長軸60㎝の長方形土坑である。板状の軽石が出土しているが、面取りをした痕跡が見られ、都城地方に多く見られる軽石製の石塔の一部である可能性もある。ＳＣ７は、長軸4.6ｍ、短軸2.3ｍの長方形プランで、検出面からの深さ40㎝を計る。遺物の出土は見られなかった。各遺構の切り合い関係は、ＳＣ７がＳＡ24を切ることが確認されたが、ＳＣ５・６との関係は確認し得なかった。

ＳＡ25は、調査区南西端に検出され、遺構の一部は崖面にかかり検出されなかった。方形基調の花弁状住居である。検出面からの深さは10～15㎝と非常に浅く、遺構の残存状況は悪い。床面に貼り床は見られず、硬化面も確認されなかったことからプランについても不明瞭な部分が存在した。主柱穴は円形配置の５基であろうと思われる。床面からやや浮いた状態で土器が出土している（第23図174～179）。174は甕で、頸部は稜を持たず緩やかにＳ字状にカーブする。底部は上げ底気味で、全体形に対し小さく成形されている。器面調整はナデで、内外面の各所に指頭痕が明瞭に残る。胴上部の最大径が口径を上回る。175は「く」字形に屈曲する頸部を持ち、口径が胴部最大径をやや上回る。器面調整はハケ目である。176～178は壺である。平底で、器面調整は丁寧なミガキである。178は肩部に線刻を持つ。179はコップ形の土器でほぼ垂直に立ち上がる器面は丁寧なナデ調整である。

ＳＡ26・ＳＣ３・ＳＣ８（第24図）

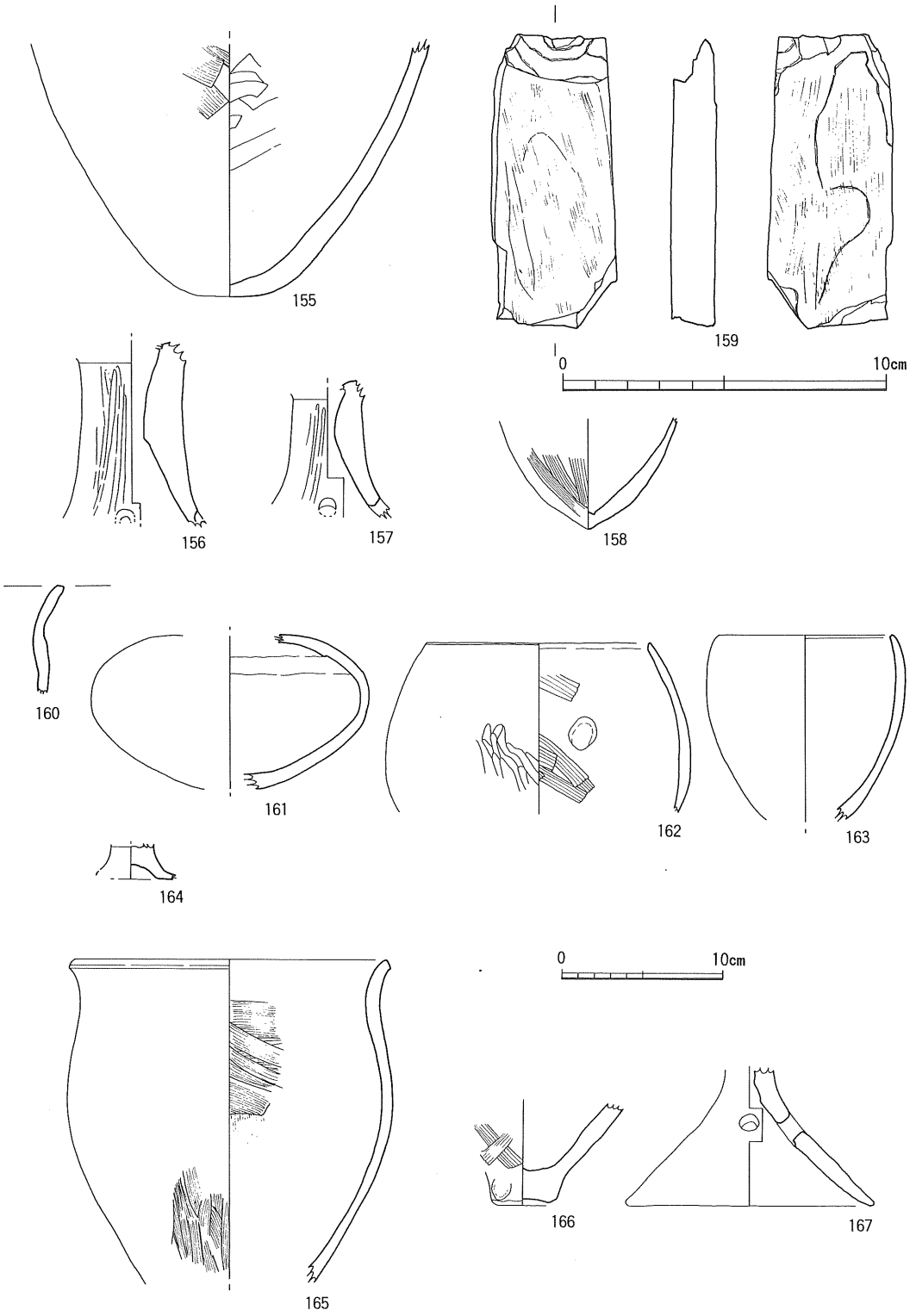
ＳＡ26は、方形基調の花弁状住居である。長軸5.6ｍ、短軸5.0ｍの方形プランに、南壁に２カ所の張り出し部を持つ。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。主柱穴は４基である。床面中央部に長方形の土坑が見られ、炭化物を多少含む埋土が確認された。検出面からの深さは20㎝以下と浅く、遺構の残存状況は良好とは言い難い。遺物は若干の土器片が出土した（第26図189・190）。189は甕の頸部で、刻み目突帯を持つ。190は手づくねのミニチュア土器である。

ＳＣ３は、ＳＡ26の北コーナー横に検出された。長軸2.6ｍ、短軸2.0ｍの長方形プランの竪穴状遺構である。検出面からの深さは15㎝を計る。床面に硬化面は見られず、御池ボラの掘り抜きである。ピットが数基検出されたが、上屋構造に関係するものか否かは判断し得ない。遺物は甕の破片が１点のみ出土した（第33図216）。216は、胴部が張らず口縁部が大きく外傾する小型の甕である。器面調整はハケ目である。

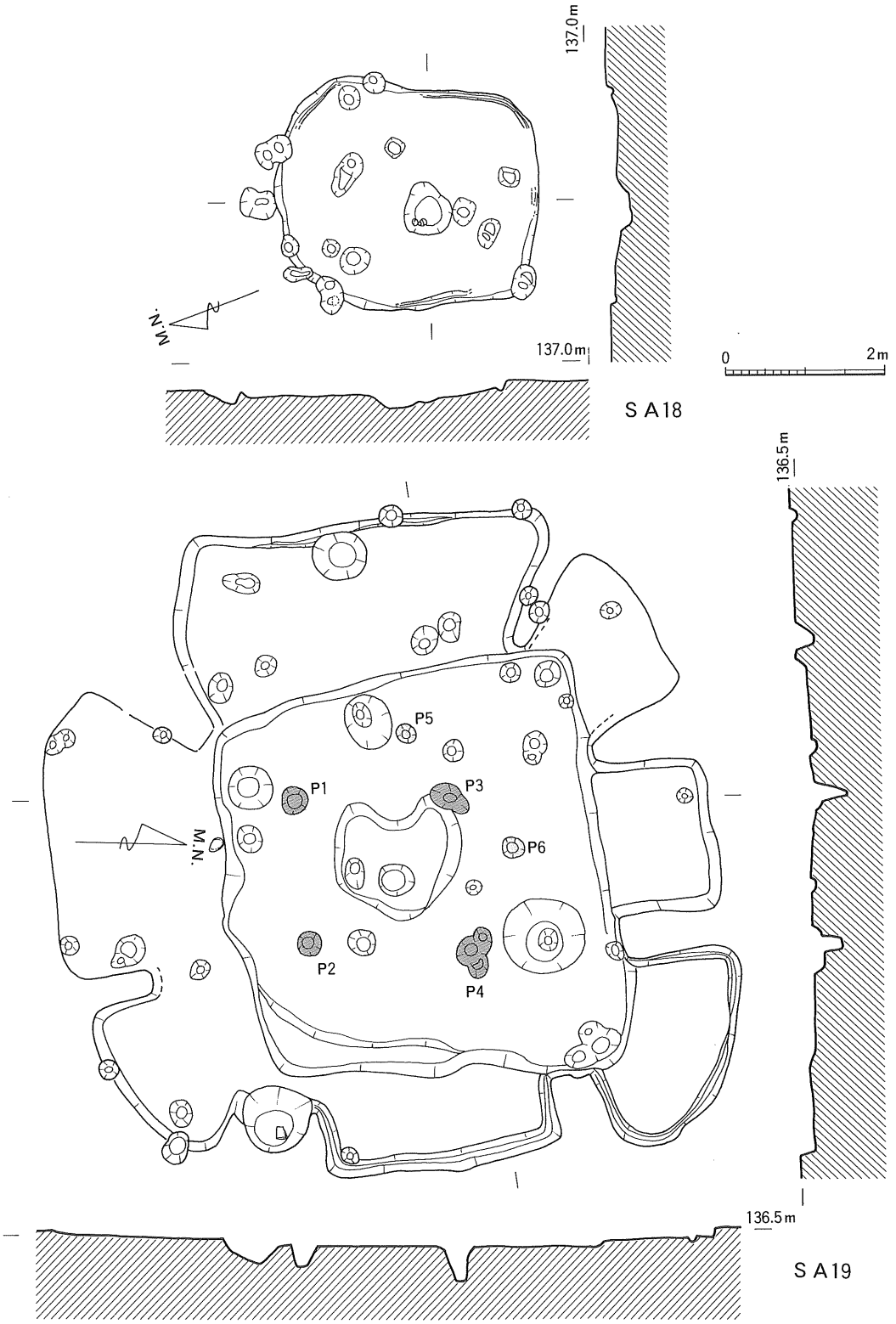
ＳＣ８は、ＳＡ26の東壁横に検出された円形土坑である。径1.1ｍ、検出面からの深さは30㎝を計る。床面近くから銭貨７～８枚が融着した状態で出土しており、近世墓である可能性が高い（第33図222）。正確な枚数と銭種は確認できない状態である。他に遺物や有機物は確認されていない。

ＳＡ27・ＳＡ28・ＳＡ29（第25図）

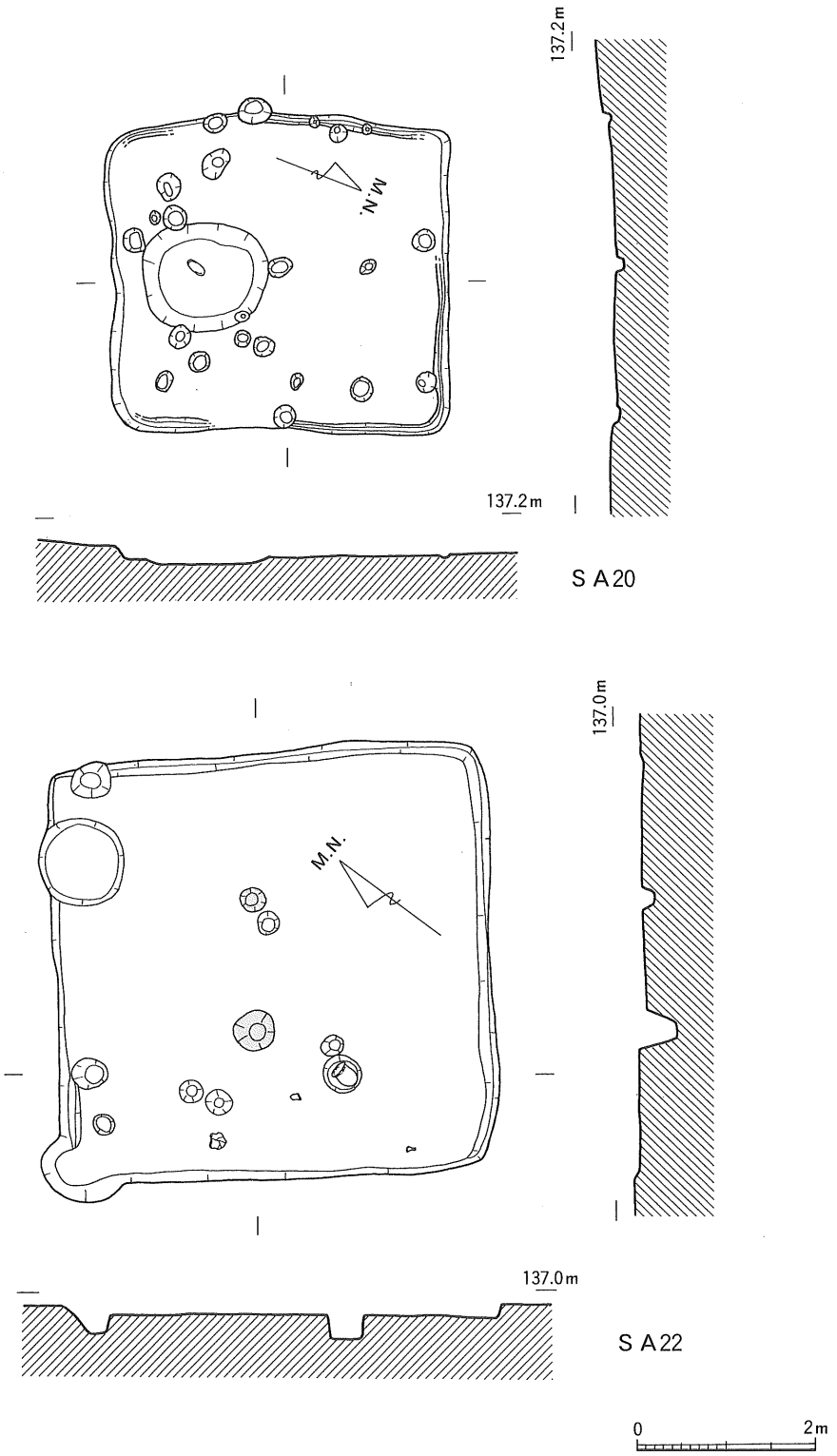
ＳＡ27は、方形基調の花弁状住居である。一辺約６ｍの方形プランで南北両壁に２カ所づつ



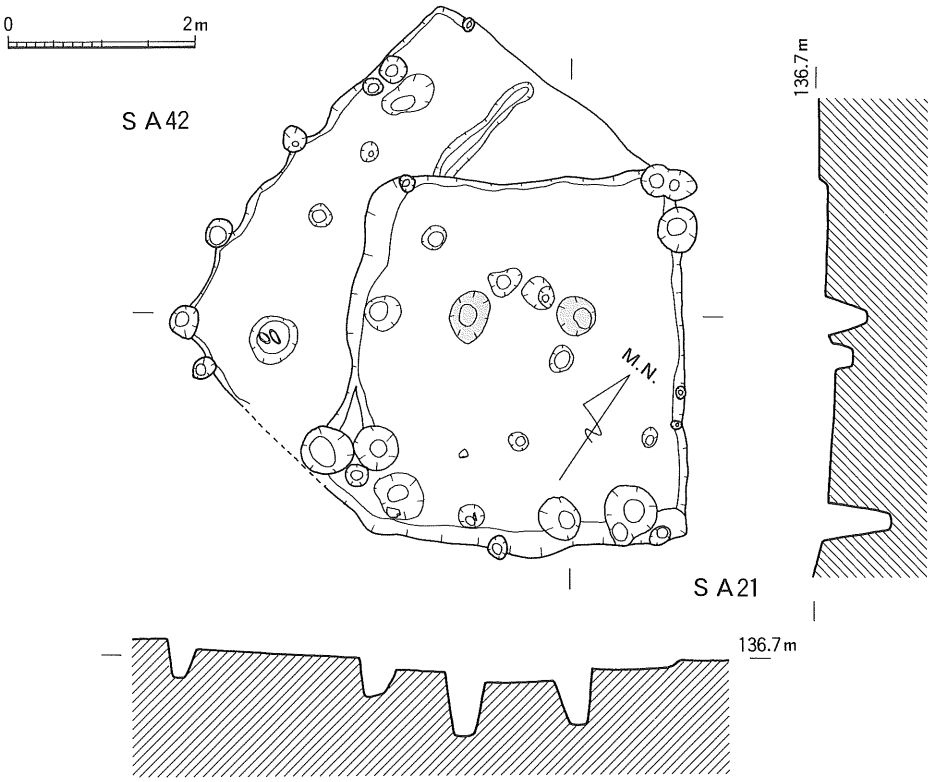
第18図　ＳＡ16・18・19・20・21出土遺物実測図（159→½，他は¼）



第19図　S A18・19実測図（S＝1／80）



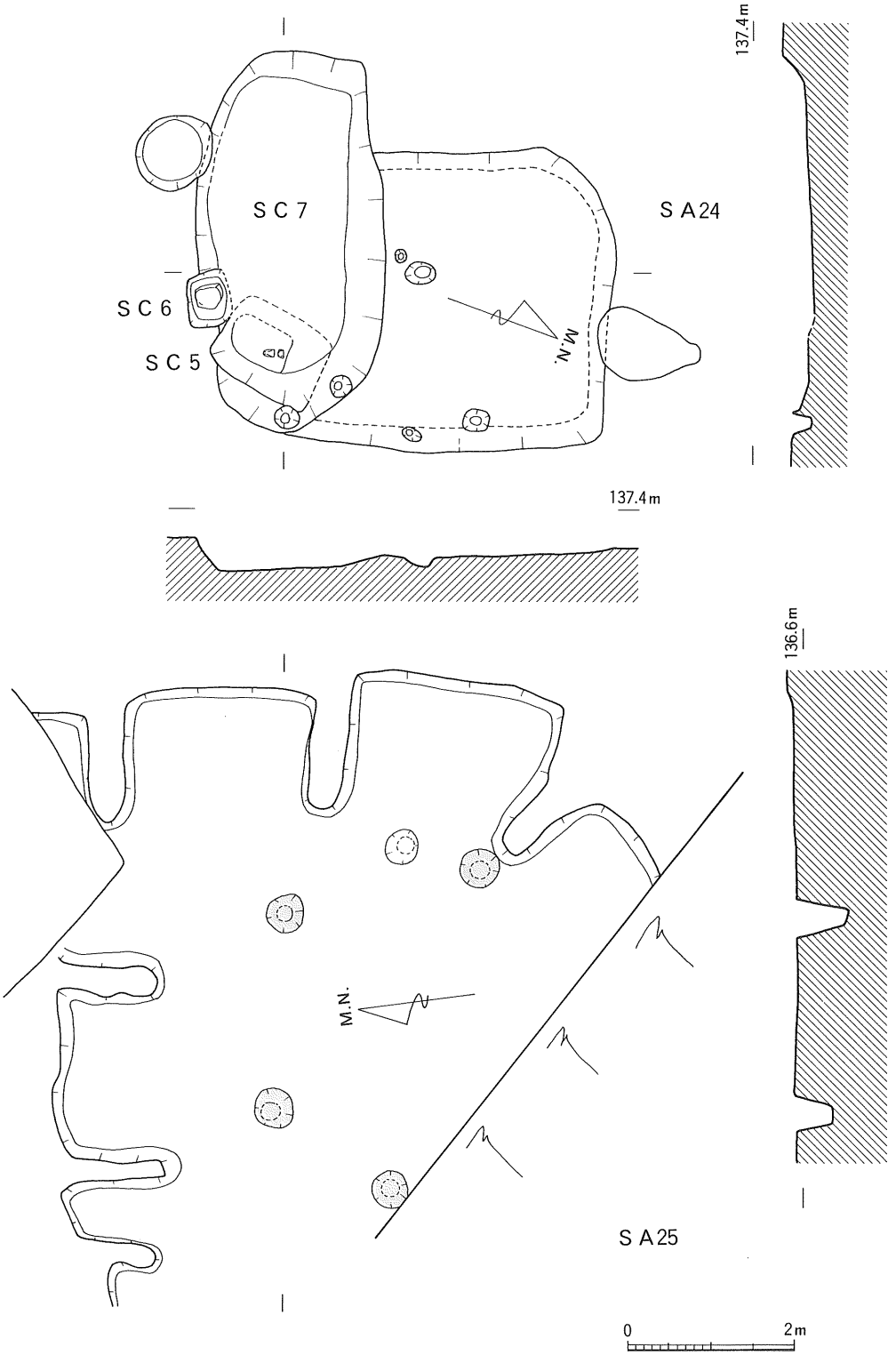
第20図　ＳＡ20・22実測図（Ｓ＝1／80）



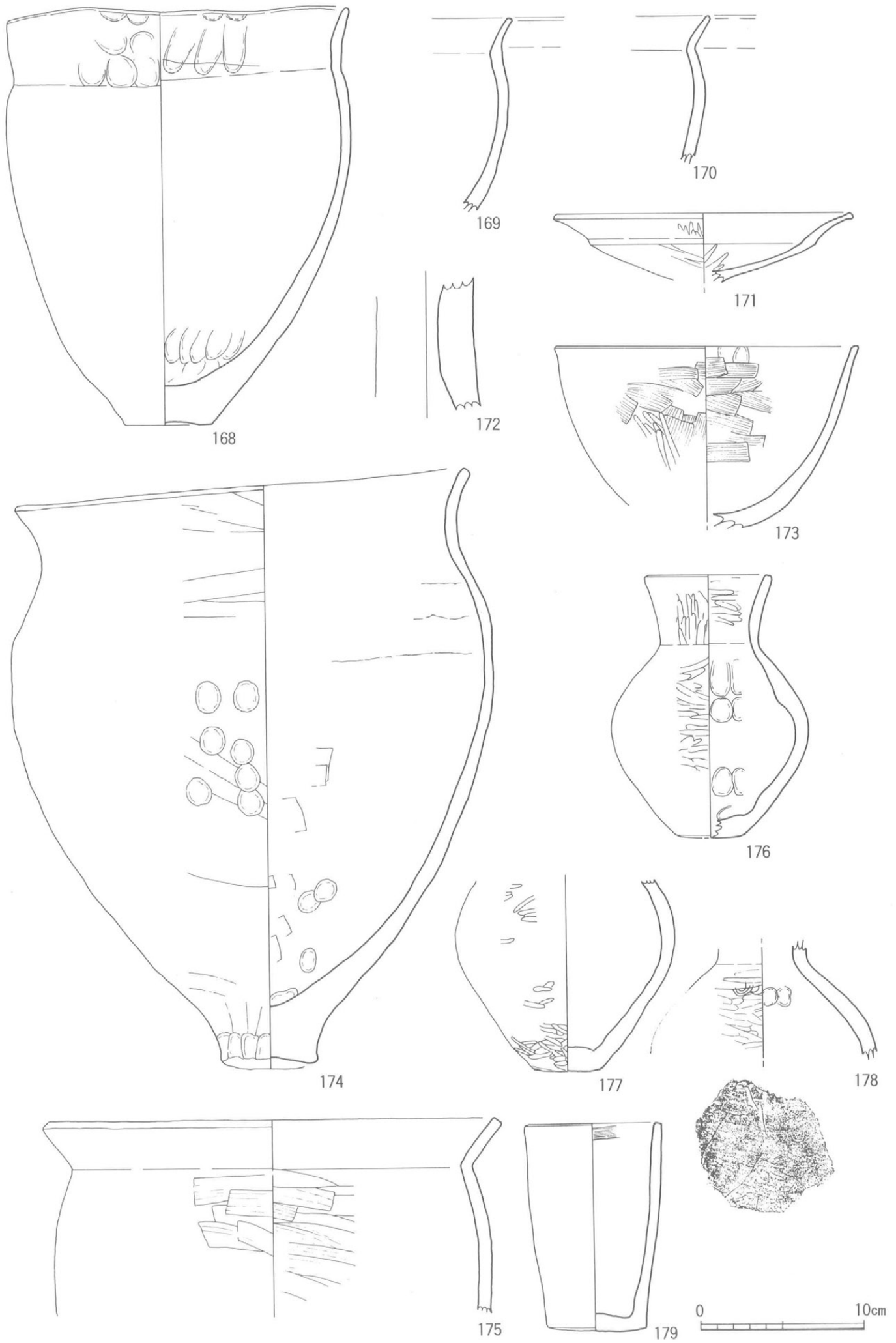
第21図　ＳＡ21・42実測図（Ｓ＝1／80）

の突出壁を持つ。南東コーナー部と突出壁にて区画される西３分の１の部分がベッド状に高まる。床面は、明瞭な貼り床ではないものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。焼土は確認されていない。主柱穴は４基で、各突出壁の先端部分に位置する。床面中央部やや北西寄りの位置に、径1.1ｍ、深さ約15㎝の円形土坑を持つ。埋土には若干の炭化物粒が含まれていた。床面上から完形品を含む土器、石庖丁が出土している（第26図180～188）。180は完形の甕で、底部は上げ底である。張りの弱い胴部に、緩やかに外反する口縁部を持つ。器面調整はハケ目で、口縁部内面には指ナデが見られる。181はやや外に張り出す上げ底の底部と、屈曲し大きく外傾する口縁部を持つ。器面調整はナデであるが、成形時の粗い工具痕（ケズリか）が一部に残る。182は複合口縁壺の口縁拡張部である。櫛描波状文が施される。183は鉢の口縁部で、直口の口縁部外面に櫛描波状文が施される。184は完形の鉢で、円盤状の底部を持つ。器面調整は丁寧なナデである。185～187は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。188は砂岩製の長方形石庖丁である。刃部は直線的で、背部はやや湾曲する。両側から穿孔された二孔を持つが、片面にはややずれた位置に穿孔の痕跡が残る。全面に研磨痕が明瞭に見られる。

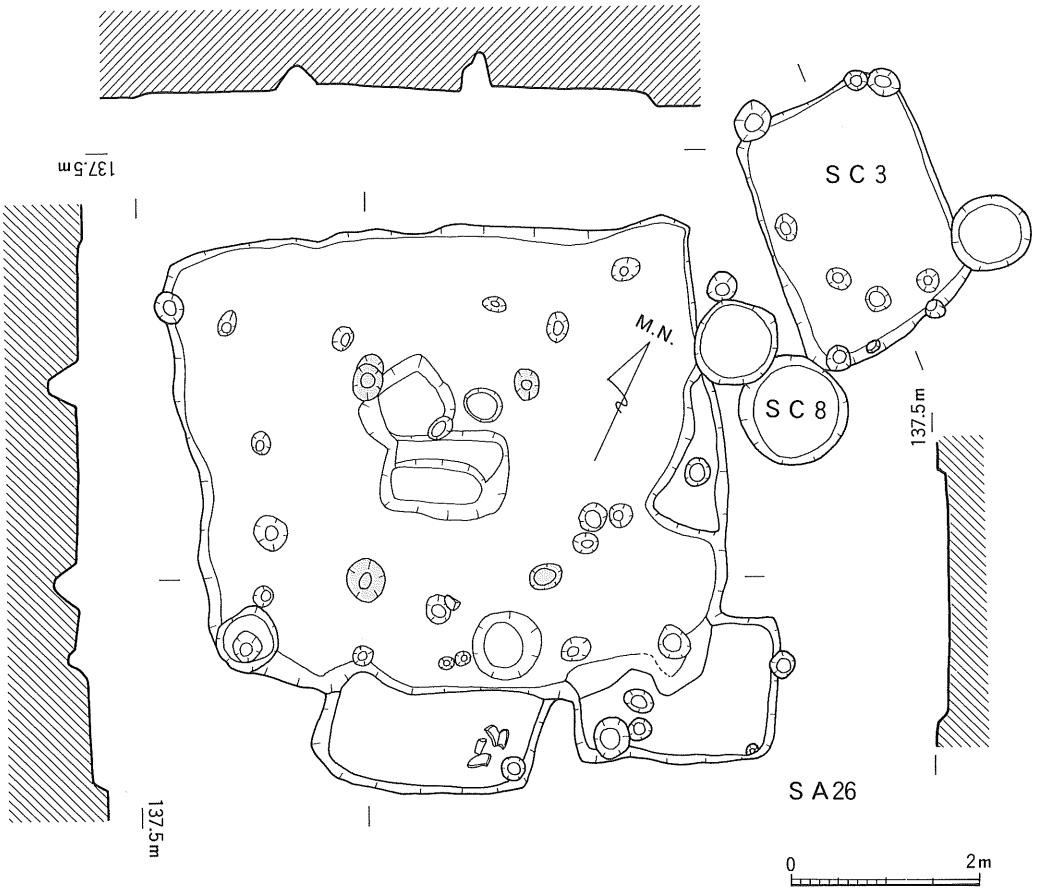
ＳＡ27の北コーナー横に、長方形と方形の落ち込みが検出された。検出面からの深さが10㎝程度と浅く、埋土の観察では区分がつかなかったため合わせてＳＡ28の遺構番号を付した。完形品を含む土器、石庖丁が出土している（第26図191～195）。191は砂岩製の長方形石庖丁であ



第22図　ＳＡ24・25，ＳＣ５・６・７実測図（Ｓ＝1／80）



第23図　ＳＡ22・25出土遺物実測図（1／4）



第24図　ＳＡ26，ＳＣ３・８実測図（Ｓ＝1／80）

る。一部欠損しているが両側から穿孔された二孔を持つ。全面に研磨痕が明瞭に見られる。192は、完形の長頸壺である。全体に小振りであるが、ソロバン玉形の胴部にやや開き気味の口縁部を持つ。外器面は全面に丁寧なミガキを施す。底部は尖底気味の丸底である。193は半球形のプロポーションとなる鉢である。薄手の器壁は丁寧なナデ調整で、口縁部下から５、６単位の櫛描波状文が施される。194・195は手づくねのミニチュア土器である。指頭痕が明瞭に残る。

ＳＡ29は、ＳＡ11とＳＡ25の間に検出され、両遺構を切っている。遺構の残存状況は悪く、かろうじて御池ボラの硬化した床面が検出された。長軸3.7ｍ、短軸3.1ｍの長方形プランで、ピットが４基検出されたが主柱穴は確認されなかった。床面に多くの炭化材と若干の土器片が出土した（第26図196～198）。196は小型の甕で、底部は若干の上げ底となる。器面調整はナデである。197は、焼成前底部穿孔の甑である。器面はナデ調整である。198は、小型丸底壺の影響をうけたものである。薄手の器壁は丁寧なナデ調整である。

ＳＡ30・ＳＡ33

第28図199・200は、ＳＡ30出土の土器である。ＳＡ30は、調査区南西端、ＳＡ９とＳＡ25間に位置する。遺構検出の際に黒色土の浅い落ち込みとして確認され、若干の遺物の出土と数基のピットの検出が見られたが、遺構が調査区外（崖面）にかかること、検出面が既に床面レベ

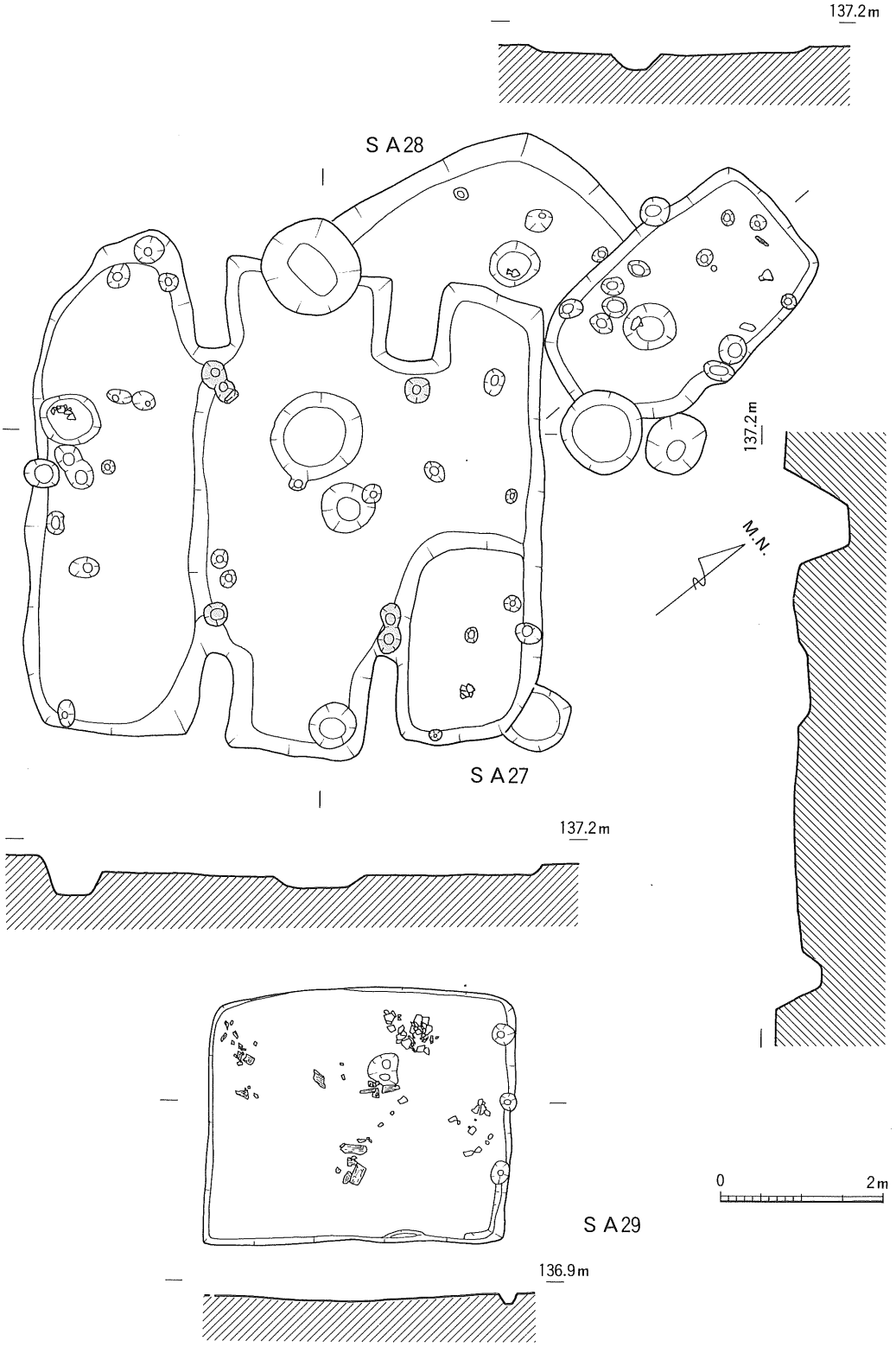
ルであったことなどから平面プランを把握することができなかった。199は甕の口縁部である。外方に水平に肥厚する。200は平底の鉢である。薄手の器壁は丸みを持ち、器面は丁寧なナデ調整である。

第28図201は、ＳＡ33出土の土器である。ＳＡ33は、調査区西端、ＳＡ１とＳＡ５間に位置する。遺構検出作業中に黒色土の滲みとして確認され遺構番号が付されたが、床面レベルが高く平面プランを把握することができなかった。201は鉢で、内湾する口縁部は僅かに屈曲し短く立ち上がる。器面調整は丁寧なナデである。

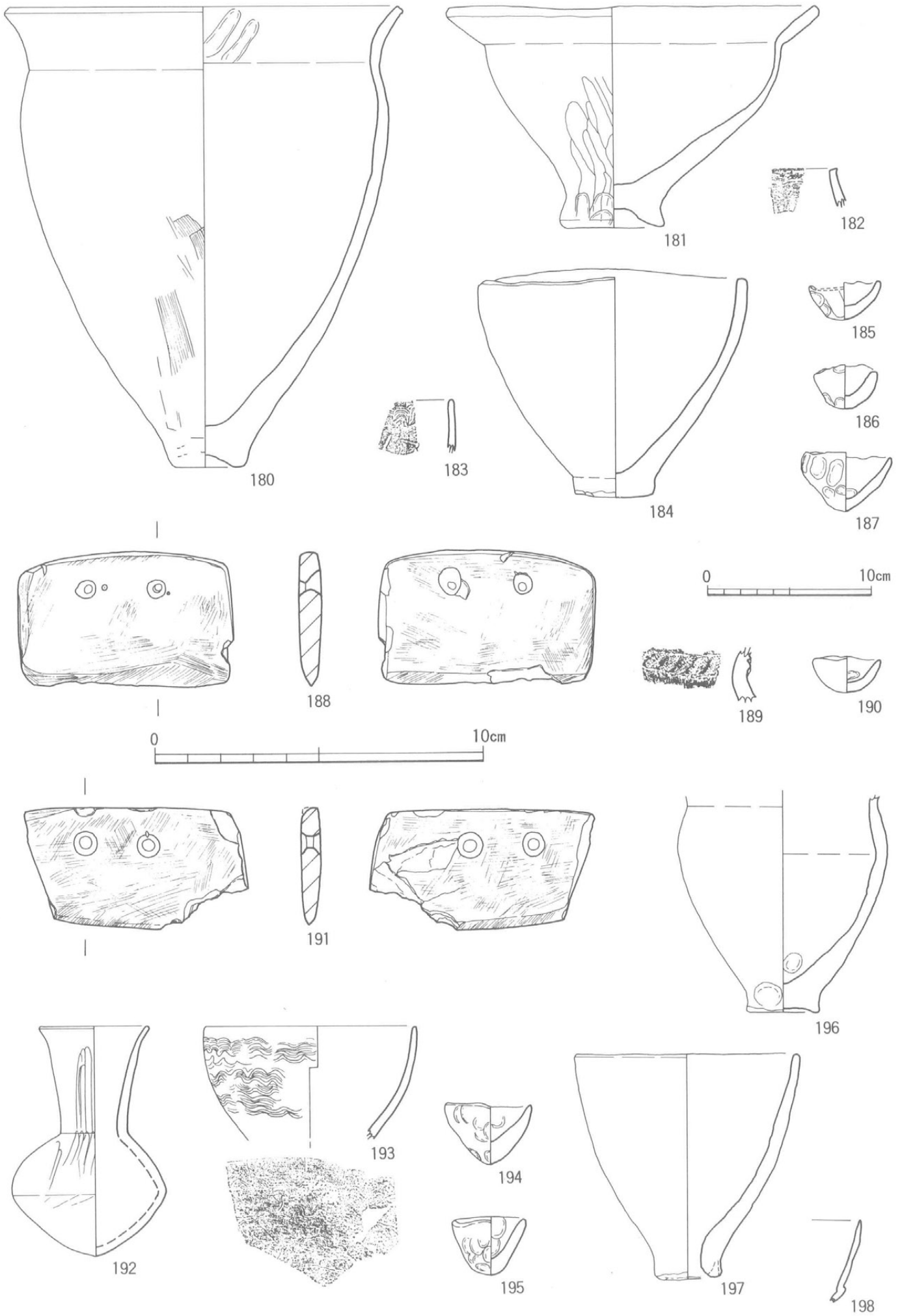
ＳＡ38・ＳＡ40（第27図）

ＳＡ38は、調査区東端に検出された。遺跡の旧微地形が東へ緩やかに傾斜しており、遺構の東半部は検出されなかった。検出し得た部分は不整形で、プランの全体形は推定し難い。主柱穴はＰ１・Ｐ２の２基と思われるが、Ｐ３・Ｐ４についても同規模のピットが対になっておりこの２基の可能性も否定し得ない。床面に明瞭な貼り床は見られなかったものの、黒色土の滲んだ御池ボラが硬化していた。床面上から土器が出土している（第28図202～206）。202は甕で、脚台状の底部はやや外へ張り出す。「く」字形に屈曲し外傾する口縁部を持ち、口径と胴部最大径はほぼ等しい。器面調整はハケ目である。203は、格子目のタタキ痕を持つ甕である。屈曲し緩やかに外反する口縁部は、口径が胴部最大径を上回る。204は、Ｓ字状に緩やかに湾曲する甕で、口径は胴部径を大きく上回る。205は高坏で、裾開きに外反する脚部はハケ目調整である。206はやや大型の高坏脚部で、縦方向のミガキが顕著である。

ＳＡ40は、方形基調の花弁状住居である。長軸5.6ｍ、短軸4.3ｍ、検出面からの深さ20㎝を計る。西壁沿いにベッド状の高まりを持ち、突出壁が１カ所見られる。貼り床は見られず、御池ボラの掘り抜きの床面には顕著な硬化面も確認されていない。焼土は検出されていない。主柱穴は２基と思われるが、他に数基のピットが検出されており補助的な柱が含まれる可能性がある。床面近くから土器、石器が出土している（第29図）。207は甕で、頸部に刻み目突帯を持つ。208は壺の口縁部で、外反する口縁部内面に櫛描波状文が施される。209～212は口径が35～39㎝と大型の高坏である。209は坏部に比して細身の脚部を持ち、坏底部の粘土塊を脚部に差し込んで接合している。脚部に円形透かしを持つ。器面調整は、坏部内面および坏底部外面がミガキ、口縁部外面はハケ目である。口唇部はナデによりフラットに仕上げている。脚部は風化のため不明瞭であるが、縦方向のミガキあるいは丁寧なナデと思われる。210は坏底部に比して口縁部が大きく、外反しながら延びる。器面は内外面ともにミガキにより仕上げている。211は坏底部がやや反り気味である。器面調整は内外面ともにナデである。212は小振りの坏底部に大きく外反する口縁部を持つ。器面はミガキによる仕上げと思われるが、風化気味のため単位は不明瞭である。213は高坏脚部で、円形の透かしを持つ。器面調整はハケ目である。214は石庖丁の未製品と思われる。全体に研磨痕が見られるものの、刃部が研ぎ出されていない。片側縁に抉りが見られるが、他方縁は先細りしている。



第25図　S A27・28・29実測図（S＝1／80）



第26図　ＳＡ27・26・28・29出土遺物実測図（188･191→½，他は¼）

第４節　中世の遺構と遺物

１．竪穴状遺構

ＳＡ１・ＳＡ３・ＳＣ18（第30図）

ＳＡ１は、円形皿状の竪穴状遺構である。検出面からの深さ40㎝を計り、床面は御池ボラの掘り抜きで硬化面は確認されなかった。拳大の礫（川原石）が多く流れ込んでいた。土器等の遺物は見られなかった。詳細な時期は不明であるが、遺構埋土がやや濁りのある黒褐色土で他の中世の遺構に近似することからほぼ同時期と考えておきたい。

ＳＡ３は、検出面のプランが不整楕円形、床面は方形となる。検出面からの深さは約30㎝を計る。ＳＡ２と切り合うが、その位置に更に長方形土坑（ＳＣ18）が重なる。床面は御池ボラの掘り抜きで硬化面は確認されなかった。床面からやや浮いた状態で陶磁器片が出土している（第33図217～221）。217・218は、端反りの青磁碗である。217は灰オリーブ色の釉が施され、全体に貫入が見られる。219は青磁碗の体部である。黄褐色の胎土にオリーブ褐色の釉が厚く施され、全体に貫入が見られる。220は白磁皿の底部で、高台は露胎である。221は縄文土器片を円形に打ち欠いた円盤状土製品で、器面には細い条痕が残る。流れ込みと思われる。

ＳＡ17・ＳＡ43（第31図）

ＳＡ17は、方形プランの竪穴状遺構である。一辺2.1ｍ、検出面からの深さ60㎝を計る。拳大～人頭大の川原石や軽石が、床面からやや浮いた状態で出土している。床面の一部には、紫がかった灰白色の細砂が敷かれていた。自然科学分析の結果、テフラの可能性は低いと判断された。また、図示はしていないが、陶磁器小片が出土している。

ＳＡ43は、ＳＡ38の西側に検出された。長軸2.4ｍ、短軸1.8ｍの長方形プランで、四隅にピットを持つ。検出面がほぼ床面レベルであり、遺構の残存は悪い。壁際に浅い溝が廻り、プランを確定し得た。遺物の出土は見られなかった。

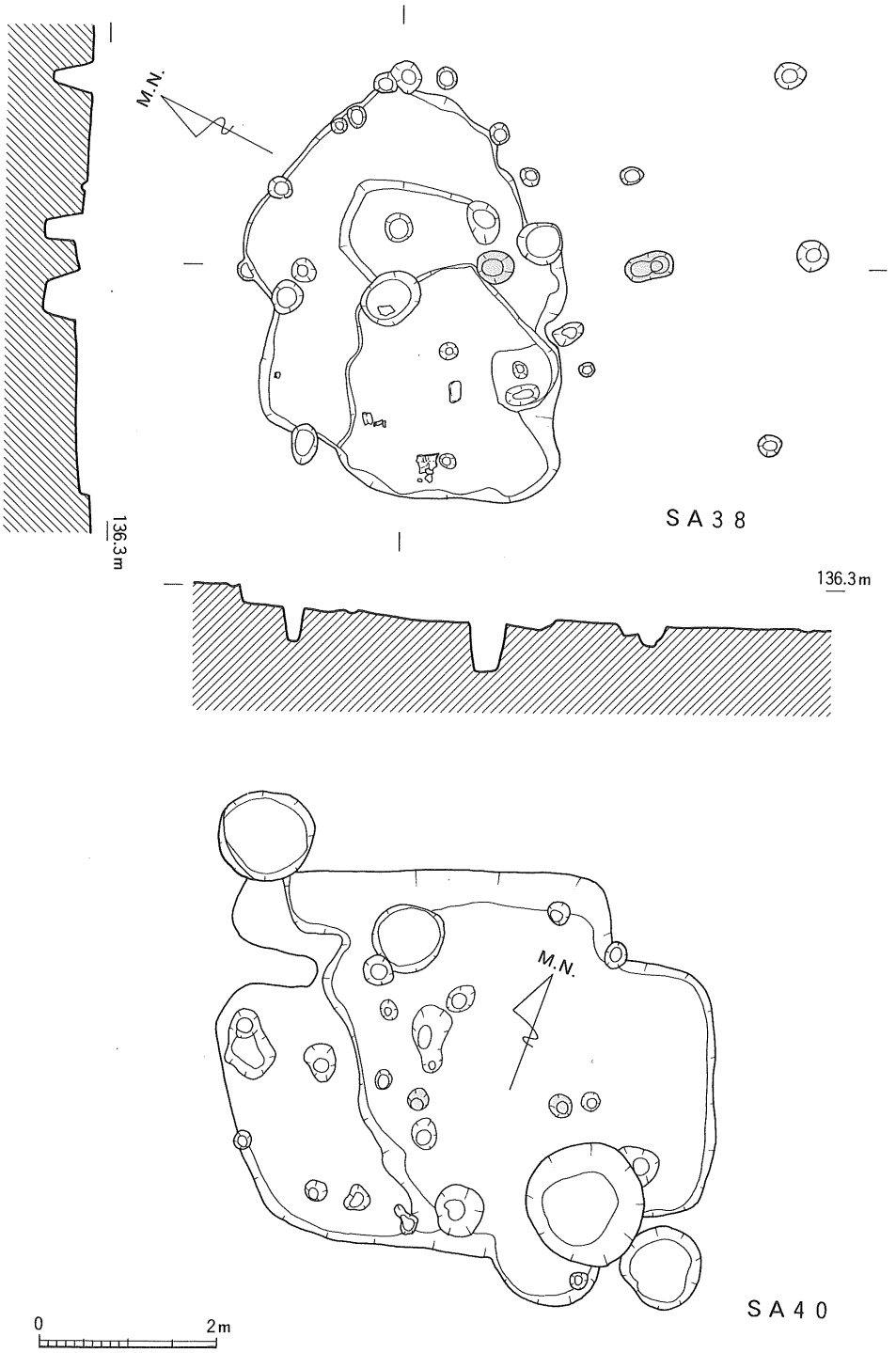
２．土　坑

ＳＣ13（第32図）

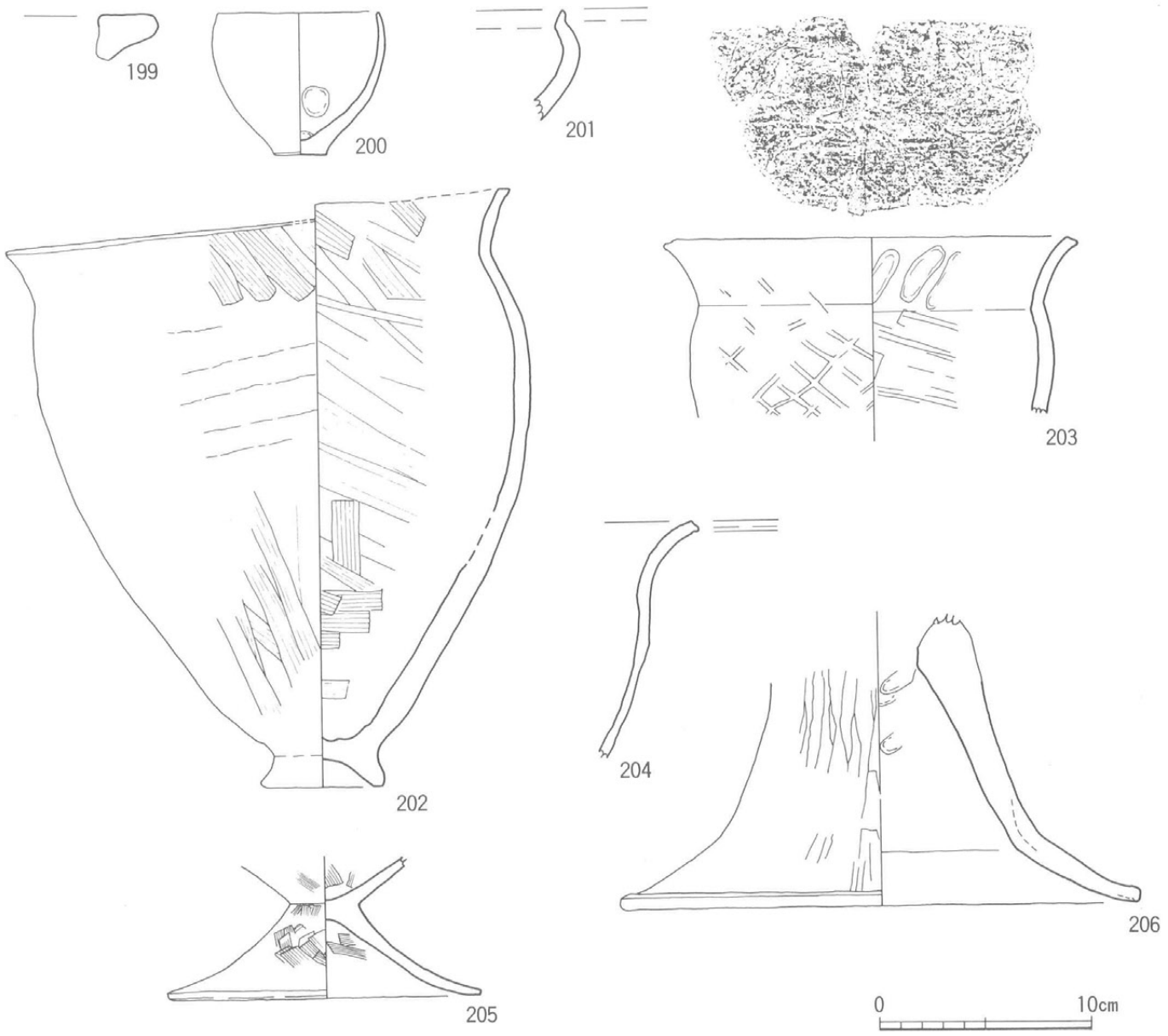
ＳＣ13は、長軸1.8ｍ、短軸0.9ｍの長方形プランで、検出面からの深さ80㎝を計る。人頭大の川原石十数個が埋土下位から中位に見られた。埋土は御池ボラを含む黒褐色土の単一層で人為的な一括埋め戻しと思われる。遺物等の出土は見られなかった。

３．道路状遺構（第34図）、溝状遺構

ＳＥ１は、調査区中央から北東方向に延びる、最大幅６ｍの断面略台形状の遺構である。床面は、北東方向から緩やかな上りスロープとなり、両端に幅30～40㎝、深さ20㎝程度の溝を持つ。床面中央には幅約50㎝程度の硬化面が見られ、通路（道路）として使用されたと思われる。遺構は三方に分岐しており、溝底の硬化面もそれぞれの方向に続いている。調査区端から約８ｍ入った地点に長方形の土坑が見られる。御池ボラを掘り抜いており、雨水を浸透させ処理するためのものと思われる。14基のピットが検出されたが、それぞれ対になるものであり、くぐり門あるいは扉等の施設が設置されていた可能性が高い。埋土の下位に桜島火山噴出の降下軽石（文明の白ボラ、1471年噴出）が堆積しており、その上位にも硬化面が確認された。遺構の



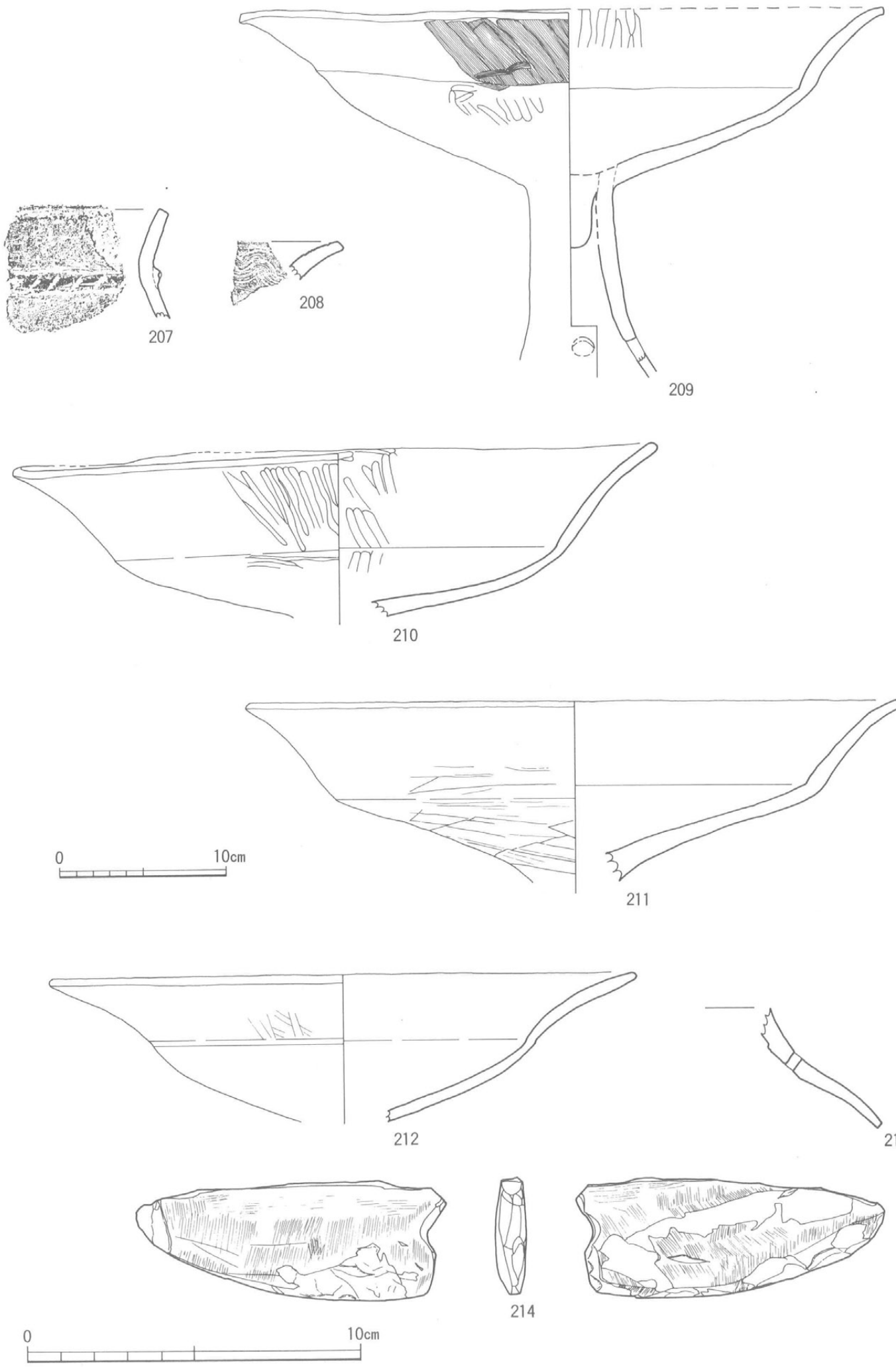
第27図　ＳＡ38・40実測図（Ｓ＝1／80）



第28図　ＳＡ30・33・38出土遺物実測図（1／4）

法面中位には、人頭大の軽石が並べられている部分が見られた。素掘りにした御池ボラ層の崩落防止のための土留め石と思われる。遺構埋土中から若干の遺物が出土した（第36図228～235）。228は土師質の皿である。底部は糸切りで、比較的厚手の底部から僅かに立ち上がる先細りの口縁部を持つ。229は口縁部断面が三角形となる備前焼のすり鉢である。６条単位の櫛目が一定間隔をもって施される。230は青磁の盤である。高台内は露胎である。231・233は青磁碗である。233は見込みに印花が施される。高台は両面からのケズリが行われ、先細りとなる。232は陶器碗である。見込みに蛇の目釉剥ぎが見られる。234は舶載の染付け皿である。底部は碁笥底である。見込みに字文が見られるが、判読はできない。体部外面に鳥が描かれる。235は検出面付近から出土した。寛永通寶で、裏面に「文」の文字が見られる。

ＳＥ２は、南東端に検出された。約80°曲がるＳＥ１の延長上にあり、本来つながっていた可能性もあるが、両者の間約12mには掘り込み、硬化面等は検出されなかった。ＳＥ２は、南東方向へ下るスロープ状となり、床面中央には硬化面が検出されている。埋土の下位に文明ボラが堆積しており、ＳＥ１と同時期の遺構であろうと思われる。文明ボラ上位の硬化面は確認



第29図　ＳＡ40出土遺物実測図（207～213→1／4，214→1／2）

されなかった。遺物は出土していない。

ＳＥ３は、調査区北西隅に検出された。検出幅は0.8～1.0ｍで、検出面からの深さは20～30㎝である。溝底レベルは東に向け下り、ＳＥ４に合流する。遺物は出土していない。

ＳＥ４は、検出幅0.6～0.8ｍで、検出面からの深さは20～30㎝である。溝底レベルは、北東に向け下り、ＳＥ３と合流する。ＳＥ３・４は埋土に明瞭な差が見られず、同時存在の可能性が高い。埋土中に陶磁器小片が見られたが、時期を明確にし得るものはない。

第５節　縄文時代の遺構と遺物

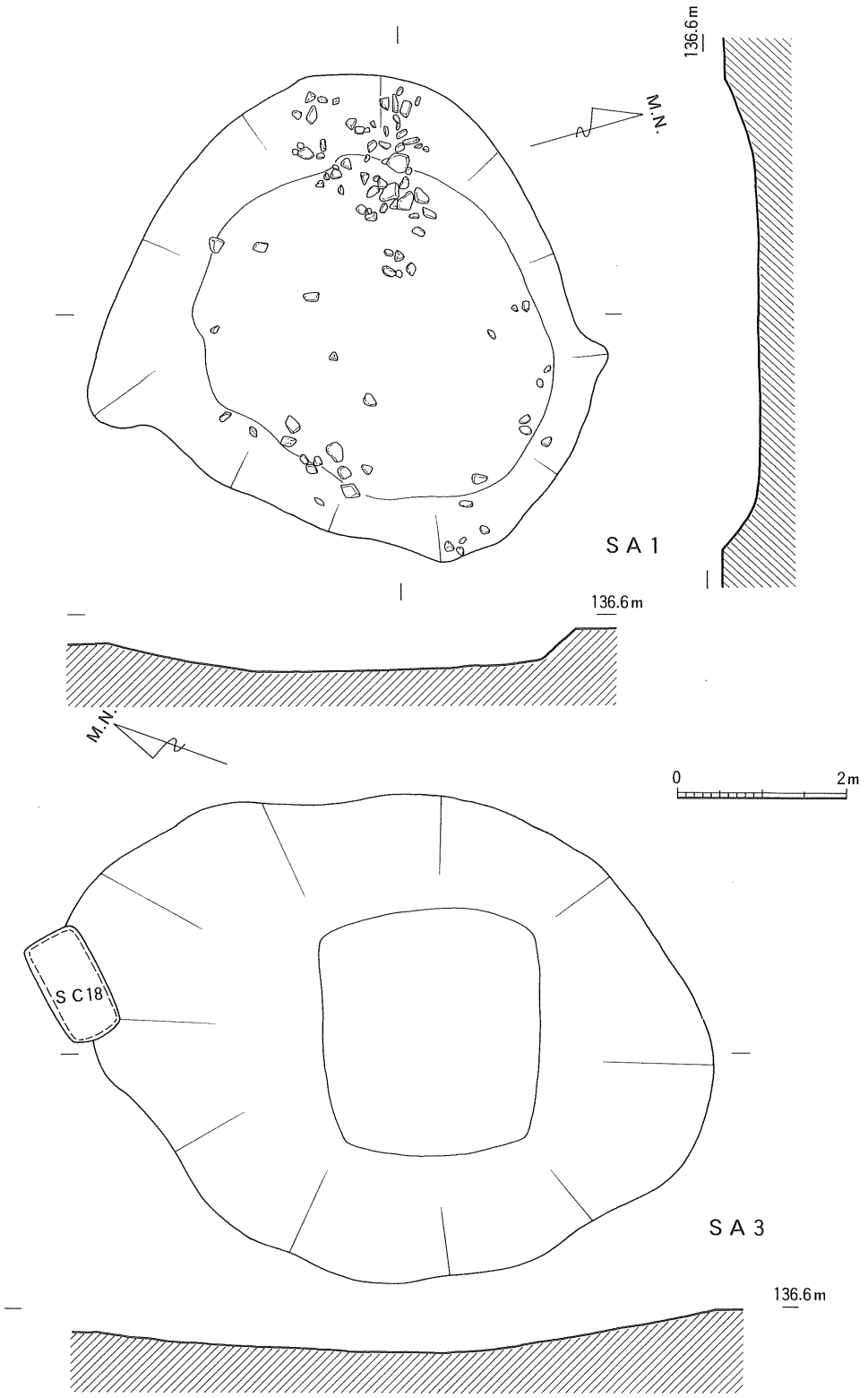
土　坑

ＳＣ16（第32図）

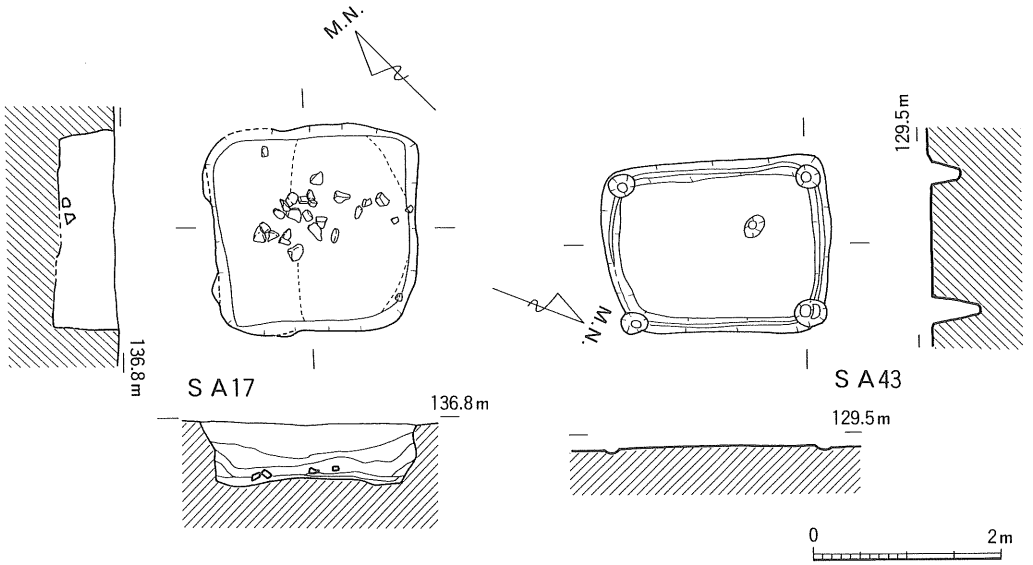
ＳＣ16は、調査区中央やや東寄りの位置に検出された。撹乱土坑に遺構南側を切られており全体形を把握し得ないが、検出された部分は長軸1.4ｍ、短軸1.0ｍの楕円形状である。検出面からの深さは45㎝を計る。床面上から土器片がまとまって出土している（第33図223～227）。223は深鉢である。口縁部は僅かに外反し、口唇部は斜めに面取りされている。器面調整は内外面ともにナデで無文である。224は口縁部に貼り付け突帯を持つ深鉢である。突帯上面に爪による連続刺突が見られる。途中で爪の向きが逆転している。器面調整は粗いナデである。225は深鉢の底部である。上げ底の底部はやや外に張り出す。226は浅鉢である。頸部で屈曲し短く外傾した口縁は更に内側へ折り返している。口縁部は波状口縁となり、器面調整はナデおよびミガキである。227は浅鉢で、Ｓ字状に屈曲する口縁部を持つ。器面調整は粗いナデである。

第６節　遺構外出土の遺物

第36図236～252は、遺構外からの出土遺物である。236～240は、縄文土器である。236・237は孔列文土器である。口縁部外面に竹管状工具による刺突文が見られる。屈曲部には刻みが施される。238は口唇部に２条の沈線を施す。器面は丁寧なナデ調整である。239は器面に丁寧なミガキが施され、口縁部内外面に沈線を持つ。240は口縁部外面に、数条の平行細沈線とその間を埋める山形の沈線文が見られる。241は弥生中期の甕形土器である。軟質で厚手の器壁はナデ調整で一部にミガキも見られる。口縁部は外方に肥厚させている。242は、焼成前底部穿孔の甕あるいは鉢であろう。243は複合口縁壺の口縁部で、拡張部には櫛描波状文が施される。244は小型の高坏で、伏鉢形の脚部は丁寧なミガキが見られる。245は高坏脚部である。縦方向のミガキが顕著である。246～248は青磁である。246は碗で、体部外面には縦方向にヘラ描き文が見られる。247は碗で、見込みに「寶」字のヘラ描きが施される。高台は面取りされ先細りとなる。248は盤である。オリーブ灰色の釉が厚く施される。249は陶器で、耳付壺である。褐色の釉薬が内外面に施される。250は瓦器で、浅鉢形の火鉢であろう。外器面に四方襷文のスタンプが施される。251は砂岩製の尖頭状石器で、両側縁に細かい加工痕が確認される。凸面には研磨痕が見られ、石斧等の磨製石器の破片を再利用したものと思われる。252は皇宋通寶である。



第30図　ＳＡ１・３実測図（Ｓ＝1／80）



第31図　ＳＡ17・43実測図（Ｓ＝1／80）

第７節　まとめ

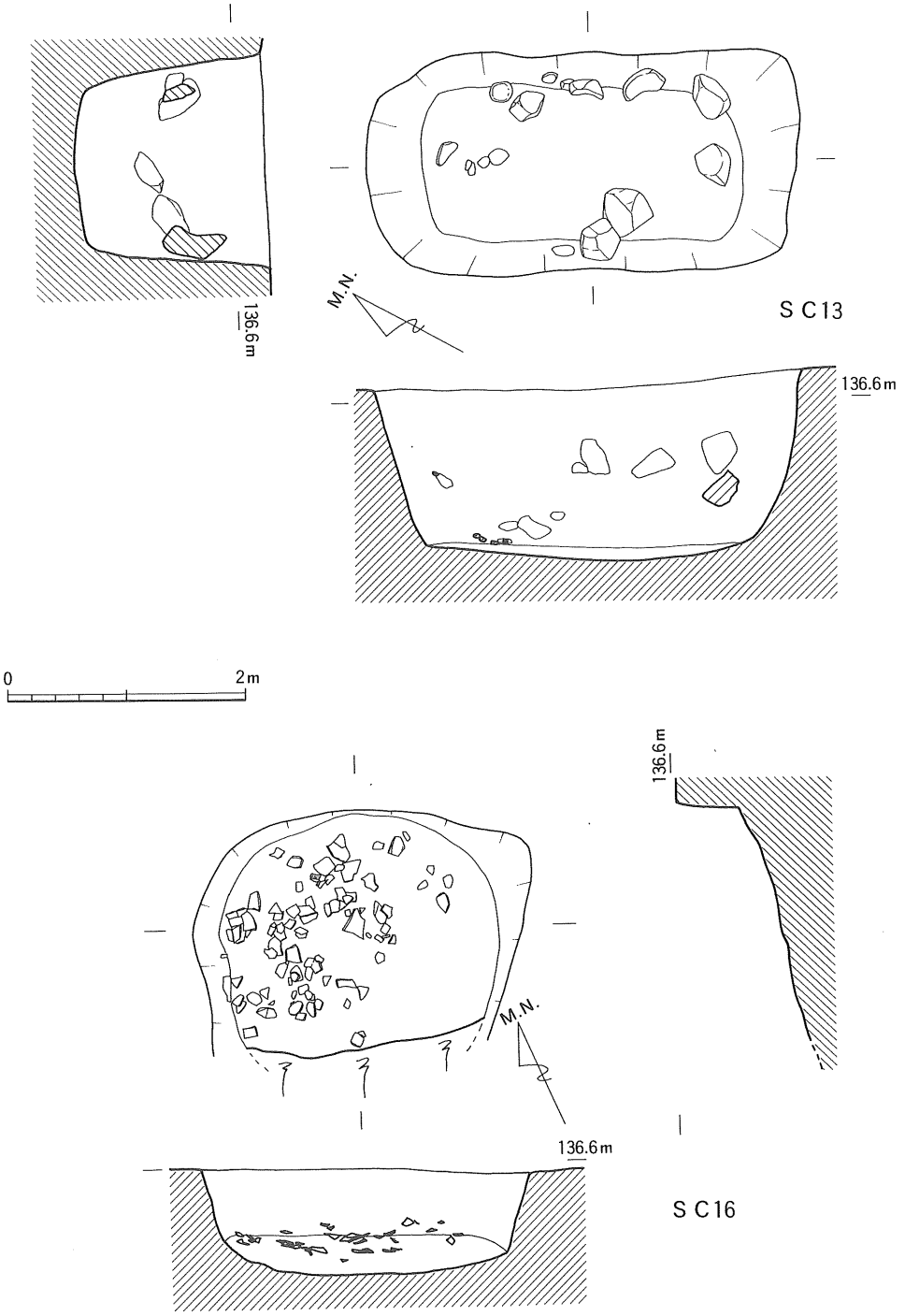
前節までに述べたように、前畑遺跡において縄文時代から中・近世にいたる遺構・遺物が検出された。時期的に区分してみると、縄文時代後期の土坑１基、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居跡27基（確実なもののみ）、中世の竪穴状遺構６基、土坑数基、道路状遺構２条、溝状遺構２条、近世の土壙墓数基、ピット多数である。このうち竪穴住居跡は、最も多く検出され前畑遺跡の主体となるものであるが、検出面からの深さが非常に浅く、遺構の残存は良いとは言えない状況であった。そのため、遺構の切り合い関係を明確にし得ない部分が多く、出土遺物も一遺構毎に見ると決して多いものではない。こうした制約を含んだ資料であるにせよ、その資料的価値が低いと言う訳ではなく、特に遺構の分布状況等は、一連の丸谷地区遺跡群の調査で見られた他の弥生時代集落とは様相を異にし注目に値する。ここでは、各時期毎の遺跡の状況を周辺他遺跡と比較しながら触れていきたい。

・縄文時代について

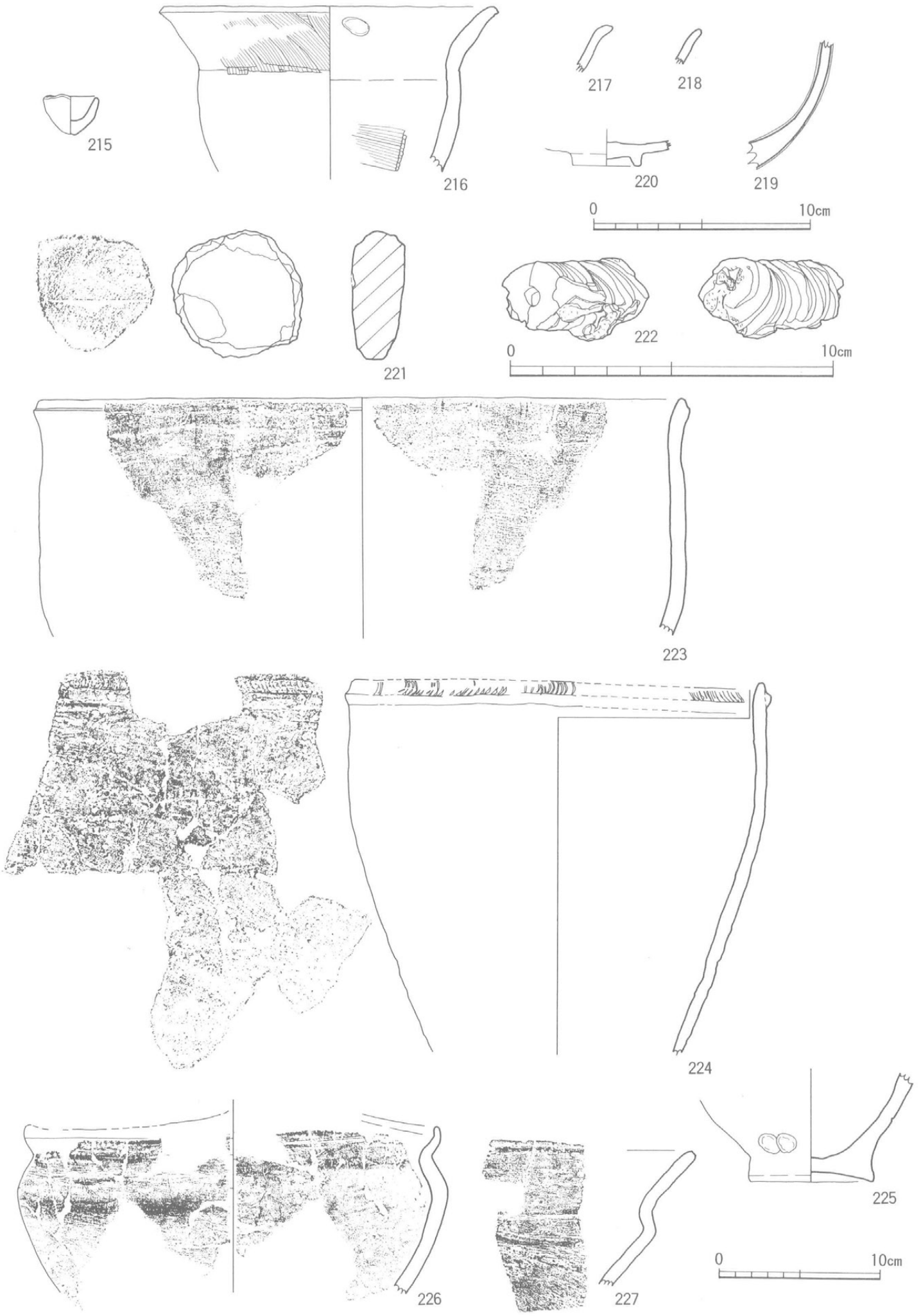
縄文時代の遺構としてＳＣ16が検出された。後期に比定される土器を伴っている。包含層出土の遺物中には、孔列文土器等の後晩期の土器が含まれるが、遺構は他に検出されなかった。本池遺跡でも指摘されたように、後期以降の遺構・遺物が散見されるもののその密度は極めて低い。早期以来縄文時代の遺跡の分布は、丸谷第一遺跡[1]・屏風谷第１遺跡[2]・堂山遺跡[3]など丸谷地区遺跡群が立地する段丘よりも更に一段上の段丘上が中心となるものと思われる。

・弥生時代から古墳時代について

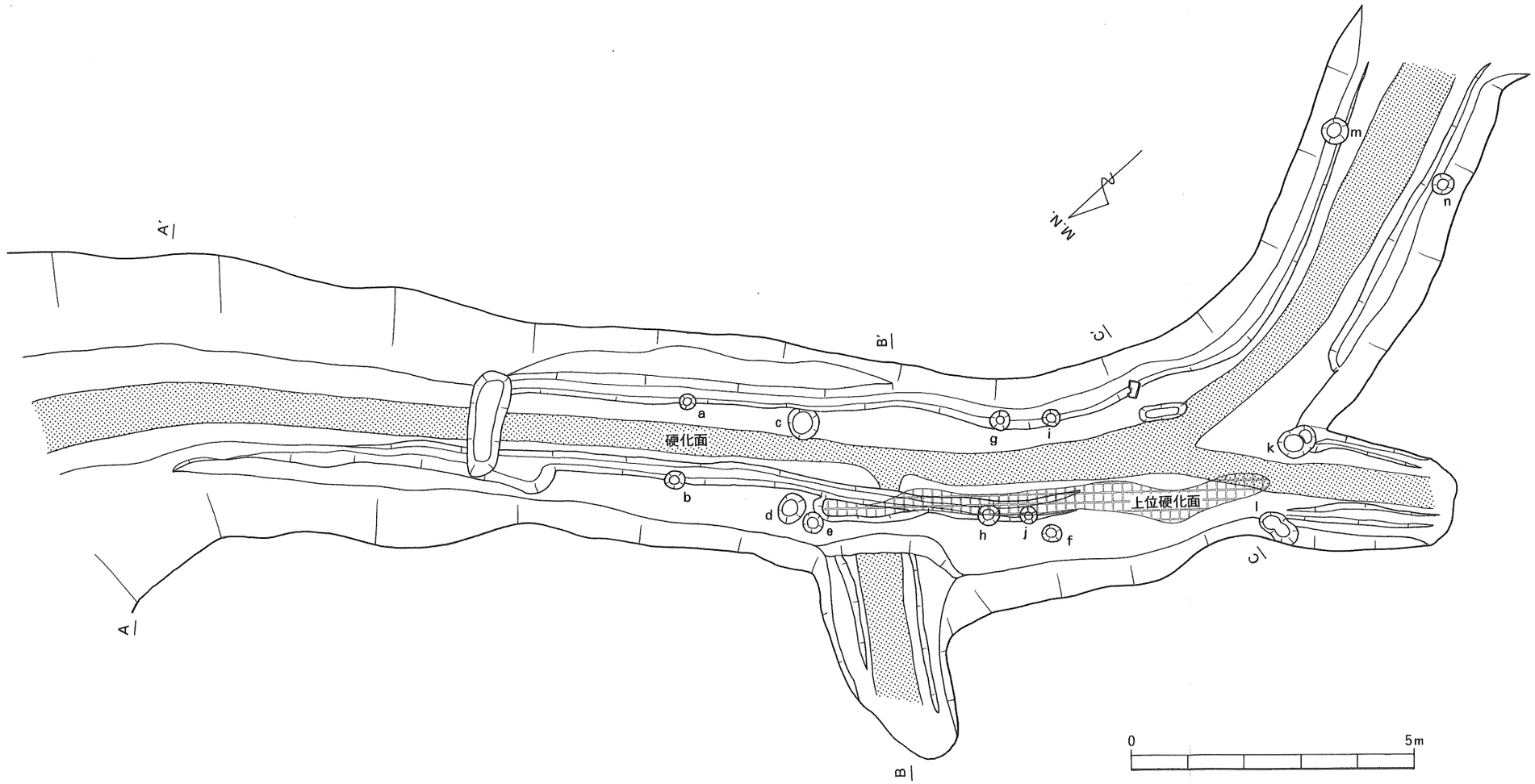
前畑遺跡では27基の竪穴住居跡を検出したが、その多くは調査区西半に集中している。２～



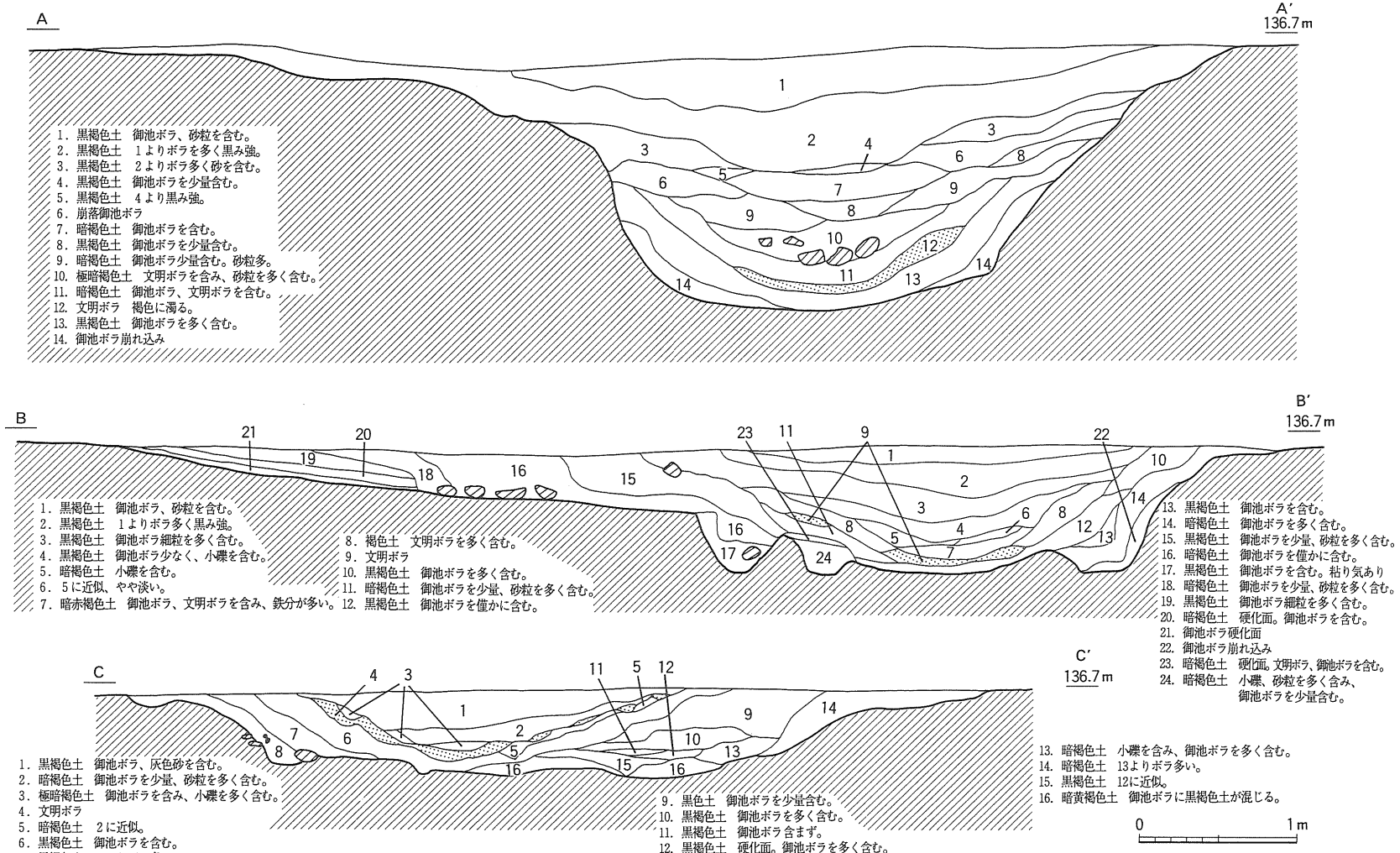
第32図　ＳＣ13・16実測図（Ｓ＝1／80）



第33図　ＳＣ１・３・８・16，ＳＡ３出土遺物実測図（221・222→½，217～220→⅓，他は¼）



第34図　ＳＥ１実測図（Ｓ＝1／100）

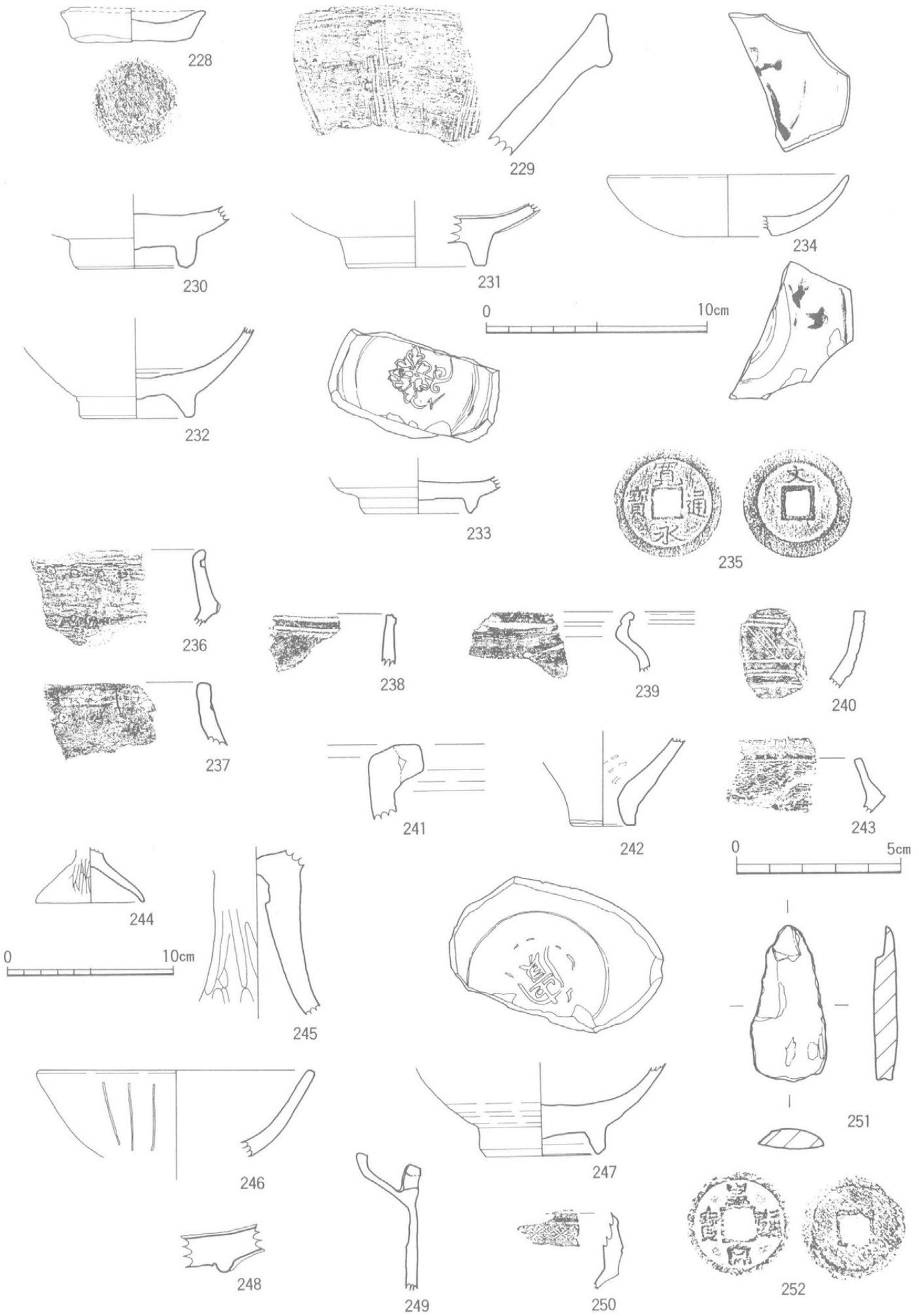


第35図　ＳＥ１　土層断面図（Ｓ＝1／40）

4基が切り合うものも見られ、数世代にわたる継続的な集落が営まれたものと思われる。出土土器の様相より弥生時代後期後半から古墳時代初頭の時期幅の中でとらえられよう。しかし、甕・壺・高坏・鉢等良好なセットでとらえられるものは少なく、限られた器種での検討を余儀なくされている。その中で、ＳＡ５は古墳時代的、ＳＡ25は弥生時代的なものとして基準資料となろう。比較的敏感に時期的特徴を反映すると思われる甕形土器をみると、頸部が明瞭に屈曲し短く外傾する口縁を持つものと、頸部屈曲が滑らかで口縁部が外反しながら延びるやや新しい様相を示すものが混在するものが多い。小型壺の中には、いわゆる小型丸底壺の影響下に出現したと思われる太い口頸部を有する一群が見られ、時期的な指標の一つとなっている。

検出された27基の竪穴住居跡のプランをみると、方形プランが14基、円形プラン１基、方形基調花弁状プラン10基、円形基調花弁状プラン１基、不明１基である。円形プランのＳＡ７は、方形プランのＳＡ６に切られており、ＳＡ６が小型丸底系の壺を有するのに対し、ＳＡ７は若干上げ底気味の脚台状底部の甕や平底の壺が見られ弥生的様相を残し、住居のプランと土器の年代観が一致している。円形基調花弁状プランのＳＡ15は、「く」字形に屈曲する頸部を持つ甕と緩やかに外反する甕が共伴している。方形基調花弁状プランのＳＡ12・ＳＡ14はともに小型丸底系の壺を有し古墳時代初頭に位置付けられる。平野部においては弥生時代後期後半までに姿を消す花弁状住居が、内陸部においてはやや下る時期まで存続していることになる。

遺構が密集し切り合いを見せる前畑遺跡に対し、丸谷地区遺跡群において調査された他の弥生時代集落では異なった分布状況を示している。中大五郎第１遺跡・中大五郎第２遺跡[4]では、弥生時代後期の竪穴住居跡（７基・６基）、周溝状遺構（３基・３基）が検出されている。竪穴住居跡と周溝状遺構の切り合いが一カ所見られたものの、各住居跡間では近接するものは見られなかった。上大五郎遺跡[5]では３基の竪穴住居跡が検出された。時期的には弥生時代中期末から後期初頭のものが２基、古墳時代初頭のものが１基で、各住居間は数10ｍの距離があり散発的な分布状況であった。河川改修事業に伴って県教育委員会が調査した下大五郎遺跡[6]では、花弁状住居を含む12基の竪穴住居跡が検出され、弥生時代後期後半に位置付けられている。いずれの住居間も十分な間隔が保たれていた。このように、各遺跡においては住居間の間隔が十分に保たれ、同時存在の可能性を否定するような近接した状況は見られなかった。これらに対し、前畑遺跡に隣接する山ノ田第１遺跡[7]では、県道改良工事に伴い弥生時代終末から古墳時代前期前葉の竪穴住居跡12基が検出され、うち11基が密集し、４基が切り合う状況であった。前畑遺跡・山ノ田第１遺跡と他の４遺跡の分布状況の違いは、二つの理由が考えられる。第一に、立地の違いである。前二者が丸谷川左岸に位置するのに対し、後者は右岸に位置する。左右両岸の段丘面を比較すると、対応関係にある段丘が右岸は広く奥行きがあるのに対し、左岸は狭く次の段丘法面が迫っている状況である。こうした状況の中で、左岸に位置する両遺跡では繰り返し同じ場所が居住地として占地されたものと思われる。第二に時期の問題である。前畑遺跡・山ノ田第１遺跡が、弥生時代終末から古墳時代に営まれた集落であるのに対し、他の４遺跡は弥生時代中期から後期にかけての集落である。この時期差が継続的に営まれる集落と単発的なものとの違いに関係するのであろうか。このことは、時期的な生産性にも関わる問題であ



第36図　ＳＥ１遺構外出土遺物実測図（235・251・252→½，241～245→¼，他は⅓）

り注意を要する。

・中近世について

ＳＥ１・ＳＥ２は硬化面を伴う溝状遺構で、埋土に見られた桜島火山起源の降下軽石（文明ボラ）の堆積状況から15世紀後半に構築されたものと推定された。門状の遺構となる７対のピットも検出され、屋敷地に入る入口状の遺構と思われる。ＳＥ１・ＳＥ２によって区画される部分には、７～８ｍの遺構空白帯をおいて多数のピットが検出されている。掘建柱建物の認定はし得なかったものの、通路を兼ねた区画溝と掘建柱建物群から成る館跡となる可能性が高い。

同時期の方形館跡が上大五郎遺跡で検出されている。二重の溝により段丘縁を区画し、外溝は通路と排水を兼ねたものとなっていた。内溝により囲まれた内部は約3,000㎡で、大まかに三期に区分される23棟の掘建柱建物群が検出されている。内外溝間は遺構空白帯で、土塁の想定もなされている。外溝埋土中に堆積する文明ボラの上下に硬化面を伴うことから、15世紀後半から16世紀にかけて存続したものと推定されている。

江戸時代末期に編纂された『荘内地理志』巻八十八に「丸谷某屋敷」という古絵図が見られ、丸谷川左岸低位段丘縁に三方を溝で区画された館が存在したことが知られる(8)。段丘下から館内に入る入口が記されており、前畑遺跡・上大五郎遺跡に共通するものである。15世紀から16世紀中頃にかけての伊東氏・島津氏の抗争は、現実的には互いに自立性を保持した地元領主層が主体となっており、そうした社会状況の中で防御的な館が成立、展開したものと思われる。

註

(1)　宮崎県教育委員会
　1979　「丸谷第一遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)

(2)　都城市教育委員会
　1992　『屏風谷第１遺跡』都城市文化財調査報告書第17集

(3)　都城市教育委員会
　1991　「堂山（南地区）遺跡」『平成２年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集

(4)　都城市教育委員会
　1992　『中大五郎第１遺跡・中大五郎第２遺跡』都城市文化財調査報告書第20集

(5)　都城市教育委員会
　1995　『丸谷地区遺跡群・上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第31集

(6)　平成２年度に丸谷川河川改修事業に伴い宮崎県教育委員会が発掘調査を行った。末報告のため調査担当の山田洋一郎氏に御教示頂いた。

(7)　宮崎県教育委員会　1996　『山ノ田第１遺跡』県道高城・山田線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(8)　重永卓爾　1986　「日向国庄内に於ける中世城郭について」『南九州文化』第29号

第1表　前畑遺跡出土土器観察表（1）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量(cm) 口径	底径	器高	調整 外面	内面	色調 外面	内面	胎土	備考
1	土師器	甕 口縁	SA1	－	－	－	斜のナデ 工具によるナデ	工具によるヨコナデ ナデ	黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙	褐色・黒・光沢粒	
2	土師器	高坏 坏～脚部	SA1	－	－	－	受部…ナデ ナデ・タテ方向のミガキ	ナデ 指頭痕	橙	淡黄 黄灰	赤褐色・透明・黒色光沢粒	
3	土師器	高坏 坏～脚部	SA2	－	－	－	受部…ナデ一部ミガキ タテ方向のミガキ	ナデ 指頭痕	浅黄橙	浅黄橙	褐色・半透明光沢粒・黒色光沢粒	
4	土師器	高坏 坏部	SA2	(32.9)	－	－	ヨコナデ タテ・ヨコ方向のミガキ	ヨコ方向のミガキ 黒色部分有り	浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	褐色粒・赤褐粒・黒色光沢粒・透明光沢粒	
5	土師器	高坏 坏部	SA2	－	－	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	淡黄	灰色・半透明・黒色光沢粒・褐色粒	
6	土師器	高坏 脚部	SA2	－	－	－	ナデ・斜・ヨコのハケ目 ヨコナデ、一部工具痕	ナデ	淡黄 にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色粒、透明光沢粒・乳白色粒	
7	土師器	ミニチュア 完形	SA2	4.6	－	2.2	ナデ 手捏ね	ナデ	淡黄	淡黄	褐色・赤褐・灰色・半透明粒	
8	土師器	甕 完形	SA4	11.4	3.0	10.5	斜のハケ目後ヘラミガキ ナデ後ヨコ・斜のヘラミガキ 手捏ね	ナデ 工具痕	浅黄橙 褐	褐灰 にぶい黄橙	褐色・淡黄・透明光沢粒	
9	土師器	壺 複合口縁	SA4	－	－	－	櫛描波状文 ナデ	ナデ	淡黄	淡黄 灰白	褐色粒、黒色・半透明光沢粒	
10	土師器	高坏 坏～脚部	SA4	－	－	－	ミガキ、ヘラ状工具によるナデ 穿孔4つ	ナデ	橙	にぶい黄橙	黒色光沢粒、灰色・半透明・光沢粒	
11	土師器	高坏 坏～脚部	SA4	－	－	－	ミガキ、一部黒斑 穿孔有り	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐色、灰色・黒色・透明光沢粒	
12	土師器	鉢 口縁～底部	SA4	(15.5)	－	(11.6)	ナデ 丸底	ナデ 指頭痕	橙 明黄褐	浅黄橙	乳白色、褐色・黒色・半透明・黒色光沢粒	
13	土師器	ミニチュア	SA4	6	－	3.7	手捏ね	手捏ね	明黄褐 黄橙	黄橙 にぶい黄橙	灰白・赤褐色・黒褐粒	
14	土師器	ミニチュア	SA4	(5.3)	－	(3.6)	手捏ね 風化気味	手捏ね 風化気味	黄橙	明黄褐	赤褐色、半透明光沢粒・褐色粒	
15	土師器	甕 口縁～底部	SA5	(28.3)	3.7	31.2	ヨコナデ、刻み目突帯 タテ・斜のナデ	ヨコナデ、工具による ヨコ・斜のナデ 工具痕、指頭痕	にぶい黄橙 灰黄褐	淡黄、にぶい橙 褐灰	灰白の粒、褐色・灰・黒・透明・半透明の光沢粒	
16	土師器	甕 口縁～胴部	SA5	(26.8)	－	－	粗いナデ	ナデ	にぶい黄褐 灰黄褐 淡黄	にぶい黄橙 浅黄橙	黒い粒、褐色粒・灰色・赤褐色粒	
17	土師器	甕 完形	SA5	16.5	5.3	16.1	ナデ・ヨコ・斜のナデ 工具によるタテ方向のナデ、スス付着	ヨコナデ、ナデ 一部工具によるナデ 一部黒斑	にぶい黄橙 灰褐	にぶい黄橙 灰黄褐	灰色・褐色・乳白色・赤褐色・半透明の粒	
18	土師器	壺 口縁～底部	SA5	(15.4)	－	(29.8)	タテ方向のナデ、斜のハケ目、工具によるナデ 黒斑、丸底	ヨコ方向の工具によるナデ・ナデ	橙 浅黄褐	淡黄 にぶい橙	褐色・灰白・黒色粒、透明・黒色光沢粒	
19	土師器	壺 胴～底部	SA5	－	(4.9)	－	ナデ、強いナデ(ハケ目)の後を指押さえと指によるナデつけ	一部指によるナデ 板状工具によるハケ目状のナデ	にぶい黄橙 黄灰	にぶい褐 にぶい黄橙	灰白・褐色・黒、透明・半透明の光沢粒	
20	土師器	壺 胴～底部	SA5	－	(2.9)	－	ナデ 一部黒斑	ナデ 指頭痕	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	褐色・灰色の粒、透明の光沢粒	
21	土師器	壺 ほぼ完形	SA5	9.4	1.2	6.3	ヨコナデ、ミガキ 乳房状底部	ヨコナデ ナデ	橙 浅黄橙	橙 浅黄橙	灰・黒・褐色粒、透明の光沢粒	
22	土師器	壺 ほぼ完形	SA5	9.4	－	6.4	ヨコナデ・斜のハケ目 ヨコ・斜のハケ目 乳房状底部	ヨコナデ、ナデ 指頭痕	黄橙 灰黄	黄橙 橙 灰黄	淡黄色、灰色の粒・微細な光沢粒	
23	土師器	壺 胴部	SA5	－	－	－	ミガキ	ナデ	橙	橙	灰・乳白色・黒・透明の光沢粒	
24	土師器	壺 胴～底部	SA5	－	(1.0)	－	ミガキ・風化気味 黒斑	ナデ 指頭痕	橙 にぶい橙	橙	乳白色・灰白色粒、微細な粒・光沢粒	
25	土師器	壺 底部	SA5	－	(0.9)	－	タテ方向のミガキ 底部に穿孔有り	中心部に穿孔2つ、ヨコ・タテ方向のナデ	橙	橙	灰・黒色・透明の光沢粒、乳白色・赤褐色の粒	

第２表　前畑遺跡出土土器観察表（２）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
26	土師器	高坏 坏～脚部	SA5	(11)	－	－	坏部…ヨコナデ 脚部…ミガキ	坏部…ヨコナデ 脚部…ナデ・指頭痕	橙	橙	灰・黒・褐色の粒、微細な光沢粒	
27	土師器	高坏 坏部	SA5	－	－	－	ミガキ	ナデ	灰黄 灰	浅黄	乳白色・黒・赤褐色・透明の光沢粒	
28	土師器	高坏 脚部	SA5	－	－	－	ミガキ	ナデ	淡黄 灰黄	淡黄	褐色・灰色の粒、半透明の光沢粒	
29	土師器	高坏 裾部	SA5	－	12.8	－	斜方向のハケ目	ナデ	淡黄	淡黄	精良	
30	土師器	高坏 脚部	SA5	－	－	－	ミガキ・一部黒変 四方透し	ナデ 指頭痕	浅黄橙 淡黄	浅黄橙 淡黄	黒・灰色・赤褐色の粒 微細な透明・黒の光沢粒	
31	土師器	器台	SA5	(19.7)	(19.8)	(15.1)	タテ・ヨコ・斜のナデ 黒斑・工具痕	ナデ・ヨコ方向のナデ 工具痕、指頭痕 黒変	にぶい褐 淡黄	浅黄橙 にぶい黄橙	褐色・灰褐色・黒色粒 透明な光沢粒	
32	土師器	鉢 完形	SA5	11.8	4	12.3	ナデ	ナデ、一部ハケ目	橙	橙	乳白色・灰色・黒・灰白色粒	
33	土師器	鉢 口縁～底部	SA5	－	(3.1)	－	ナデ、黒斑 スス付着	工具によるナデ 炭化物付着・黒斑	浅黄橙 橙 灰褐	橙 にぶい橙	乳白色・黒褐色の粒	
34	土師器	鉢 口縁～底部	SA5	(8.5)	(2.4)	7	ナデ 黒斑有り	ナデ	浅黄橙	灰白	褐色・灰色・灰白色粒	
35	土師器	鉢 口縁～底部	SA5	(12.6)	(1.9)	(10.8)	ナデ	ナデ	黄橙	黄橙	灰色・灰白色粒、黒・透明の光沢粒	
36	土師器	鉢 口縁～底部	SA5	(12.2)	(2.5)	(7.5)	ナデ 指頭痕	ヨコナデ 指頭痕	浅黄橙	橙	灰色・褐色・黒・乳白色の粒	
37	土師器	鉢 口縁	SA5	－	－	－	櫛描波状文	ハケ目	明赤褐 灰褐	にぶい赤褐 灰褐	灰白、微細な光沢粒	
38	土師器	鉢 口縁	SA5	－	－	－	ナデ 櫛描波状文	ナデ	灰白 灰黄褐	にぶい黄橙	褐・黒・灰色の粒、黒の光沢粒	
39	土師器	ミニチュア 土器形	SA5	4.0	－	2.7	手捏ね	手捏ね	淡黄 にぶい黄橙	淡黄 にぶい黄橙	褐・灰・黒色の粒、透明の光沢粒	
40	土師器	ミニチュア 土器形	SA5	2.8	－	2.3	手捏ね	手捏ね	浅黄橙 淡黄	浅黄橙	灰白・黒・褐色の粒、透明・黒の光沢粒	
41	土師器	ミニチュア 土器	SA5	－	－	－	手捏ね	手捏ね	淡黄	淡黄	褐・黒・灰色の粒、透明の光沢粒	
42	土師器	ミニチュア 土器形	SA5	6.3	1.3	5.2	ナデ・黒斑	ナデ	橙 にぶい褐	明赤褐	乳白色・灰・灰白の粒、微細な黒の光沢粒	
43	土師器	甕 口縁	SA6	－	－	－	ミガキ 突帯	ナデ 工具痕	灰褐	灰褐	微細な光沢粒	
44	土師器	甕 胴部～底部	SA6	－	3.0	－	タテナデ	ナデ	淡黄 浅黄橙	淡黄	褐色・灰・黒の粒、透明・黒の光沢粒	
45	土師器	甕 胴部～底部	SA6	－	3.4	－	ナデ・黒斑	ナデ	浅黄橙 にぶい褐	にぶい褐 にぶい橙	褐色の粒、黒灰色の粒、透明の光沢粒	
46	土師器	甕 口縁～胴部	SA6	10.6	－	－	ヨコナデ ミガキ	斜方向ナデ	浅黄橙 浅黄 にぶい黄橙	浅黄 淡黄	精良	
47	土師器	高坏 脚部	SA6	－	－	－	ミガキ 黒変・穿孔	ヨコナデ タテナデ	浅黄橙	淡黄 黄灰	精良	
48	土師器	器台	SA6	19.4	21.2	13.6	ヨコナデ・穿孔 タテ方向のハケ目 一部ミガキ	ナデ	淡黄・淡橙 にぶい赤褐 暗赤褐	浅黄橙 にぶい褐 灰褐	黄・赤褐・褐・黒色、半透明光沢粒、黒色光沢粒	
49	土師器	鉢	SA6	9.8	－	7.7	ナデ ミガキ	ナデ ハケ目	黄橙	橙	灰白の粒、黒の微砂粒	
51	土師器	甕 底部	SA7	－	4.5	－	ナデ	ナデ	橙	橙	黒褐・灰褐色の粒、黒い光沢粒	

第３表　前畑遺跡出土土器観察表（３）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
52	土師器	甕底部	SA7	—	4.0	—	ナデ	ナデ	明黄褐 黒褐	浅黄橙 黄橙	赤褐・灰・黒色の粒、透明・黒の光沢粒	
53	土師器	器台	SA7	18.9	14.7	18.7	ミガキ、黒斑 四方透し	ミガキ ナデ 指頭痕	浅黄橙 淡黄	浅黄橙	赤褐・灰・灰褐色の粒、半透明・黒の光沢粒	
54	土師器	鉢	SA7	12.8	3.8	9.3	ナデ、平底	ナデ	浅黄橙 橙 灰黄褐	浅黄橙	褐色・灰色の粒、透明・半透明、黒の光沢粒	
55	土師器	鉢口縁～胴部	SA7	11.8	—	—	ミガキ 5本単位の櫛状工具痕	ナデ	浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	灰・黒・褐色の粒、黒・半透明の光沢粒	
56	土師器	鉢底部	SA7	—	6.6	—	ナデ	ナデ	浅黄橙 灰黄褐	浅黄橙 灰白	黒・褐色の粒、透明・黒の光沢粒	
57	土師器	ミニチュア土器	SA7	—	4.0	—	工具ナデ後 ミガキ 黒斑	8㎜単位の工具によるヨコナデ 指頭痕	橙 浅黄橙	淡黄 にぶい黄橙	黒・灰白・褐色の粒、黒い透明の光沢粒	
58	土師器	ミニチュア土器	SA7	—	4.3	3.5	手捏ね	手捏ね ナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐・赤褐・黒・灰褐色の粒、透明の光沢粒	
59	土師器	ミニチュア土器底形	SA7	3	—	2.4	手捏ね	手捏ね	浅黄橙 淡黄	浅黄橙	灰・黒・褐色の粒	
60	土師器	ミニチュア土器底形	SA7	4.1	—	2.6	手捏ね	手捏ね	灰白 浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙	褐・乳白色の粒、透明の光沢粒	
61	土師器	ミニチュア土器底形	SA7	4.2	—	2.2	手捏ね	手捏ね	浅黄橙	橙	褐色・黒・灰色の粒、半透明の光沢粒	
63	土師器	甕胴～胴部	SA8	—	—	—	ナデ	ミガキ	浅黄橙 橙	橙	褐・灰・赤褐色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒	
64	土師器	甕胴～底部	SA8	—	4.7	—	ナデ 指頭痕	ヘラ工具のナデ	淡橙	にぶい橙	灰白・褐色粒、透明光沢粒・黒色光沢・乳白色粒	
65	土師器	甕胴～底部	SA8	—	2.2	—	ナデ	風化	橙 黄灰	にぶい橙	褐色・灰色・乳白色、半透明光沢粒、黒色光沢粒	
66	土師器	甕底部	SA8	—	4.1	—	ナデ 指頭痕	ナデ	淡黄 灰褐	灰白	灰・褐色粒、半透明、黒色光沢粒	
67	土師器	壺胴部口縁	SA8	—	—	—	ナデ 櫛描波状文	ナデ	淡黄	淡黄	赤褐色、褐色粒、半透明・黒色光沢粒	
68	土師器	壺胴～底部	SA8	—	3.5	—	ミガキ 一部黒斑	ヘラケズリ	にぶい黄橙 黒	褐灰 にぶい黄橙	半透明・透明光沢粒・黒色光沢粒	
69	土師器	壺胴～底部	SA8	—	3.4	—	ナデ 指頭痕	ナデ・黒変	淡黄	灰白 褐灰	褐色・灰白色粒、黒色光沢粒、透明・半透明光沢粒	
70	土師器	高坏口縁	SA8	—	—	—	ナデ・黒斑	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙 褐灰	にぶい橙 浅黄橙	灰白・淡黄・褐・黒色粒、半透明光沢粒、黒色光沢粒	
71	土師器	高坏脚部	SA8	—	14.7	—	ナデ・穿孔	ナデ	黄橙 にぶい黄橙	淡黄	褐・赤褐・乳白色・黒色光沢粒、透明光沢粒	
72	土師器	ミニチュア土器底形	SA8	5.1	3.5	1.9	手捏ね	手捏ね	淡橙 黒	淡橙	淡黄・褐・灰・乳白色・半透明光沢粒	
73	土師器	甕口縁～胴部	SA9	—	—	—	ナデ	ナデ	淡黄 黄灰	浅黄橙	赤褐色・乳白色・灰色・半透明・黒色光沢粒	
74	土師器	甕口縁	SA9	—	—	—	刻み目突帯 貝殻刺突文 スス付着	ナデ	黄灰 淡黄	淡黄	黒色・赤褐色粒、黒色・半透明光沢粒	
75	土師器	甕口縁	SA9	—	—	—	突帯状に指頭押圧文を施す ヨコナデ	ナデ	浅黄橙 灰黄褐	浅黄橙	乳白色粒、褐灰色粒、半透明光沢粒	
76	土師器	壺底部	SA9	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	灰白色粒、赤褐色粒、黒色半透明光沢粒	
77	土師器	高坏	SA9	—	—	—	櫛描波状文 多方向からのナデ	多方向からのナデ	浅黄橙	浅黄橙 黄橙	褐色粒、半透明光沢粒、黒色光沢粒	

第４表　前畑遺跡出土土器観察表（４）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
78	土師器	高坏脚部	SA9	—	(15)	—	タテ方向のミガキ ナデ・ヨコナデ	ハケ目 ナデ・ヨコナデ	淡黄	淡黄 浅黄	精良　半透明光沢粒	
79	土師器	高坏脚部	SA9	—	(17.2)	—	ナデ 風化気味	工具によるナデ ヨコナデ	浅黄橙 黄灰	浅黄橙	精良	
80	土師器	鉢	SA9	(9.5)	(1.7)	(7.9)	ナデ 底部が黒く変色	ナデ 底部上面黒く変色	浅黄橙 褐灰	浅黄橙	黄色粒、黒色・透明光沢粒	
81	土師器	鉢口縁	SA9	—	—	—	櫛描波状文 ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	半透明光沢粒、黒色光沢粒	
82	土師器	鉢	SA9	—	—	—	ナデ黒変	ナデ黒変	黒褐 にぶい黄橙 浅黄橙	黒褐 浅黄橙	褐色粒、透明・半透明・黒色光沢粒、灰色粒、赤褐色粒	
83	土師器	ミニチュア	SA9	4.4	—	2.9	指ナデ・手捏ね 黒斑	手捏ね 黒斑	黒褐 灰白	黒褐	精良	
84	土師器	ミニチュア	SA9	3.3	—	2.5	指ナデ 手捏ね (一部黒斑あり)	指ナデ 手捏ね	淡黄 黒褐	浅黄橙	褐灰色粒、半透明光沢粒、黒色光沢粒	
85	土師器	甕底部	SA10	—	(3.1)	—	ナデ 指頭痕	タテ方向のナデ	浅黄橙 黄灰	浅黄橙 浅黄	褐色・灰色・黒色の粒、透明の光沢粒	
86	土師器	甕口縁～胴部	SA10	(7.7)	—	—	風化著しい	風化著しい	黄橙	浅黄橙 淡黄	灰・褐・黒色の粒、透明の光沢粒	
87	土師器	甕口縁	SA11	(24.8)	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙 橙 淡黄	赤褐色粒、褐色粒、黒色粒、半透明光沢粒、乳白色粒、黒色光沢粒	
88	土師器	甕口縁～胴部	SA11	(8.4)	—	—	ナデ 口縁部に指頭痕 スス付着	ナデ、指ナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	褐色・黒色・灰色の粒、半透明・透明・黒色光沢粒	
89	土師器	甕口縁	SA11	—	—	—	横方向のナデ 貼付突帯、押圧刻	ナデ	にぶい黄橙 淡黄	浅黄橙	褐色粒、微細な砂粒、光沢粒	
90	土師器	壺	SA11	8.5	—	(20.7)	ナデ	指ナデ 指頭痕	浅黄橙 橙	明黄褐 褐灰	褐色粒、黄色粒、半透明光沢粒 黒色・乳白色、橙色粒、黒色光沢粒	
91	土師器	壺口縁	SA11	—	—	—	櫛描波状文 ナデ	ナデ	明黄褐	橙	灰色粒、半透明・透明・黒色光沢粒、赤褐色粒	
92	土師器	壺口縁	SA11	(13.6)	—	—	ナデ	ナデ 指頭痕	浅黄橙 淡黄	淡黄	黒色・灰白色・赤褐色粒、黒色光沢粒、半透明光沢粒	
93	土師器	壺胴～底部	SA11	—	(2.4)	—	ミガキ 底部附近に黒変あり 平底	ナデ 指頭痕	橙 黄橙	橙	精良　赤褐色粒	
94	土師器	壺底部	SA11	—	5.3	—	ナデ、指ナデ 上げ底 指頭痕	ナデ 指頭痕	浅黄橙 褐灰 にぶい黄橙	橙	黄色粒、乳白色粒、褐灰色粒、赤褐色粒、黒色光沢粒、半透明光沢粒	
95	土師器	壺底部	SA11	—	(4.8)	—	ナデ スス付着	ナデ 指頭痕	淡黄 にぶい黄橙	灰黄 黄灰	褐色粒、灰色粒、黄色粒、橙色、黒色・乳白色の粒、黒色光沢粒、半透明光沢粒	
96	土師器	壺胴～底部	SA11	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 淡黄	赤褐色の小石、黄色粒、褐色粒、半透明光沢粒、灰白色粒、乳白色粒、黒色光沢粒	
97	土師器	高坏脚部	SA11	—	(18.3)	—	ミガキ、横方向のナデ 透し孔	ミガキ、一部ナデ	淡黄 にぶい黄橙	淡黄	乳白色の粒、黒色光沢粒	
98	土師器	高坏坏部～脚部	SA11	—	—	—	ナデ	ナデ 炭化物付着	坏…橙、黄橙 脚…明黄褐、橙	坏…黄橙、灰黄褐 脚…浅黄橙、にぶい黄橙	乳白色粒、灰白色、黒色の粒、透明・黒色光沢粒	
99	土師器	高坏脚部	SA11	—	(19.2)	—	ナデ、ミガキ 透し孔(四方)	ナデ、工具によるナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒・灰・褐色の粒、黒色・透明光沢粒	
100	土師器	鉢	SA11	(11.1)	(4.5)	10.4	ナデ、指ナデ 上げ底	タテ、斜方向のナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい黄橙 (底部内面)	赤褐色粒、半透明・黒色光沢粒、褐色粒	
101	土師器	鉢	SA11	(9.2)	—	—	斜・横方向のナデ	斜方向のナデ	浅黄橙	浅黄橙	黒色・褐色・灰色の粒	
102	土師器	鉢	SA11	(14.5)	(3.45)	(7)	ナデ ナデの後指頭痕	ナデ 横・斜方向のハケ目	浅黄橙	浅黄橙	灰色粒、赤褐色粒、黒色、半透明光沢粒	

第５表　前畑遺跡出土土器観察表（５）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
103	土師器	ミニチュア	SA11	5	—	1.8	手捏ね 指ナデ	手捏ね 指ナデ	淡黄 黄灰	灰白 灰	褐色・乳白色の粒 黒色透明の光沢粒	
104	土師器	ミニチュア	SA11	4.2	—	2.4	手捏ね ナデ	手捏ね ナデ	淡黄 浅黄橙	明黄褐	黒色・灰色の粒、黒色光沢粒	
105	土師器	ミニチュア	SA11	—	—	—	手捏ね 指ナデ	手捏ね 指ナデ	暗灰黄 灰黄	暗灰黄	乳白色・灰白色の粒	
106	土師器	甕	SA12	(26.2)	(4.2)	(29.3)	縦・横方向の ナデ	縦・横方向の ナデ、黒斑	にぶい黄橙 浅黄橙 黄灰	浅黄橙 にぶい橙	赤褐色粒、褐色・黄色の粒、半透明光沢粒 乳白色粒、黒色光沢粒	
107	土師器	甕	SA12	—	(4.6)	—	斜方向のナデ 指ナデ、上げ底	指ナデ	淡黄	黄灰	灰色粒、赤褐色粒、黒褐色粒、乳白色粒、半透明・黒色光沢粒	
108	土師器	甕	SA12	—	(5.9)	—	ナデ 指頭痕　上げ底	ナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	褐色粒、半透明・透明・黒色光沢粒、赤褐色粒	
109	土師器	壺	SA12	(9.2)	—	—	縦方向のナデ 横方向のミガキ	ヨコナデ	橙 明褐灰	橙 明褐灰	灰色粒、半透明光沢粒、褐色粒	
110	土師器	壺	SA12	—	—	—	ヨコナデ 刻み目突帯	ヨコナデ	橙 にぶい褐	橙	乳白色粒、半透明光沢粒、赤褐色粒	
111	土師器	壺 底部	SA12	—	(2.6)	—	ハケ目の後ナデ ナデ あげ底	タテ・斜のハケ目 の後ナデ	浅黄橙 淡黄	淡黄 灰白	灰色粒、赤褐色粒、半透明・透明・黒色光沢粒	
112	土師器	壺 底部	SA12	—	(3.5)	—	ナデ 底部…ヨコナデ	斜方向のハケ目 ナデ 指押え	浅黄橙 明黄褐	浅黄橙	褐色粒、半透明・黒色光沢粒	
113	土師器	壺 底部	SA12	—	2.7	—	ナデ 胴部…黒変	斜方向の工具ナデ の後ナデ、黒変 指押え	淡黄 灰黄褐	淡黄 褐灰	赤褐色、褐色の粒、半透明・黒色光沢粒	
114	土師器	高坏 脚部	SA12	—	—	—	ミガキ	ナデ	灰白	淡黄	褐色粒、黒色光沢粒、半透明光沢粒	
115	土師器	鉢 底部	SA12	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 褐灰	灰白	褐色粒、赤色粒、透明光沢粒 微細な黒色光沢粒	
116	土師器	ミニチュア 土器・鍋	SA12	4.8	—	3.4	手捏ね	手捏ね	浅黄橙	浅黄橙	褐色粒、赤褐色粒、半透明・黒色等光沢粒	
117	土師器	鉢 完形	SA13	10	3.8	9	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰褐・褐・乳白色・透明光沢粒	
118	土師器	鉢 胴部～底部	SA13	—	2.3	—	ナデ 黒斑	ナデ 工具によるナデ	浅黄橙	浅黄橙	褐色・灰色・黒色の粒、透明・黒の光沢粒	
119	土師器	鉢 胴部～底部	SA13	—	2.9	—	ナデ 一部黒斑	ナデ 工具によるナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰・黒・褐色粒、半透明の光沢粒 黒の光沢粒	
120	土師器	高坏 脚部	SA13	—	—	—	ナデ 三方透かし	工具による ヨコナデ	浅黄橙 淡黄	浅黄橙	微細な黒の粒、光沢粒	
121	土師器	器台	SA13	(19.4)	—	—	櫛描波状文 ナデ	ナデ	淡黄	淡黄	褐色・灰白・乳白色の粒、黒・透明の光沢粒	
122	土師器	器台	SA13	—	—	—	ヨコナデ後 櫛描波状文	ヨコナデ	淡黄 灰黄褐	淡黄	褐色・灰褐色の粒、透明の光沢粒	
123	土師器	器台	SA13	—	—	—	櫛描波状文 ヨコナデの上をタテに間隔おいてミガキ	ナデ	淡黄	淡黄	赤褐色・乳白色・褐色・灰色の粒、黒・透明の光沢粒	
124	土師器	器台	SA13	(14.1)	—	—	ヨコナデの上に タテのミガキ	櫛描波状文 ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰色・黒・褐色の粒、黒・半透明の光沢粒	
125	土師器	器台	SA13	(26.7)	(18)	(14.3)	ナデ ３コの透し 風化気味	ナデ 風化気味	淡黄 浅黄橙	淡黄	灰・灰白・黒・褐色の粒、黒・半透明・透明の光沢粒	
126	土師器	ミニチュア 土器・鍋	SA13	(4.6)	(0.55)	2.45	手捏ね	手捏ね	淡黄	淡黄	褐色・黒・褐灰の粒、透明の光沢粒	
127	土師器	ミニチュア 土器・鍋	SA13	(3.9)	(0.25)	2.6	手捏ね	手捏ね	淡黄	淡黄	褐色の粒、黒の光沢粒	

第６表　前畑遺跡出土土器観察表（６）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
128	土師器	ミニチュア土器・完形	SA13	3.0	0.6	2.7	手捏ね	手捏ね	浅黄橙 橙	淡黄	黒の光沢粒、褐色・灰色の粒	
129	土師器	ミニチュア土器	SA13	(3.65)	(0.65)	1.6	手捏ね	手捏ね	灰 灰白	灰	灰白・灰色・黒の光沢粒	
131	土師器	甕底部	SA14	—	3.6	—	工具によるナデ 部分的に黒変 指押え	タテ・斜方向のナデ ナデ	浅黄橙 淡黄	にぶい褐 灰褐	赤褐色・褐色粒、黒色光沢粒、半透明光沢粒、黄色粒	
132	土師器	甕底部	SA14	—	4.2	—	あげ底 ナデ	ハケ目	浅黄橙 黄灰 淡黄	浅黄橙	赤褐色粒、褐色粒、黒色光沢粒、灰白色粒、透明光沢粒	
133	土師器	壺口縁	SA14	(13.4)	—	—	ヨコナデ タテ方向の工具ナデ	ヨコナデ ヨコナデ後指押え	浅黄橙 にぶい橙	にぶい橙	褐色粒、半透明光沢粒、黒色光沢粒、橙色の粒	
134	土師器	壺底部	SA14	—	—	—	ナデ 底部…乳房状底部	斜・ナデの後ヨコ方向の工具ナデ、指押え	淡黄	淡黄	褐色、灰色、半透明光沢粒、黒色粒	
135	土師器	壺底部	SA14	—	—	—	丸底 ナデ、工具ナデ 一部黒変	ナデ 指押え	黄橙 明黄褐	浅黄橙 褐灰	半透明光沢粒、黒色光沢粒、褐色粒	
136	土師器	壺底部	SA14	—	—	—	平底 工具ナデ ナデ	ナデ	橙 明黄褐	黄灰	褐色粒、半透明・黒色光沢粒、橙色粒	
137	土師器	壺底部	SA14	—	(6.6)	—	斜・ヨコ方向のナデ、ナデ	ナデ 炭化物付着	淡黄 浅黄橙 にぶい黄橙	淡黄 にぶい黄橙	褐色粒、赤褐色粒、半透明光沢粒、黒色粒、乳白色粒	焼成前底部穿孔
138	土師器	高坏脚部	SA14	—	(17.55)	—	タテナデ 未貫通透かし 貫通透かし	放射状工具痕 ヨコナデ	浅黄橙 淡黄	浅黄橙 淡黄	褐色・灰色粒、黒色半透明光沢粒	
139	土師器	高坏脚部	SA14	—	(4.8)	—	タテ方向ミガキ ナデ	ヨコナデ	黄橙	黄橙	黒色半透明光沢粒、乳白色・褐色粒	
140	土師器	器台	SA14	—	20.5	—	ナデ・黒斑 透し	タテナデ ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙 淡黄	赤褐・橙・褐色・半透明・黒色の光沢粒	
141	土師器	鉢口縁～底部	SA14	12	9.5	6.5	ミガキ・黒変 平底	一部ミガキ	淡黄 浅黄橙	淡黄	赤褐・褐色・半透明光沢粒、黒色光沢粒	
142	土師器	鉢完形	SA14	11.6	3.6	10	ナデ 全体に指頭痕	ナデ	浅黄橙 灰白	浅黄橙	赤褐色・灰・乳白色・褐色・半透明光沢粒	
143	土師器	ミニチュア土器・完形	SA14	4.5	1.7	4.0	手捏ね	手捏ね	浅黄橙	にぶい橙	赤褐・灰色・半透明黒色光沢粒、乳白色粒	
145	土師器	甕口縁～胴部	SA15	30.5	—	—	ハケ目 スス付着	ハケ目	橙 にぶい橙 にぶい褐	にぶい黄橙 淡黄	淡橙・褐・灰色の粒、透明・半透明の光沢粒	
146	土師器	甕口縁	SA15	22.1	—	—	ナデ	ナデ	浅黄 浅黄橙	浅黄橙 にぶい黄褐	褐・黒・灰白・灰褐色の粒、黒・半透明の光沢粒	
147	土師器	壺口縁～胴部	SA15	14.6	—	—	ナデ	ナデ 指頭痕	淡黄 浅黄橙	淡黄	赤褐・褐色の粒、透明・黒の光沢粒	
148	土師器	高坏坏部	SA15	26.5	—	—	ヘラミガキ 黒斑	スス付着 ヘラミガキ 黒斑	浅黄橙 黄灰	淡黄 黄灰	褐・黒・褐灰・灰白・透明・半透明・黒の光沢粒	
149	土師器	高坏坏部～脚部	SA15	—	—	—	ナデ ヨコナデ	ナデ	黄橙	浅黄橙	黒・灰・褐色の粒、透明・半透明の光沢粒	
150	土師器	鉢	SA15	(15.0)	—	—	ナデ	タテ方向のナデ	橙	浅黄橙	灰褐色・乳白色・透明黒色光沢粒、微細な砂粒、光沢粒	
151	土師器	鉢	SA15	(11.1)	2	7.9	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭痕	浅黄橙 淡黄	淡黄 黄灰	乳白色・褐色の粒、・黒・褐灰・透明・黒の光沢粒	
152	土師器	片口鉢完形	SA15	9.6	9.6	3.2	ナデ	ナデ 指頭痕	灰白・灰黄 灰	灰白 灰	褐灰・灰白の粒、半透明・黒の光沢粒	
153	土師器	ミニチュア	SA15	—	0.9	3.8	手捏ね	手捏ね	にぶい黄褐	にぶい黄褐	灰褐色・黒・灰白の粒、透明・黒の光沢粒	
155	土師器	甕胴部～底部	SA16	—	(5)	—	斜方向のナデ ハケ目の後ナデ 丸底	斜方向のハケ目の後ナデ	黄橙	淡黄	灰色・黒・褐色の粒	

第７表　前畑遺跡出土土器観察表（７）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
156	土師器	高坏脚部	SA16	—	—	—	ミガキ ナデ 未貫通・穿孔	ナデ	黄橙	坏…黄橙 浅黄橙 脚…淡黄	灰色・褐色・灰白の粒、透明・黒の光沢粒	
157	土師器	高坏脚部	SA16	—	—	—	ミガキ 透し	ナデ	浅黄橙	淡黄、灰白 浅黄橙	灰白・褐色・黒の粒、透明・半透明の光沢粒	
158	土師器	鉢 胴部～底部	SA18	—	—	—	タテ方向のハケ目 スス付着	タテ方向のナデ	浅黄橙	浅黄橙	赤褐色の粒	
160	土師器	甕 口縁～頸部	SA19	—	—	—	ナデ スス付着	ナデ	浅黄 浅黄橙	浅黄橙 にぶい橙	褐色・灰白・黒の粒、透明・黒の光沢粒	
161	土師器	壺 胴部	SA19	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	淡黄	灰色・黒・褐色の粒、黒・半透明の光沢粒	
162	土師器	鉢 口縁～胴部	SA19	(13.7)	—	—	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ 斜のハケ目 指頭痕	灰黄褐 灰褐	淡黄	灰褐色・黒・褐色の粒、黒、微細な光沢粒	
163	土師器	鉢 口縁～胴部	SA19	(10.8)	—	—	斜方向のナデ	斜のナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙 にぶい褐	褐色・灰・赤褐色・黒の粒、透明・黒の光沢粒	
164	土師器	高坏脚	SA20	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙 淡黄	灰白 淡黄	褐色粒、半透明光沢粒	
165	土師器	甕 口縁～胴部	SA21	(19.2)	—	—	ヨコナデ タテ方向のハケ目 スス付着	ヨコナデ 斜方向のハケ目 炭化物付着	にぶい橙 浅黄橙	にぶい橙	赤褐色粒、灰色粒、半透明の光沢粒	
166	土師器	甕 胴部～底部	SA21	—	3.6	—	斜方向のハケ目 ヨコナデ	ナデ 炭化物付着	浅黄橙	浅黄橙	褐色粒・赤褐色粒、半透明・黒色光沢粒	
167	土師器	高坏裾	SA21	—	(15.0)	—	ヨコナデ 透し	ナデ	淡黄 浅黄橙	浅黄橙	褐色・赤褐色・灰色粒、半透明の光沢粒、黒色光沢粒	
168	土師器	甕 完形	SA22	20.2	(5.3)	25.3	タテナデ 指頭痕 スス付着	ヨコナデ 指頭痕 黒斑	淡黄 にぶい黄橙 にぶい黄褐	淡黄 浅黄橙 にぶい黄褐	黒・灰・褐色の粒、半透明・黒の光沢粒	
169	土師器	甕 口縁～胴部	SA22	—	—	—	ナデ上げ、ハケ目の後ナデ、スス付着	ナデ上げ 炭化物付着 ナデ	浅黄	浅黄橙	灰褐色・褐灰・褐色・黒・灰白の粒、半透明の光沢粒	
170	土師器	甕 口縁～胴部	SA22	—	—	—	ヨコナデ、ナデ上げ、タテ・斜方向のハケ目後ナデ、スス付着	ナデ	浅黄	浅黄橙	褐色・灰・灰褐色の粒、透明・半透明の光沢粒	
171	土師器	高坏坏部	SA22	(18)	—	—	口縁部…浅い凹 ナデ後タテ方向のミガキ 斜方向のミガキ	斜方向のミガキ	橙	橙	灰褐色・灰・褐色の粒、透明・黒の光沢粒	
172	土師器	高坏脚部	SA22	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙 灰黄	黒・透明の光沢粒、褐色・灰褐色の粒、微細な砂粒	
173	土師器	鉢	SA22	(18)	—	—	タテ・斜方向のハケ目後ミガキ、ナデ 体部上面スス付着黒斑	炭化物、指頭痕 斜方向のハケ目 ナデ	にぶい黄橙 褐	浅黄橙 にぶい黄橙 灰褐	褐色・褐灰・黒の粒、黒・透明の光沢粒	
174	土師器	甕	SA25	27.2	6	35.4	ナデ・ヨコナデ 一部ケズリ、指頭痕 スス付着	ヨコナデ、工具痕、指頭痕、胴部～底部黒変	浅黄橙	灰白	赤褐色・褐色・褐灰・灰褐色、透明・半透明・黒の光沢粒	
175	土師器	甕	SA25	(27.1)	—	—	ヨコナデ 一部黒変	ヨコナデ ヨコ方向のハケ目	にぶい黄橙 灰褐	にぶい黄橙	灰褐色・褐色の粒、黒・透明の光沢粒	
176	土師器	壺	SA25	(7.4)	(4.2)	(16.1)	タテ方向のミガキ 斜、ヨコ方向のミガキ 指頭痕	ヨコ方向のミガキ ナデ、指頭痕	にぶい黄橙 にぶい褐	にぶい橙	褐色の粒、微細な乳白色の粒	
177	土師器	壺 胴～底部	SA25	—	(4)	—	ミガキ	ナデ 指頭痕	にぶい褐 黒褐	灰黄 褐灰	黒い透明の光沢粒、乳白色・黒・褐色の粒	
178	土師器	壺 頸～胴部	SA25	—	—	—	ミガキ	ヨコナデ 指頭痕	にぶい橙	明褐灰	褐色・褐灰・灰色の粒、半透明・透明・黒の光沢粒	
179	土師器	鉢 (コップ型)	SA25	(7.7)	(6.1)	(12.7)	ナデ 一部黒変	ナデ	にぶい褐 にぶい橙 にぶい黄橙	にぶい橙 にぶい黄橙	灰・灰白・褐色の粒、黒・半透明・透明の光沢粒	
180	土師器	甕	SA27	(23.8)	(4.3)	(28.2)	タテ方向のナデ 一部ハケ目 スス付着	ナデ、指頭痕 炭化物付着	にぶい黄橙 淡黄	淡黄 にぶい褐	褐色・灰・褐色の粒、赤褐色の粒	
181	土師器	甕	SA27	(22.3)	(6)	(13.6)	ナデ ミガキ 指頭痕	ナデ 黒斑	浅黄橙 淡橙	淡黄 浅黄橙	褐色・灰色の粒、黒・赤褐色の粒	

第８表　前畑遺跡出土土器観察表（８）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
182	土師器	壺 二重口縁	SA27	—	—	—	櫛描波状文 ナデ	ヨコナデ	明黄褐	明黄褐	灰白の粒、黒・灰色の粒	
183	土師器	鉢 口縁部	SA27	—	—	—	櫛描波状文 ナデ	ナデ 黒変	橙	浅黄橙 灰黄褐	赤褐色の粒	
184	土師器	鉢 口縁～底部	SA27	(15.4)	(4.8)	(13.9)	ナデ 全体に風化気味	ナデ 炭化物付着	浅黄橙 灰黄褐	にぶい橙 浅黄橙	灰褐色・褐色の粒、黒・褐色の粒	
185	土師器	ミニチュア	SA27	(4.2)	—	(2.4)	手捏ね	手捏ね	にぶい黄橙	にぶい黄橙	褐色の粒、灰色の粒	
186	土師器	ミニチュア	SA27	(3.0)	—	(2.7)	手捏ね	手捏ね	淡黄 灰黄	淡黄	灰色の粒・半透明・黒の光沢粒、褐色・乳白色の粒	
187	土師器	ミニチュア 甕	SA27	5.1	—	3.6	手捏ね	手捏ね	淡黄 にぶい黄橙	褐灰 黒褐	黒光沢粒、褐色の微細粒	
189	土師器	カメ 頸部	SA26	—	—	—	刻み目突帯 ミガキ	ヨコナデ タテ方向のナデ	浅黄橙	にぶい黄橙 灰黄褐	黒・灰褐・褐色の粒、黒・透明の光沢粒	
190	土師器	ミニチュア 甕	SA26	3.95	—	2.2	手捏ね 黒斑	手捏ね	浅黄 黄灰	浅黄橙 淡黄	褐色・灰色の粒、透明の光沢粒	
192	土師器	長頸壺	SA28	(6.4)	—	14.0	ヨコナデ 粗なミガキ、ナデ	タテ、ヨコ方向のナデ ナデ	にぶい橙	にぶい橙	灰褐色・灰白の粒、黒い光沢粒	
193	土師器	鉢	SA28	(12.8)	—	—	ヨコナデ、ナデ 櫛描波状文	ヨコナデ ナデ	黄橙	黄橙	黒・透明光沢粒、灰白・乳白色の粒	
194	土師器	ミニチュア 甕	SA28	5.1	—	3.8	手捏ね	手捏ね	淡黄	浅黄橙	褐色・黒の粒、半透明の光沢粒	
195	土師器	ミニチュア 甕	SA28	4.3	—	3.5	手捏ね	手捏ね	灰黄褐	黒褐	灰白の粒、透明の光沢粒	
196	土師器	甕 頸部～底部	SA29	—	4.3	—	スス付着、ナデ 指頭痕、あげ底	スス付着、ナデ ヨコナデ、指頭痕	浅黄橙 にぶい黄橙	淡黄、灰白 にぶい黄橙	灰褐色・灰白・灰色の粒、褐色・褐灰の粒	
197	土師器	甕 口縁～底部	SA29	(13.4)	3.95	13.8	ナデ、黒斑	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙	褐色・灰褐色・黒・灰色の粒、黒・透明・半透明の光沢粒	焼成前 底部穿孔
198	土師器	壺 口縁	SA29	—	—	—	ヨコナデ、ヘラ工具によるタテ方向のナデ	ナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙	精良　微細な黒い粒	
199	土師器	甕 口縁	SA30	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい橙 にぶい赤褐	橙	半透明粒、金色の光沢粒、黒・褐色・乳白色粒	
200	土師器	鉢 口縁～底部	SA30	7.6	2.5	6.7	ナデ	ナデ 指頭痕	明黄褐 黄橙	にぶい黄橙	黒・灰・褐色粒、半透明・黒の光沢粒	
201	土師器	鉢 口縁～胴部	SA33	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙	淡黄 にぶい黄橙	黒・褐色・灰色の粒、半透明の光沢粒	
202	土師器	甕	SA38	23.0	5.5	27.7	ナデ ハケ目 スス付着	ハケ目 黒斑	にぶい黄橙	にぶい橙	赤褐・灰褐色粒、乳白色・透明光沢粒	
203	土師器	甕 口縁～胴部	SA38	(18.5)	—	—	タタキ	ハケ目 ナデ	にぶい褐 灰褐	にぶい黄橙 褐灰、黄褐	灰白・黒・褐色粒、半透明の光沢粒	
204	土師器	甕 口縁～胴部	SA38	—	—	—	風化 スス付着	ナデ	淡黄	淡黄 浅黄	褐・灰・黒色粒、半透明の光沢粒	
205	土師器	高坏 坏～脚部	SA38	—	14.6	—	ハケ目 ヨコナデ	ハケ目 ヨコナデ	橙	橙	精良	
206	土師器	高坏 脚部	SA38	—	(24)	—	ナデ	ナデ	淡黄	浅黄橙	褐・黒・灰色粒、黒の透明光沢粒	
207	土師器	甕 口縁	SA40	—	—	—	ナデ 刻み目突帯	ナデ	浅黄橙 淡黄	淡黄 にぶい橙	褐色・黒色粒、半透明・黒の光沢粒	
208	土師器	壺 口縁	SA40	—	—	—	ヨコナデ	ナデ 櫛描波状文	浅黄橙	浅黄橙	褐・灰褐色粒	

第9表　前畑遺跡出土土器観察表（9）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
209	土師器	高坏	SA40	38.8	—	—	ハケ目 ナデ 穿孔	ミガキ ナデ 黒斑	浅黄橙	浅黄橙	灰・黒・褐色粒、透明・半透明の光沢粒	
210	土師器	高坏 坏部	SA40	37.9	—	—	ナデ ミガキ 黒斑	ナデ ミガキ	にぶい褐 灰褐	浅黄橙 灰褐 にぶい褐	赤褐色粒、黒の透明・半透明の光沢粒	
211	土師器	高坏 坏部	SA40	(39.0)	—	—	ヨコナデ ハケ目	風化	にぶい褐 淡黄 にぶい橙	淡黄 にぶい褐	灰・灰白・赤褐色粒、透明・半透明の光沢粒	
212	土師器	高坏 坏部	SA40	(34.8)	—	—	ハケ目 ナデ	ナデ	淡黄 にぶい黄橙	淡黄 浅黄橙	灰・黒・褐色粒、黒の光沢粒、半透明光沢粒	
213	土師器	高坏 脚部	SA40	—	—	—	ハケ目 穿孔	ナデ ハケ目	褐 褐灰	灰褐 黒褐	黒・灰・褐色粒、黒の透明・半透明の光沢粒	
215	土師器	ミニチュア 鍋	SC1	2.9	—	2.5	手捏ね	手捏ね	淡黄	淡黄 褐灰	灰・褐色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒	
216	土師器	甕 口縁～胴部	SC3	(20.3)	—	—	ナデ ハケ目 スス付着	ナデ ハケ目 指頭痕	淡黄 黒褐	にぶい黄橙 浅黄橙	灰色粒、赤褐色粒、半透明光沢粒、黒色光沢粒	
217	青磁	碗 口縁	SA3	—	—	—	貫入	貫入	明オリーブ灰	明オリーブ灰	精良	
218	青磁	碗 口縁	SA3上	—	—	—	—	—	灰白	灰白	精良	
219	青磁	碗 胎部	SA3	—	—	—	貫入	貫入	黄褐 オリーブ褐	黄褐 オリーブ褐	精良	
220	白磁	皿 底部	SA3	—	3.0	—	高台露胎	—	白	白	精良	
223	縄文	深鉢 口縁～胴部	SC16	(39.6)	—	—	ナデ	ヨコナデ	橙 灰褐	橙 にぶい褐	赤褐・黒・黄色粒、透明・黒光沢粒	
224	縄文	深鉢 口縁～胴部	SC16	(25.2)	—	—	ナデ 刻み目突帯	ナデ	灰褐 にぶい橙	橙 褐灰	赤褐色粒、透明光沢粒	
225	縄文	深鉢 底部	SC16	—	7.6	—	ナデ	ナデ 炭化物	橙 明黄褐	灰黄褐 灰褐	褐・黒・乳白色粒、半透明光沢粒	
226	縄文	浅鉢	SC16	(24.7)	—	—	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ 黒斑	橙	黄橙 灰黄褐	黄色粒、乳白色・黒色・赤褐色粒	
227	縄文	浅鉢 口縁～胴部	SC16	—	—	—	ナデ スス付着	ナデ	橙 黒褐	にぶい褐	青褐色粒、半透明・黒色光沢粒	
228	土師器	皿	SE1	6.5	5.5	1.6	ナデ 糸切り底	ナデ	橙 にぶい橙	橙	精良	
229	陶器	すり鉢	SE1	—	—	—	ナデ	ナデ 6条・1単位による櫛状かき目	灰赤 橙	橙 灰赤	乳白色粒、微細な半透明乳白色粒	備前
230	青磁	盤	SE1	—	4.9	—	施釉 高台内露胎	施釉	灰白	黄灰	精良	
231	青磁	碗	SE1	—	6.2	—	施釉 高台内露胎	施釉	明緑灰	明緑灰	精良	
232	陶器	碗	SE1	—	4.8	—	施釉 高台～高台露胎	施釉 蛇の目釉ハギ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良	
233	青磁	碗	SE1	—	4.8	—	施釉 高台内一部露胎	施釉	オリーブ黄	オリーブ黄	精良	
234	染付	皿	SE1	10.8	4.0	2.8	施釉 基筒底	施釉 朱色の付着物	灰白	灰白	精良	
236	縄文	浅鉢 口縁	SA12	—	—	—	孔列文 刻目突帯 ナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	灰黄 淡黄	透明光沢粒、灰白色粒、褐色粒・黒色光沢粒	
237	縄文	浅鉢 口縁	表土	—	—	—	孔列文 ナデ スス付着	ナデ	明褐灰 黒褐	褐灰 にぶい黄橙	灰白・褐色粒、微細な光沢粒	

第10表　前畑遺跡出土土器観察表（10）

レイアウト番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
238	縄文	浅鉢 口縁	SA10	－	－	－	沈線 ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐	にぶい赤褐	透明光沢粒、微細な乳白色・褐色の粒	
239	縄文	浅鉢 口縁	表土	－	－	－	ミガキ ヨコ方向の沈線文	ミガキ ヨコ方向の沈線文	灰褐	灰褐	精良	
240	縄文	浅鉢 口縁	SA7	－	－	－	ナデ 沈線	ナデ	黄灰 にぶい黄橙	褐灰	褐色粒、半透明・黒色光沢粒、淡黄色粒	
241	弥生	甕 口縁	表土	－	－	－	ミガキ 黒変	ミガキ	灰褐 黒褐・褐	褐 黒褐	褐・赤褐・灰褐の粒、微細な透明・黒の光沢粒	
242	弥生	甕 底部	表土	－	4.4	－	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	灰・褐色・黒色の粒、半透明の光沢粒	焼成前底部穿孔
243	弥生	壺 口縁	表土	－	－	－	ナデ 櫛描波状文	ナデ	浅黄橙	淡黄 浅黄	褐色・乳白色粒、透明光沢粒、黒色光沢粒	
244	土師器	ミニチュア 鼎脚	表土	－	6.4	－	ナデ	ナデ	橙	橙	微細な灰白・黒の粒、透明・黒の光沢粒	
245	土師器	高坏 脚部	表土	－	－	－	ヘラミガキ	ヨコナデ	浅黄橙 にぶい黄橙	浅黄橙	赤褐色・微細な黒・褐色粒、透明・黒の光沢粒	
246	青磁	碗	表土	12.1	－	－	施釉 貫入	施釉 貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	
247	青磁	碗	表土	－	5.1	－	高台内露胎 回転ナデ 施釉	施釉	灰白	灰白	精良	
248	青磁	盤	SA27	－	－	－	貫入・施釉 別個体付着 高台内露胎	施釉 貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	精良	
249	陶器	耳付壺 口縁～鼎脚	表土	－	－	－	施釉 口唇部露胎	施釉 ヨコナデ	褐	褐	半透明の光沢粒、微細な黒・褐色の粒	
250	瓦器	浅鉢	SA34	－	－	－	施釉 押型文	施釉 ナデ	灰白	黄灰	精良	

第11表　前畑遺跡出土石器・土錘観察表

レイアウト番号	出土地点	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石材	備考
50	SA6	尖頭状石器	5.3	2.8	0.6	11.1		両側縁に加工が見られる。スクレイパー（広義の）か？
130	SA13	石錐 石鏃	(2.3)	1.3	0.5	1.3		
144	SA14	石包丁	5.4	9.3	1.0	89.4		未貫通穿孔 両端抉り
154	SA15	のみ状石器	3.5	2.3	0.2	2.8		
159	SA18	砥石	9	3.9	1.4	92.9		
188	SA27	石包丁	4.1	6.6	0.7	33.4		２孔両面穿孔
191	SA28	石包丁	3.7	6.9	0.6	25.7		２孔両面穿孔
214	SA40	石包丁	9.3	3.6	0.9	45		
251	遺構外	尖頭状石器	4.7	2.4	0.7	9.8		磨製石器（石斧か？）の欠損品を２次加工したもの
62	SA7	土錘	(2.1)	(1.8)	(1.8)	4		

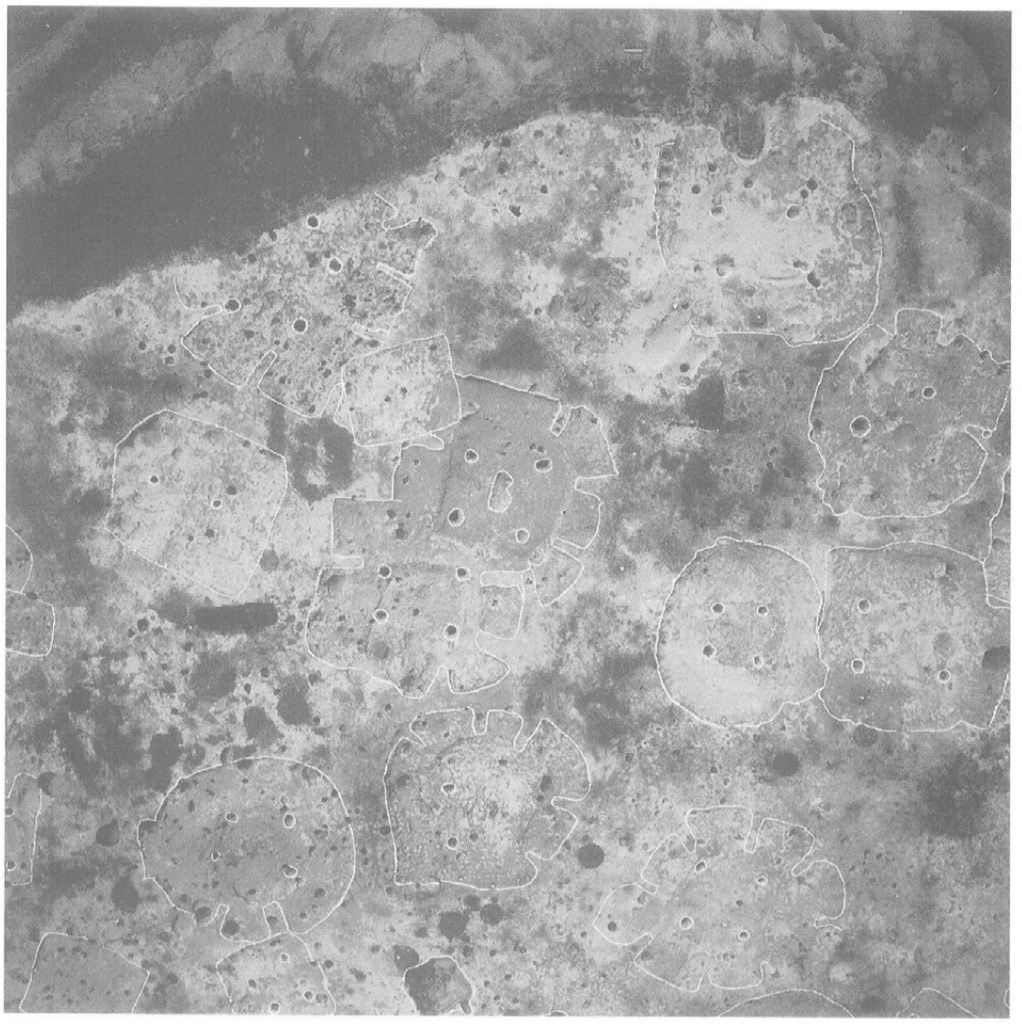
図　　版

前畑遺跡
完掘状態

遺構検出状況

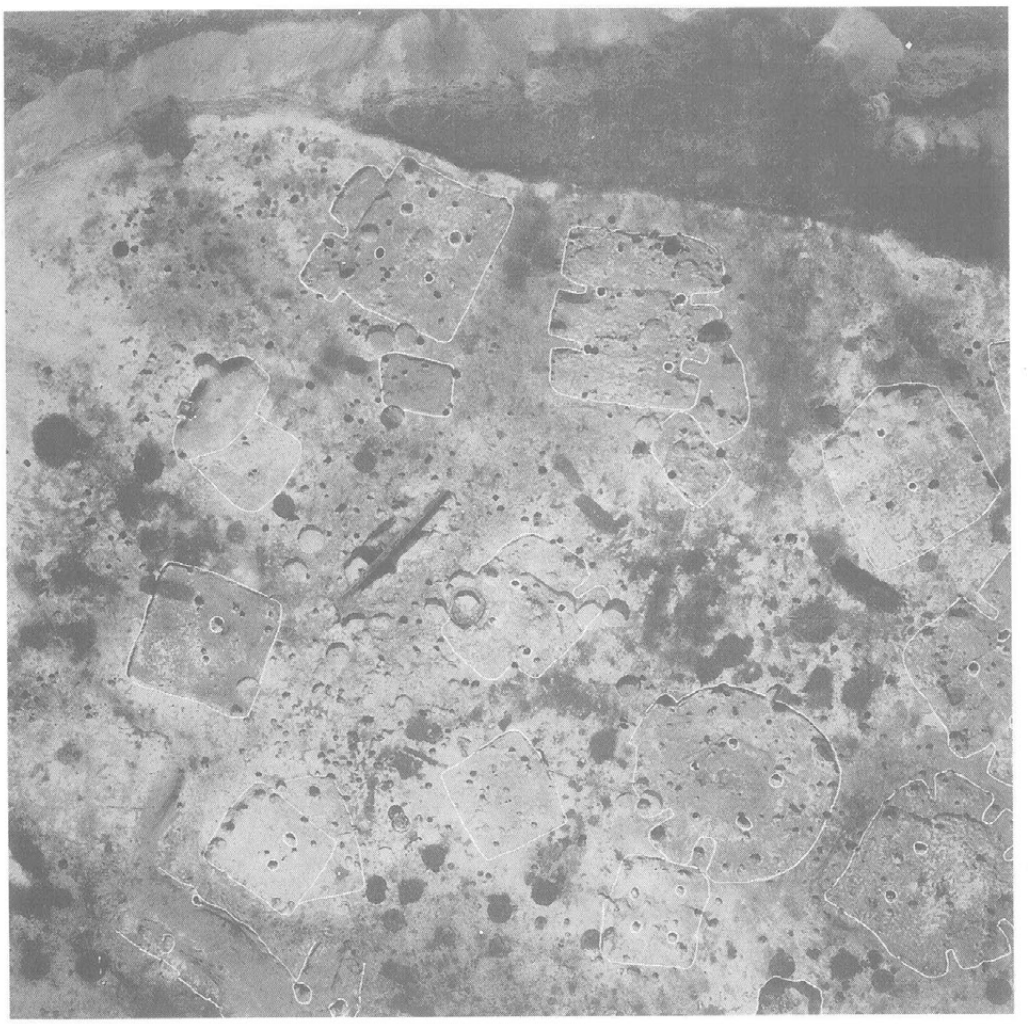
図版 2

前畑遺跡
空中写真(1)

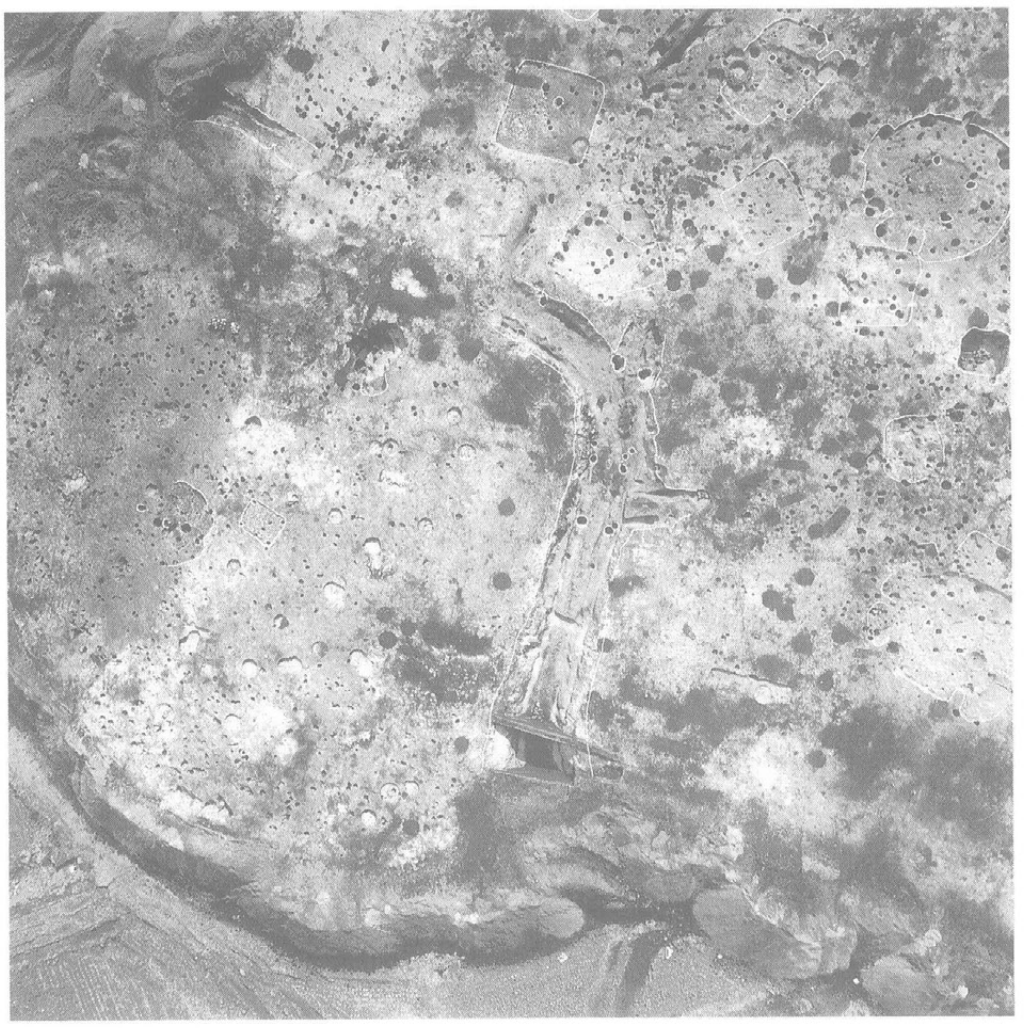


空中写真(2)

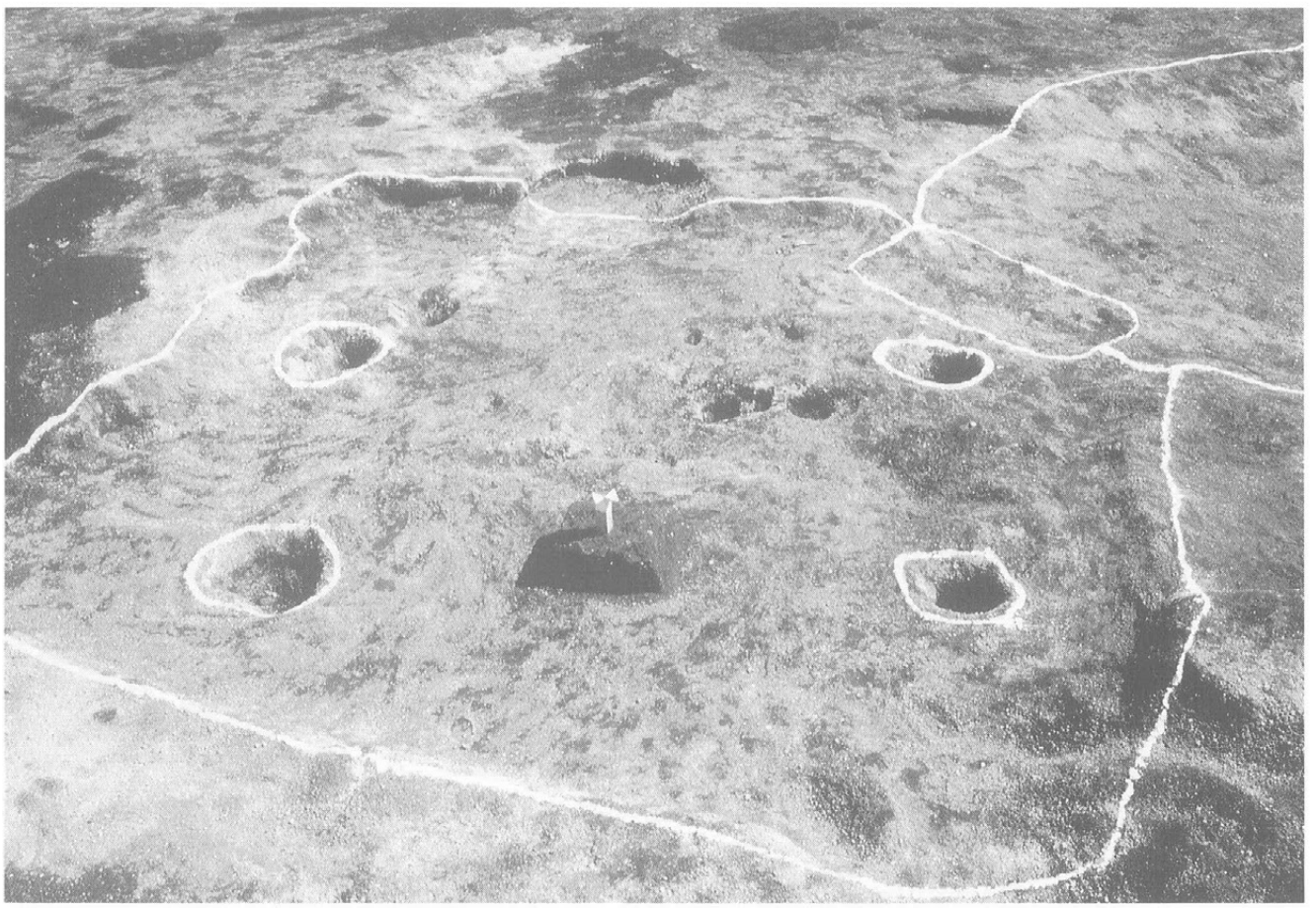
空中写真(3)



空中写真(4)



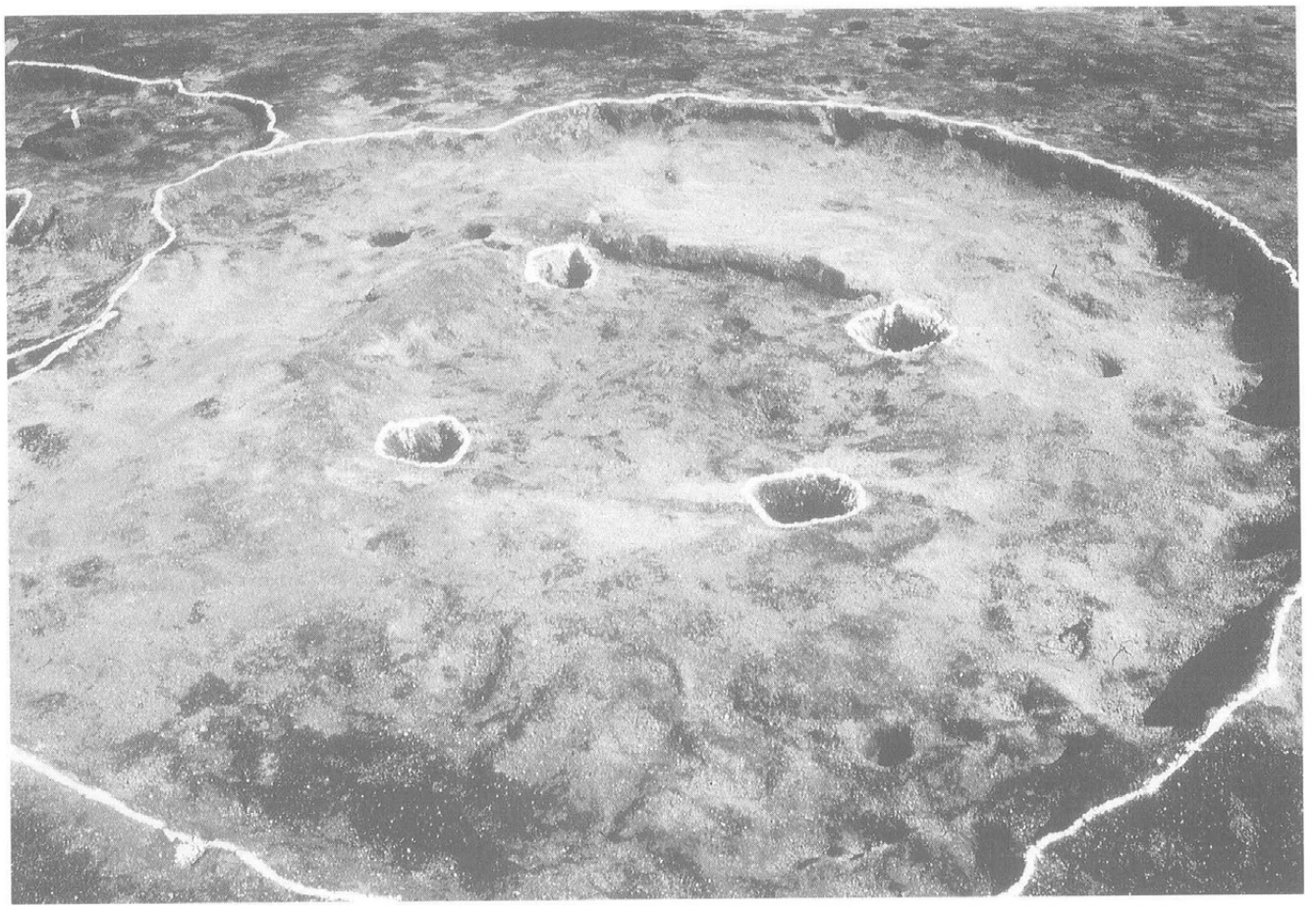
図版 4



SA2

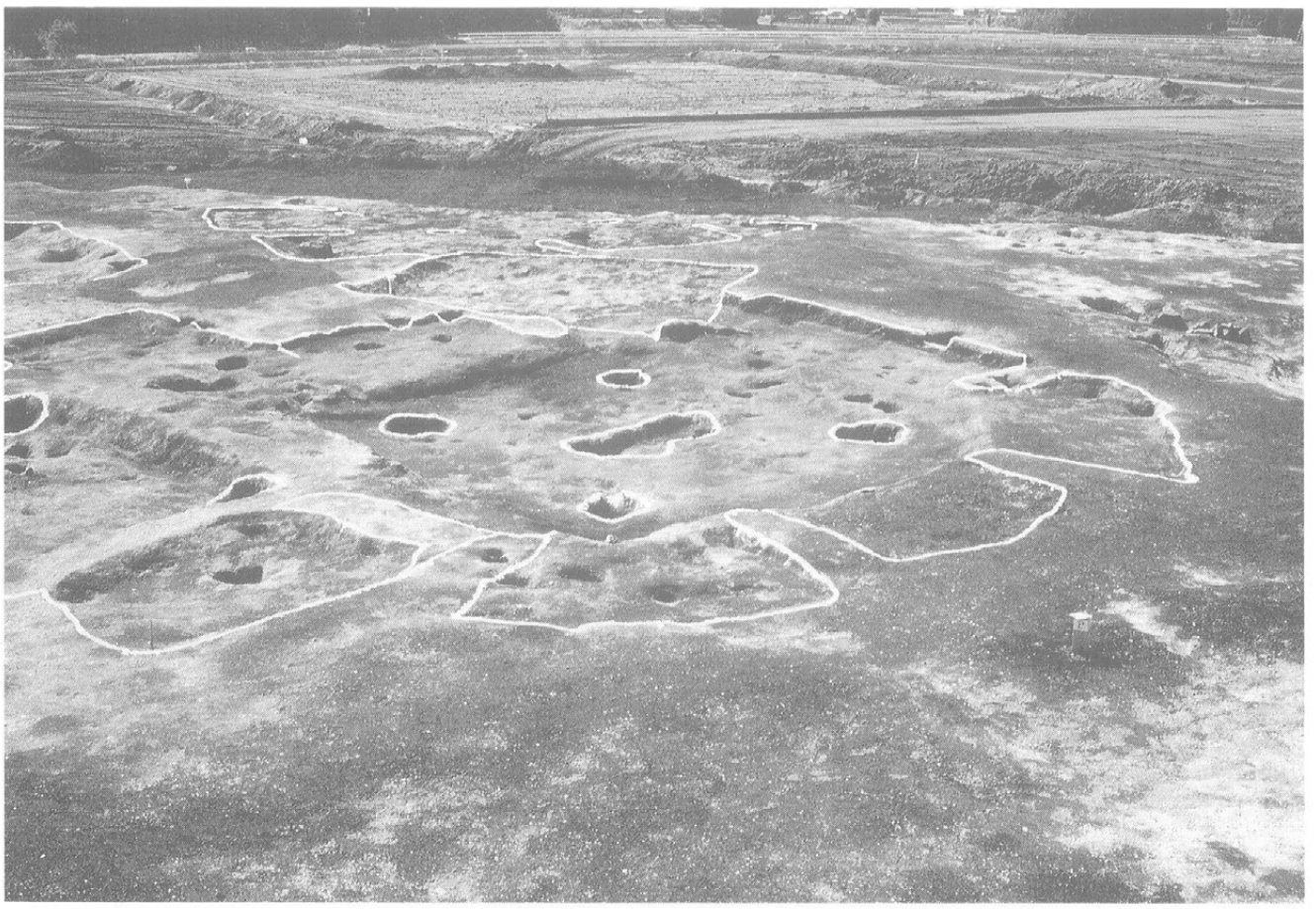
SA4

ＳＡ５土器出土状況



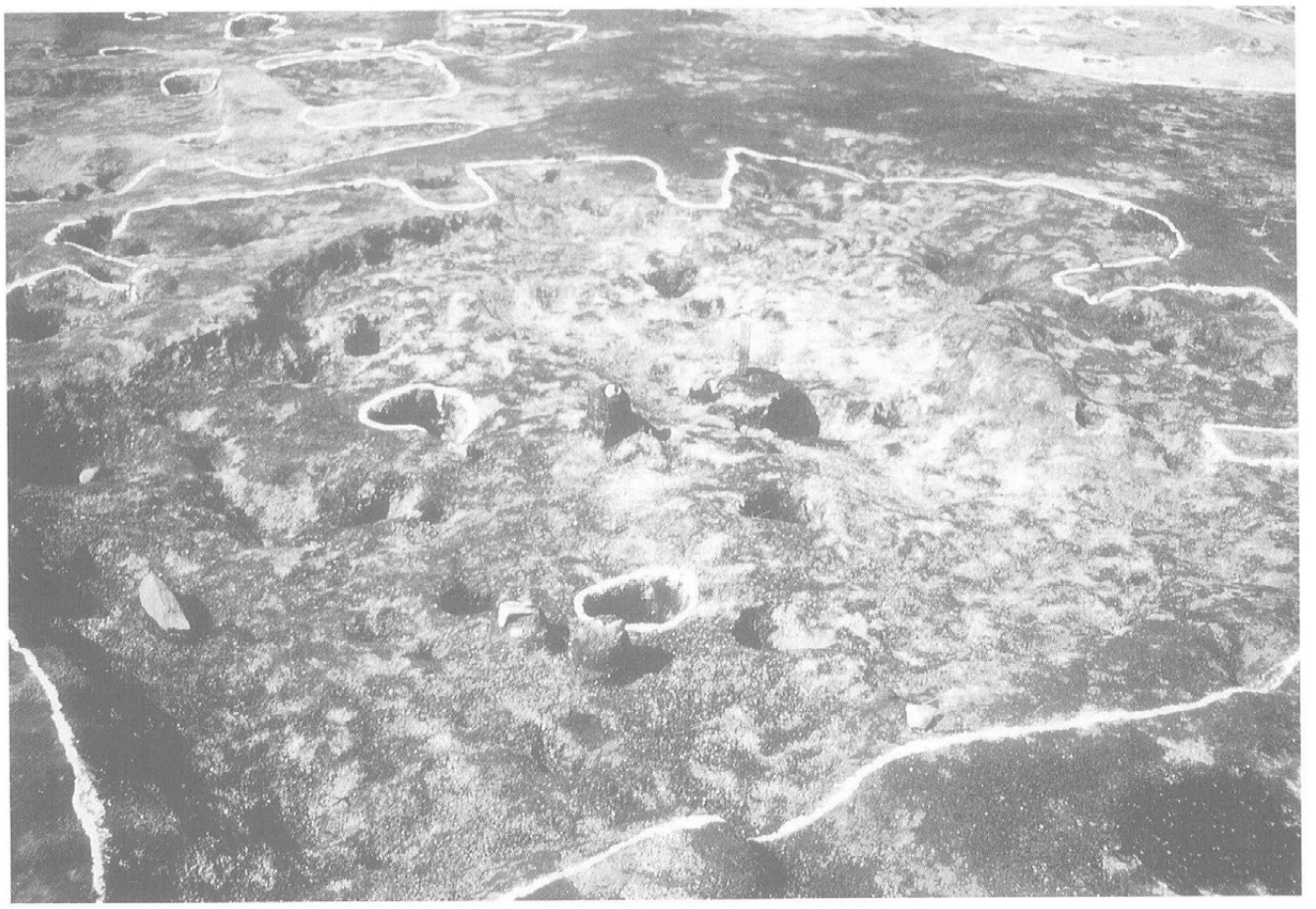
ＳＡ７

図版 6

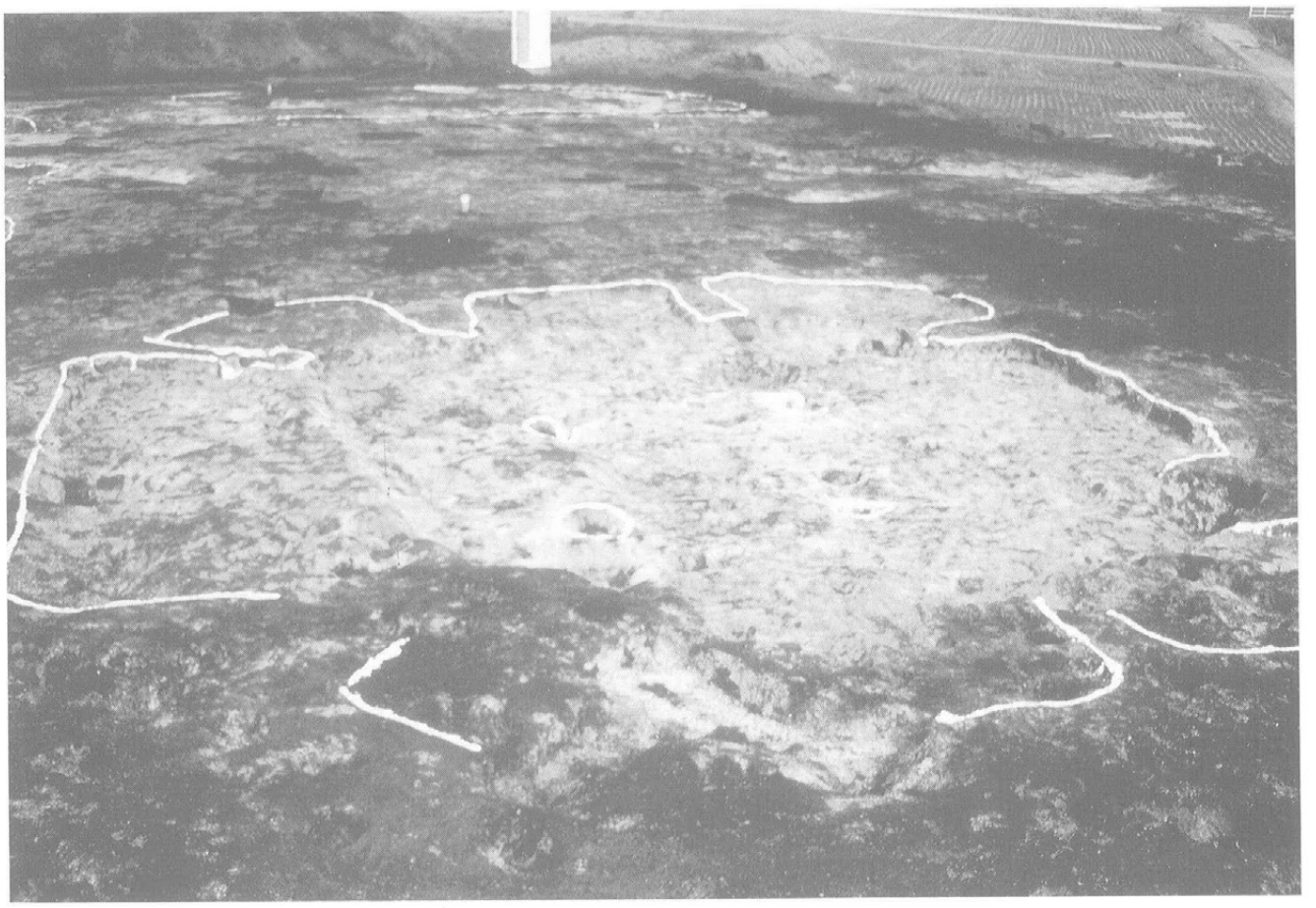


S A11

S A12

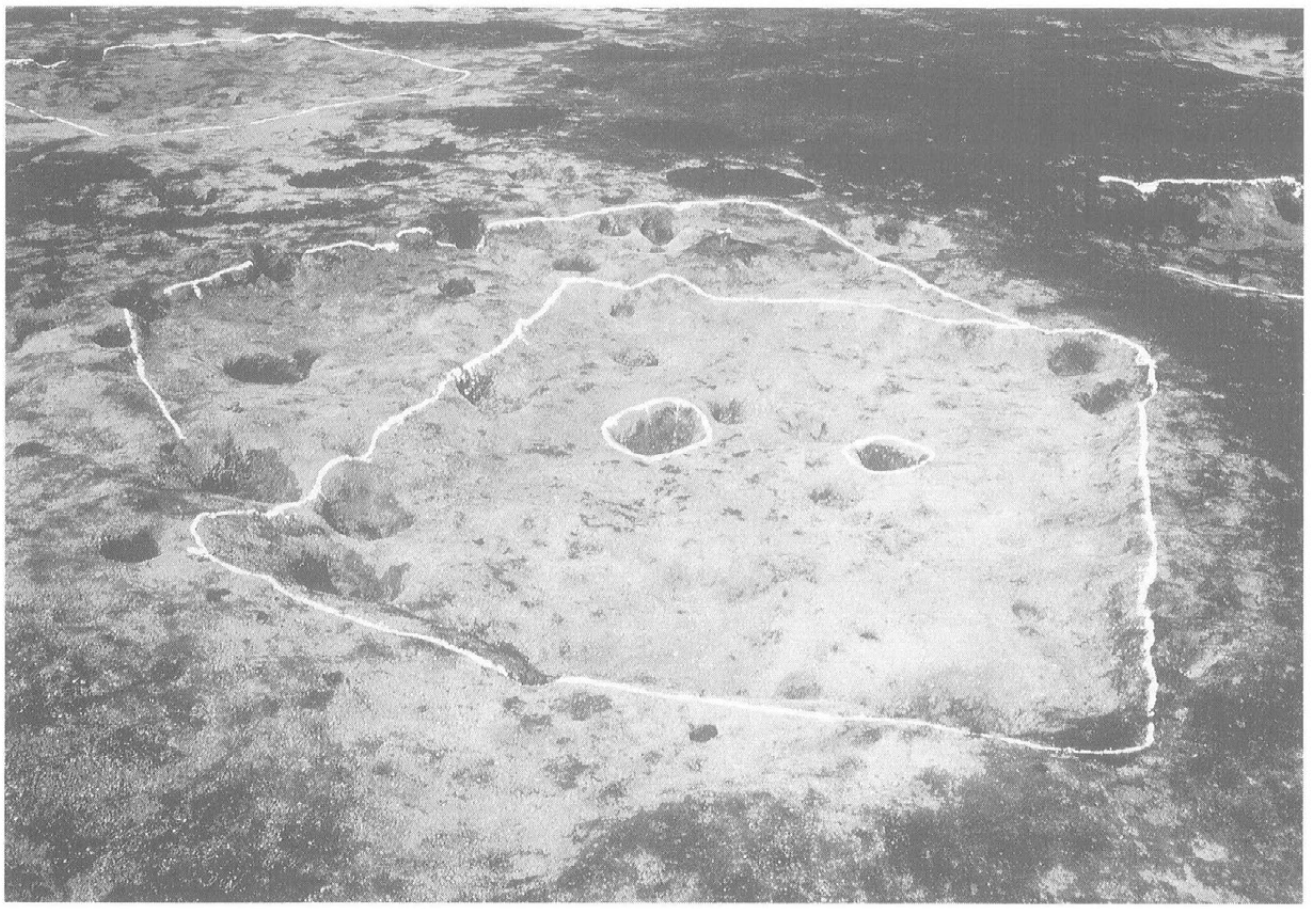


S A14

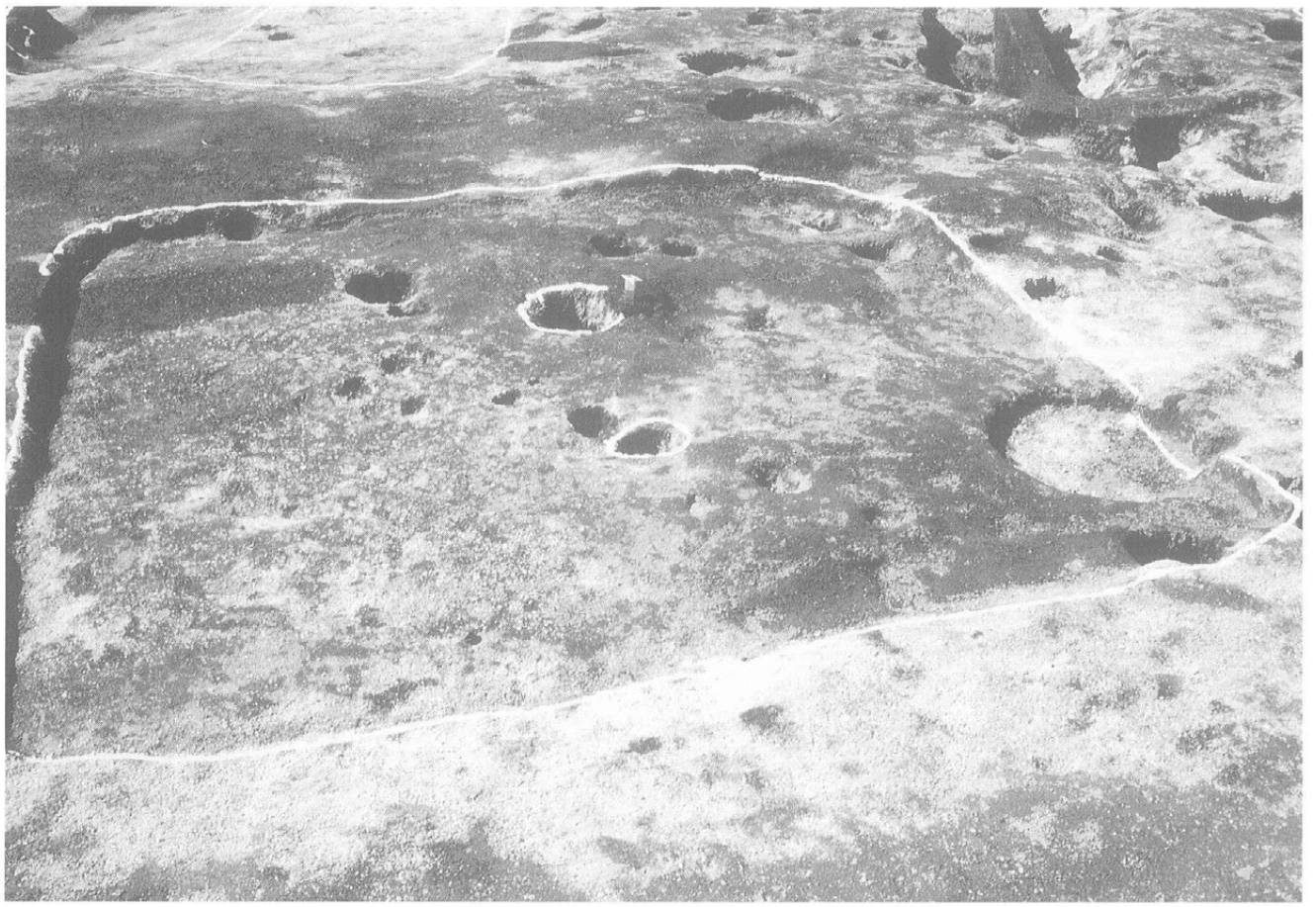


S A19

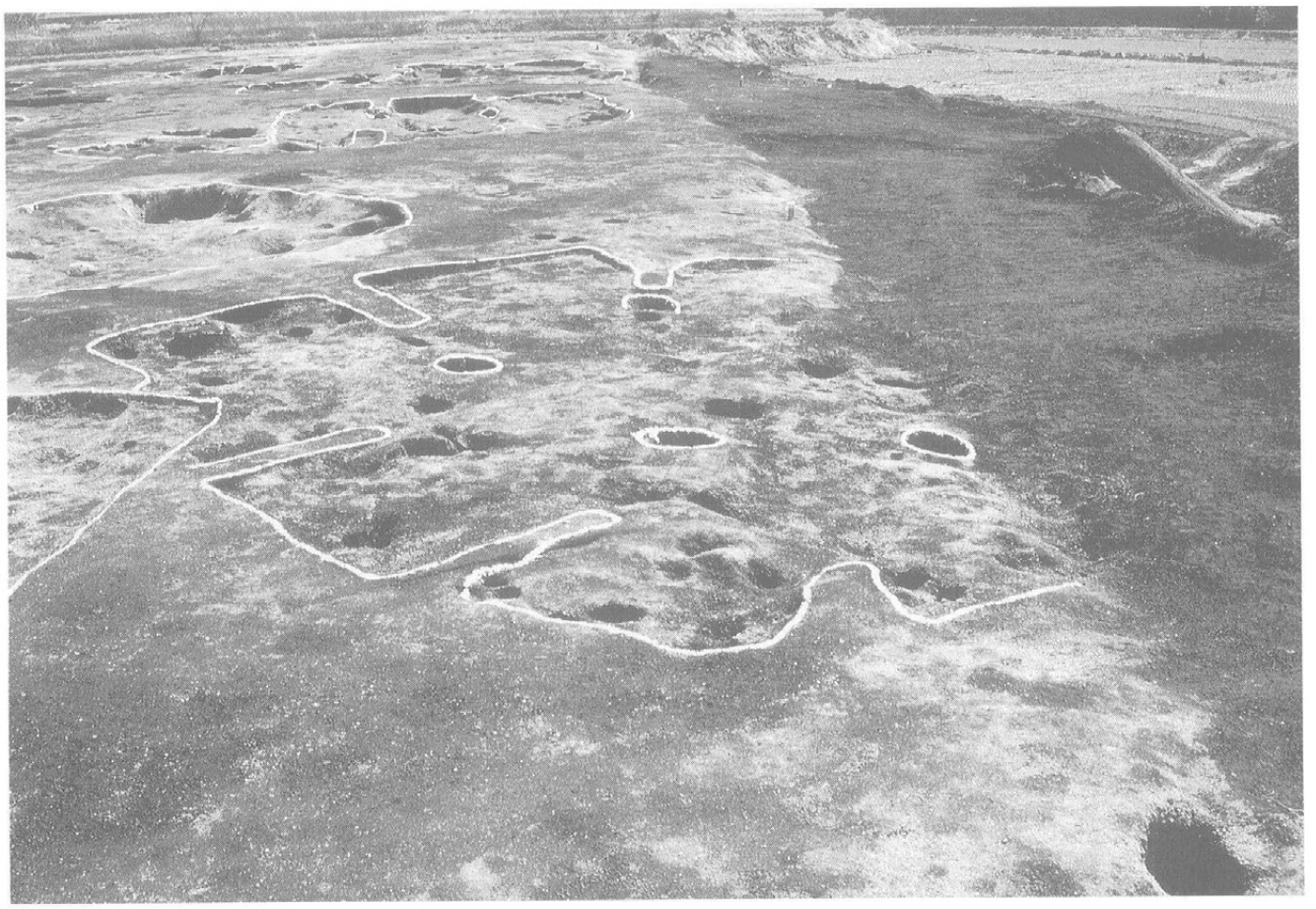
図版 8



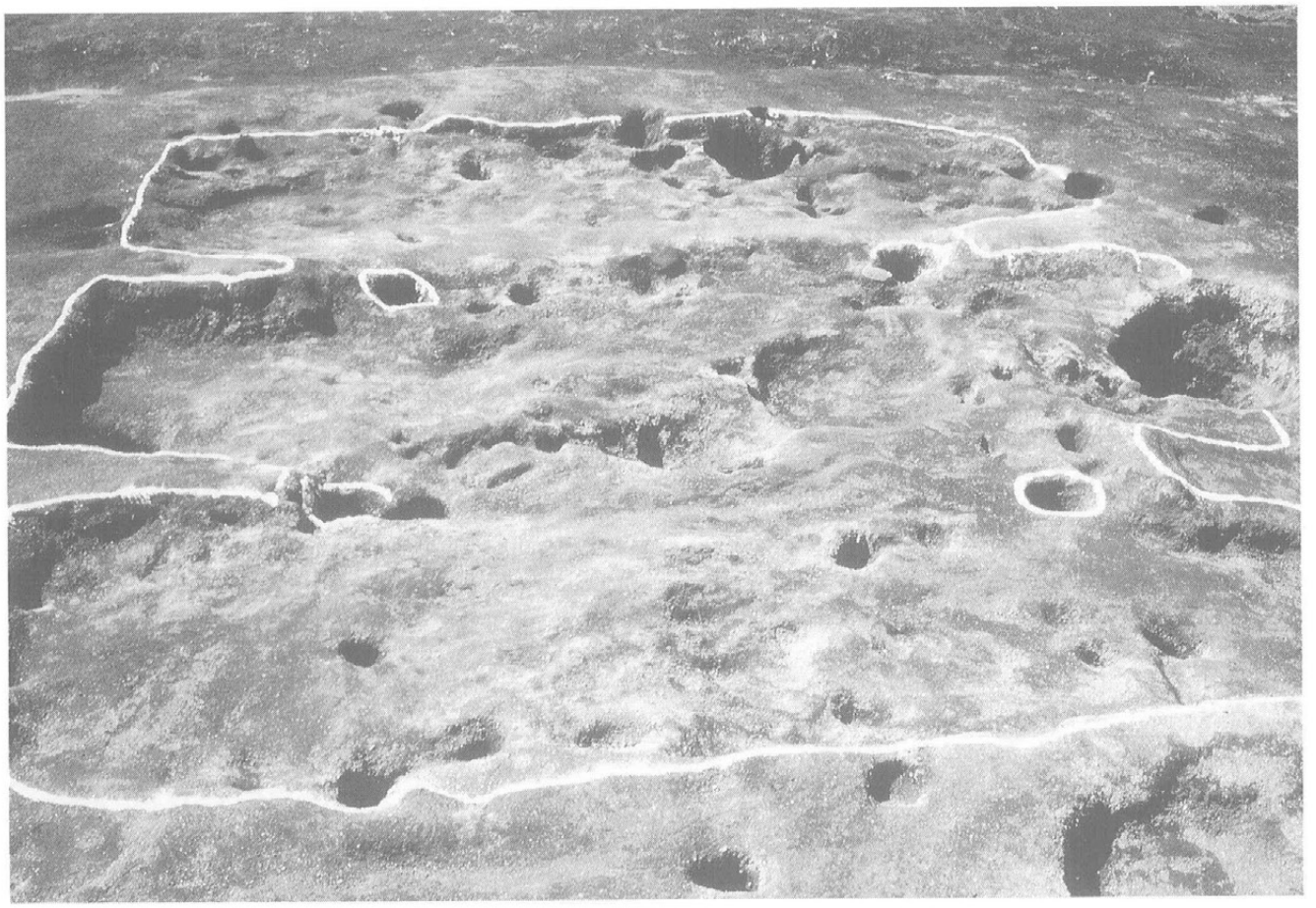
S A21・42



S A22

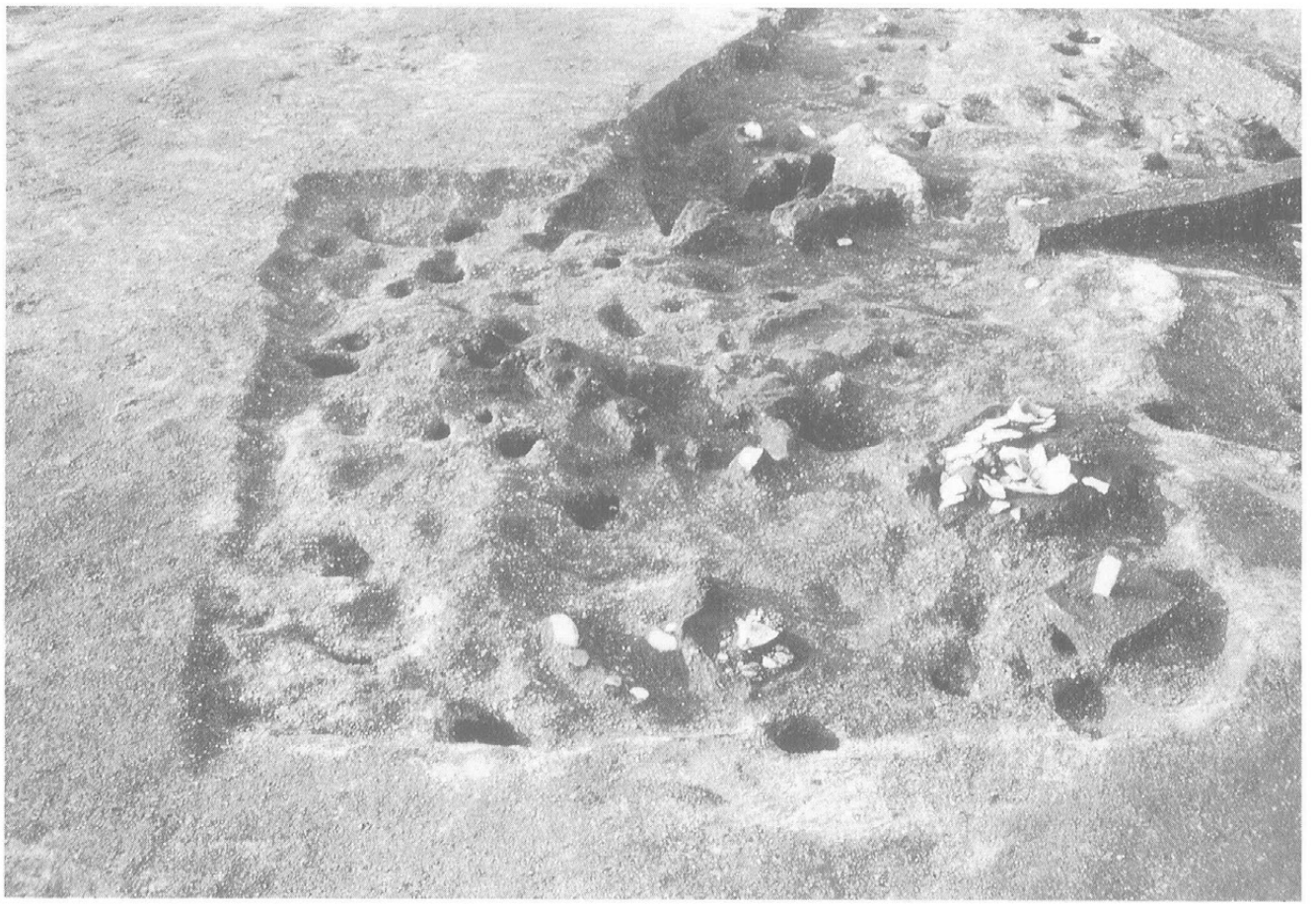


S A25

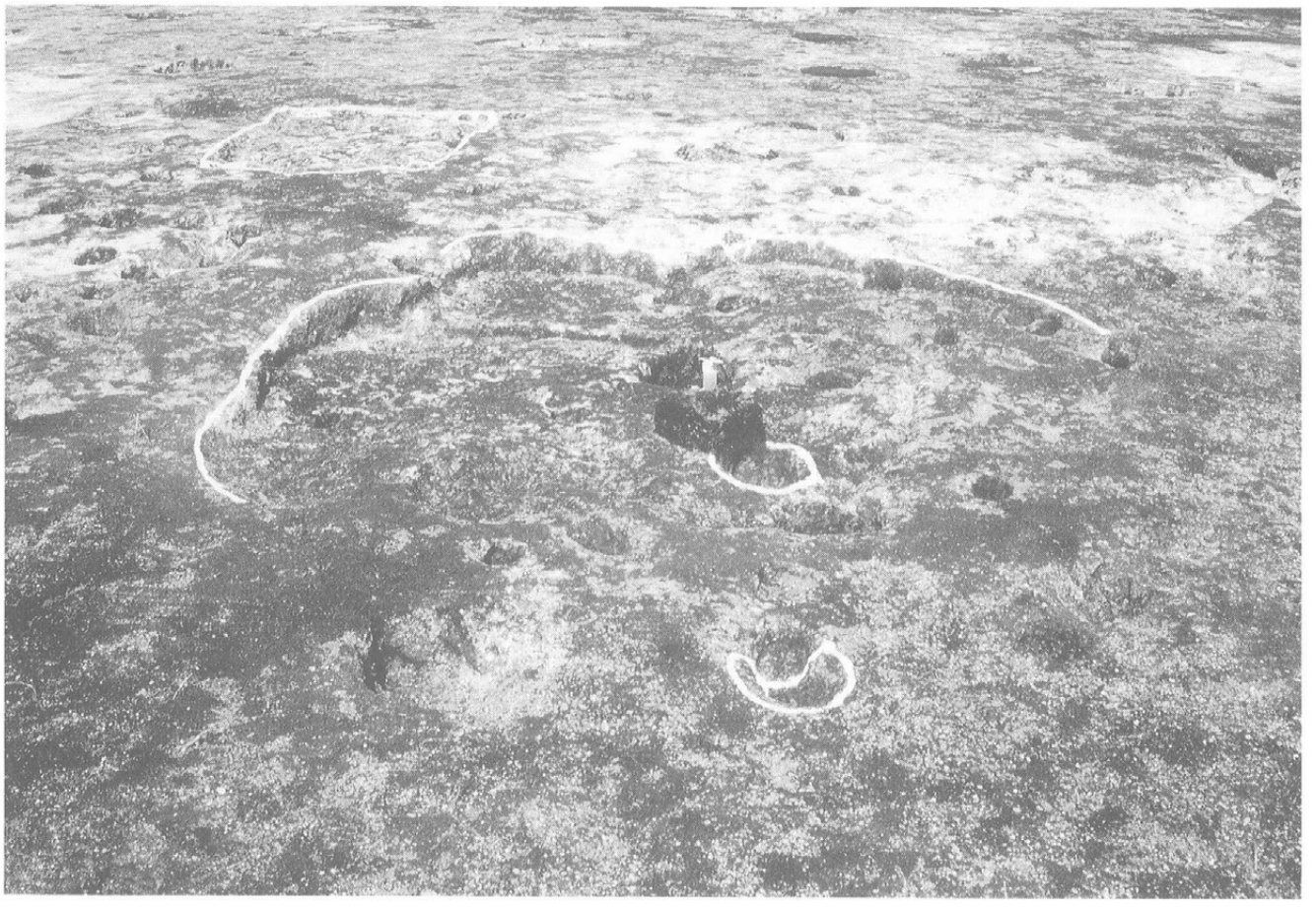


S A27

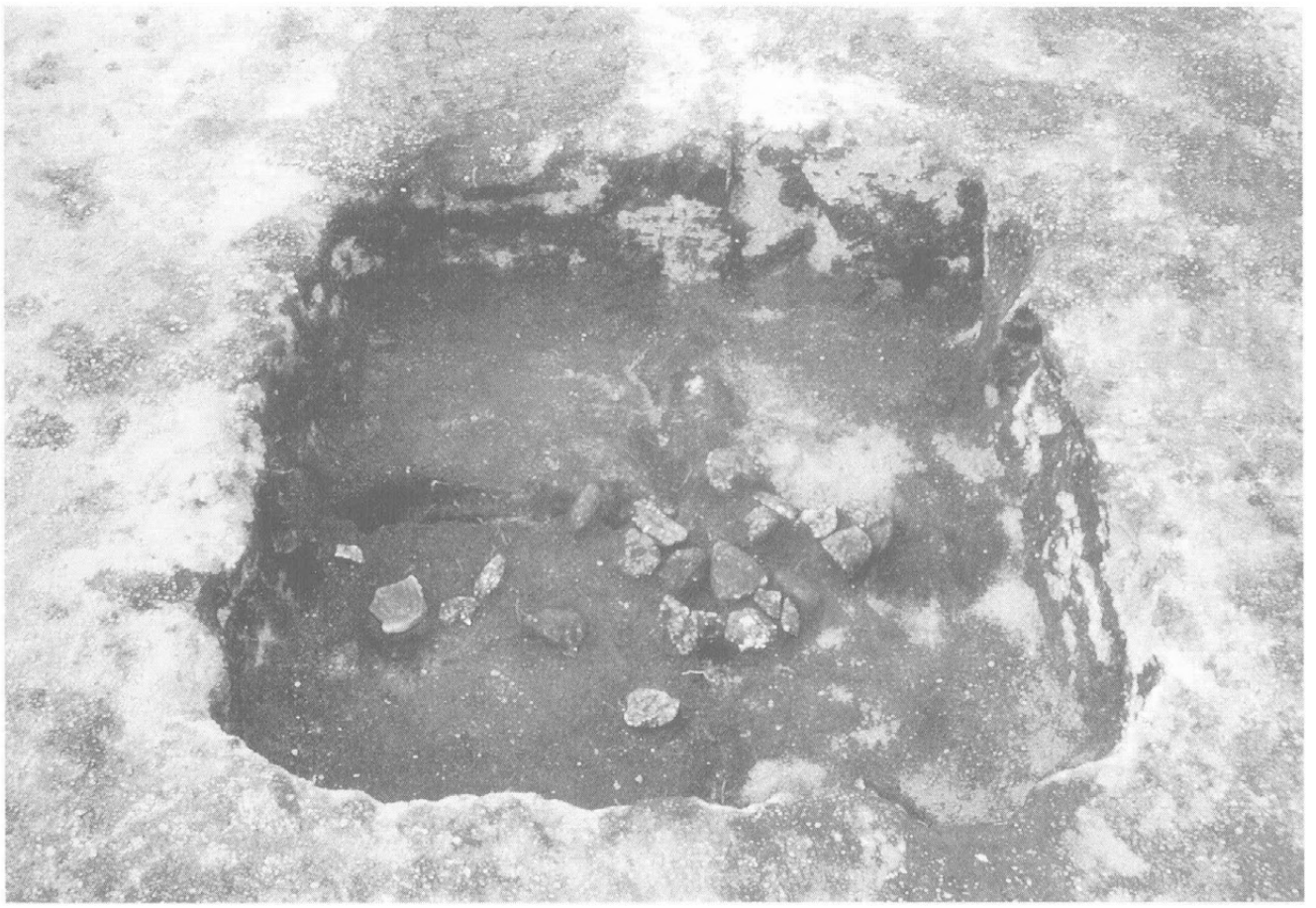
図版10



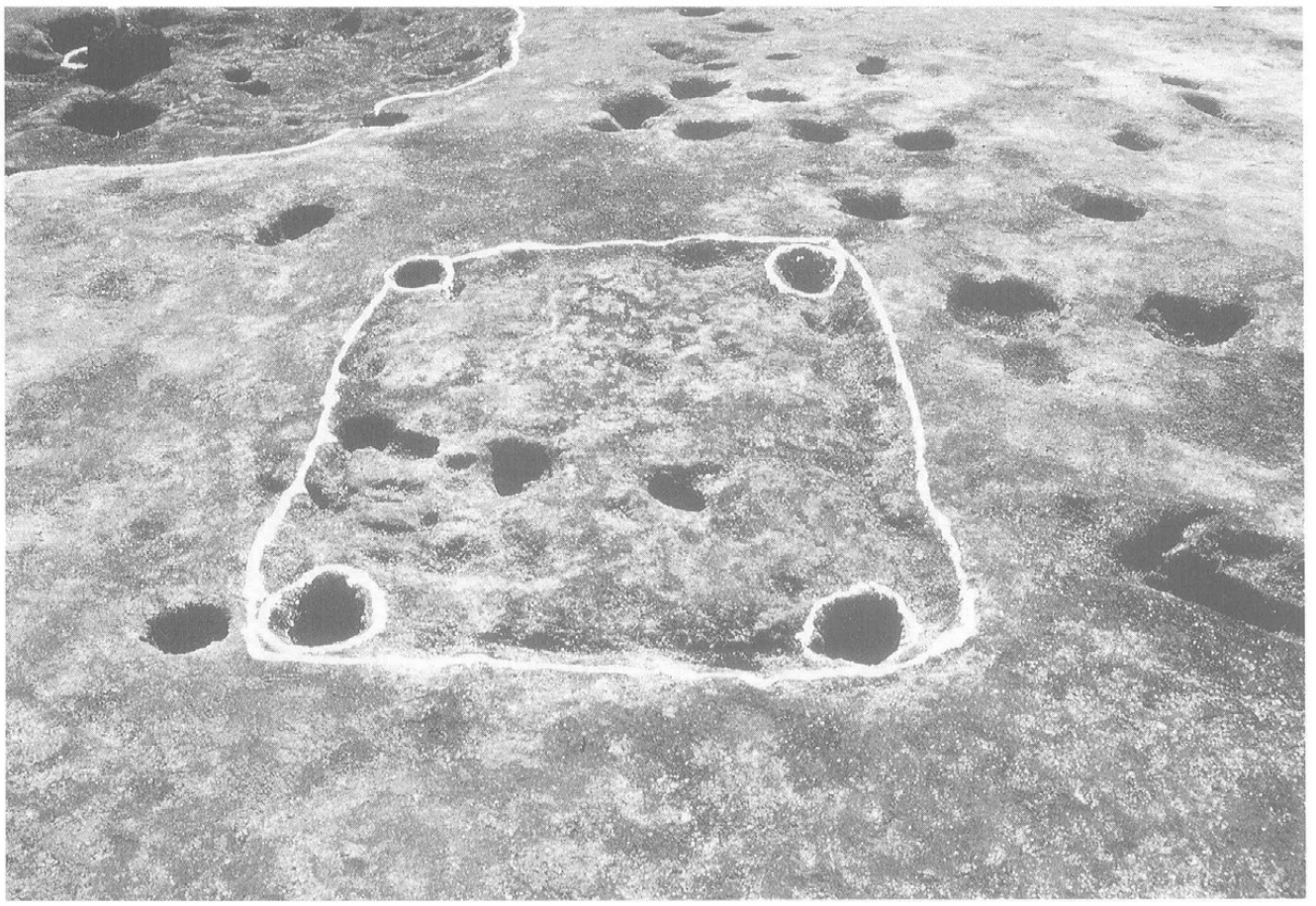
S A29



S A38



S A17

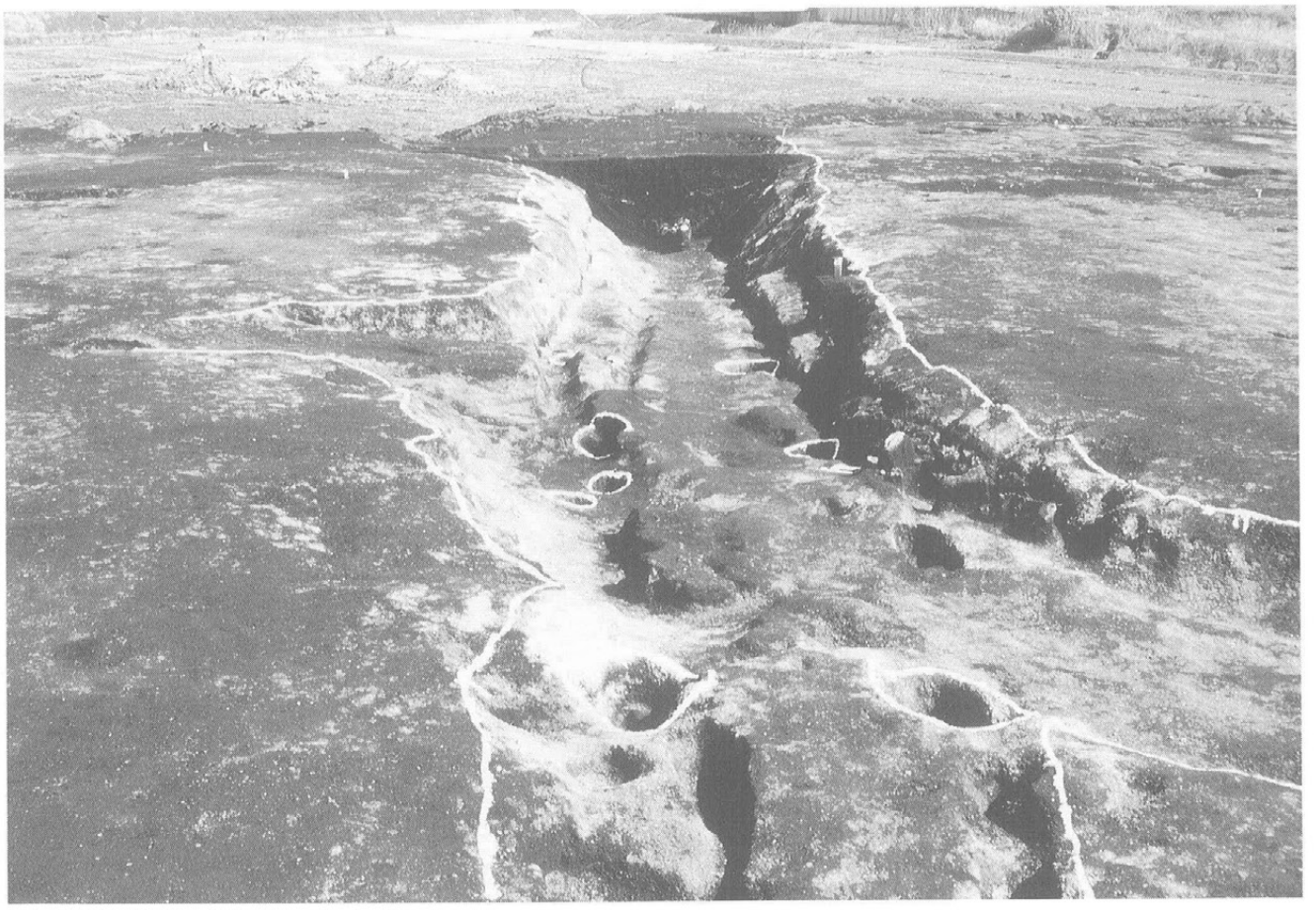


S A43

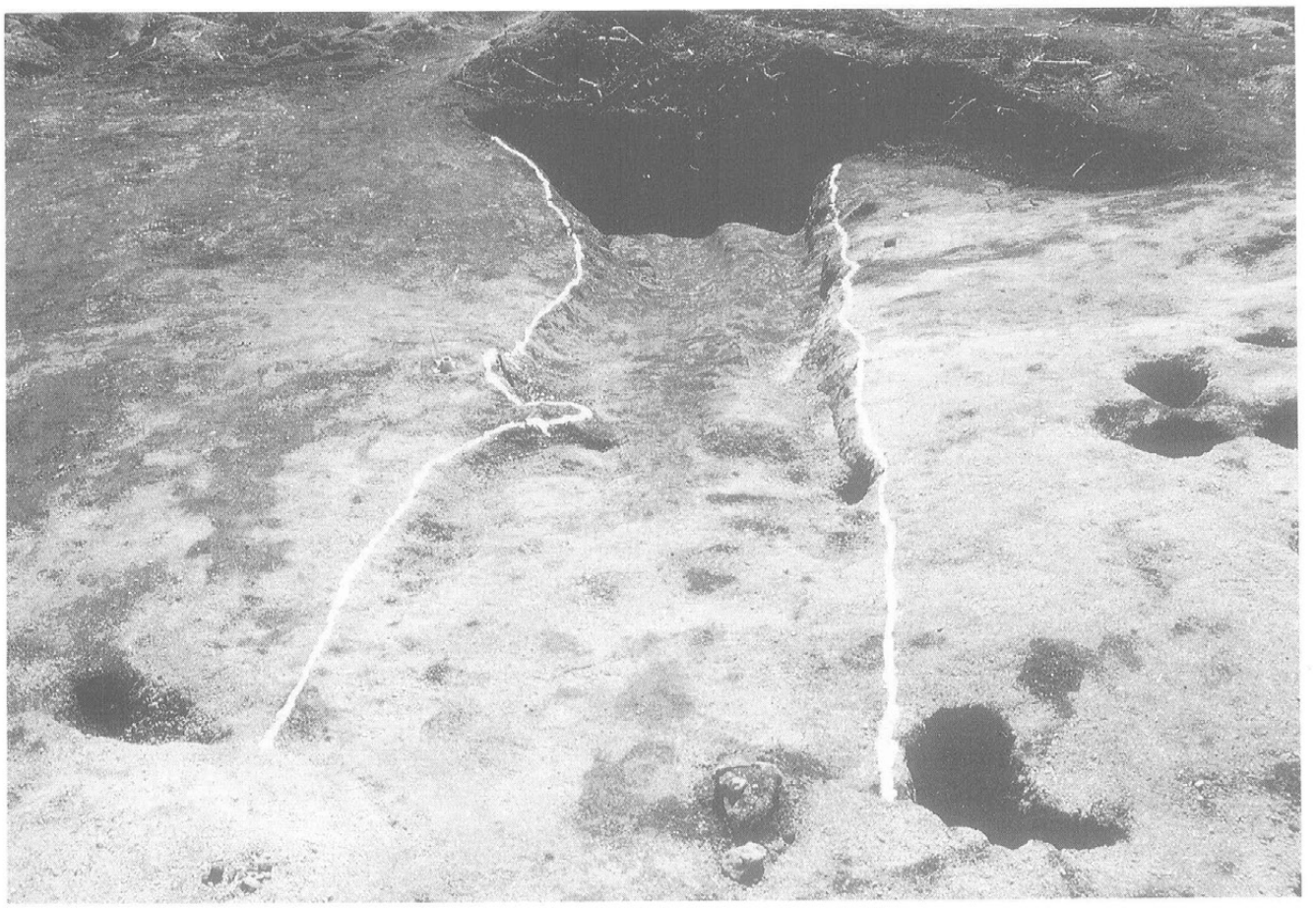
図版12

ＳＥ１土層断面

ＳＥ１硬化面



ＳＥ１門状遺構



ＳＥ２

図版14

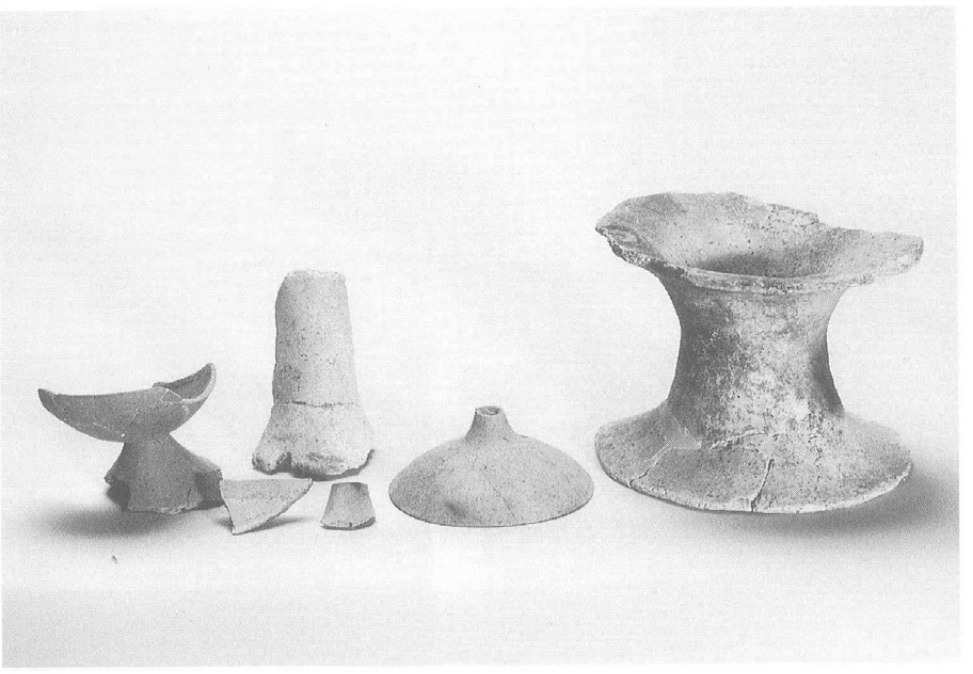
ＳＡ１・２
出土土器

ＳＡ４出土土器

ＳＡ５出土土器(1)

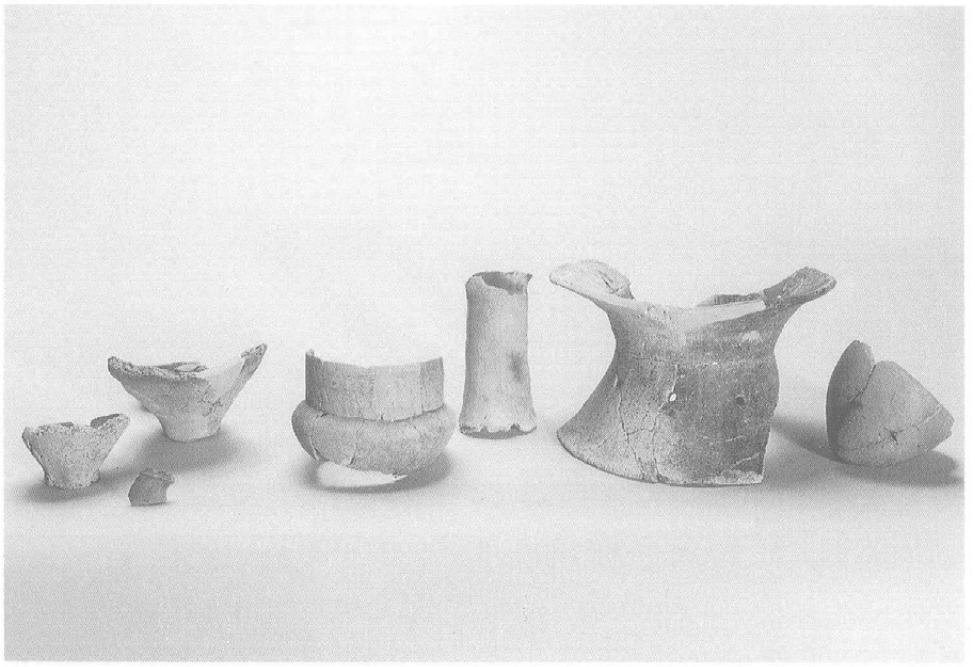
ＳＡ５出土土器(2)

ＳＡ５出土土器(3)



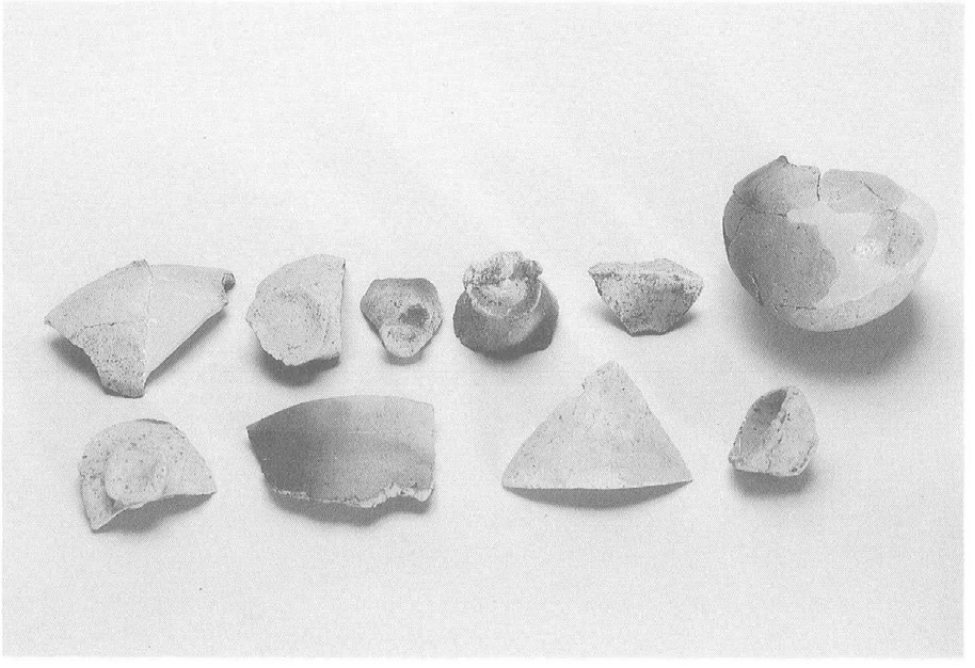
ＳＡ５出土土器(4)

図版16



ＳＡ６出土土器

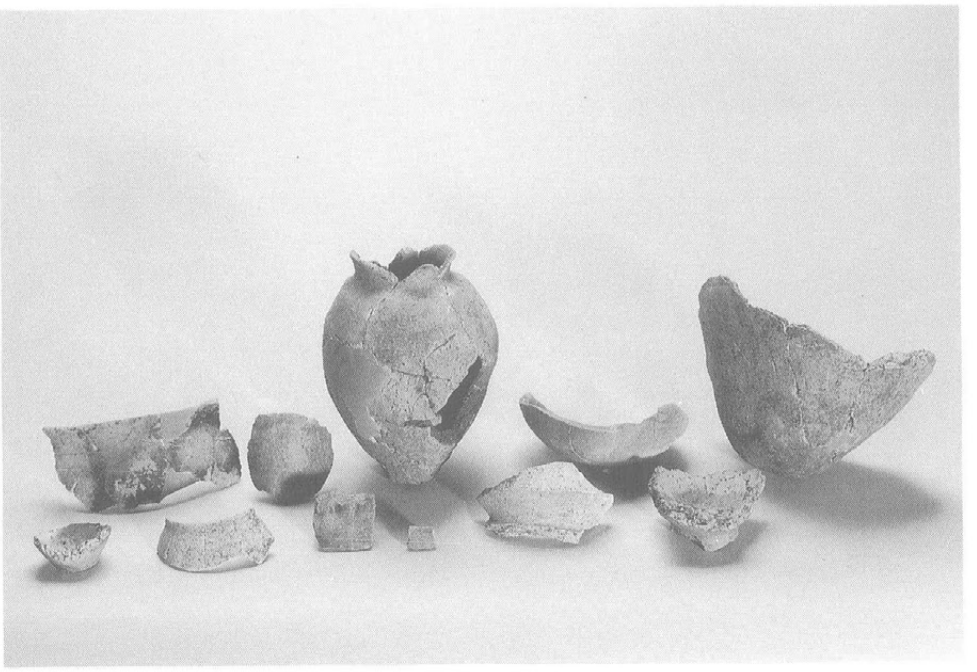
ＳＡ７出土土器



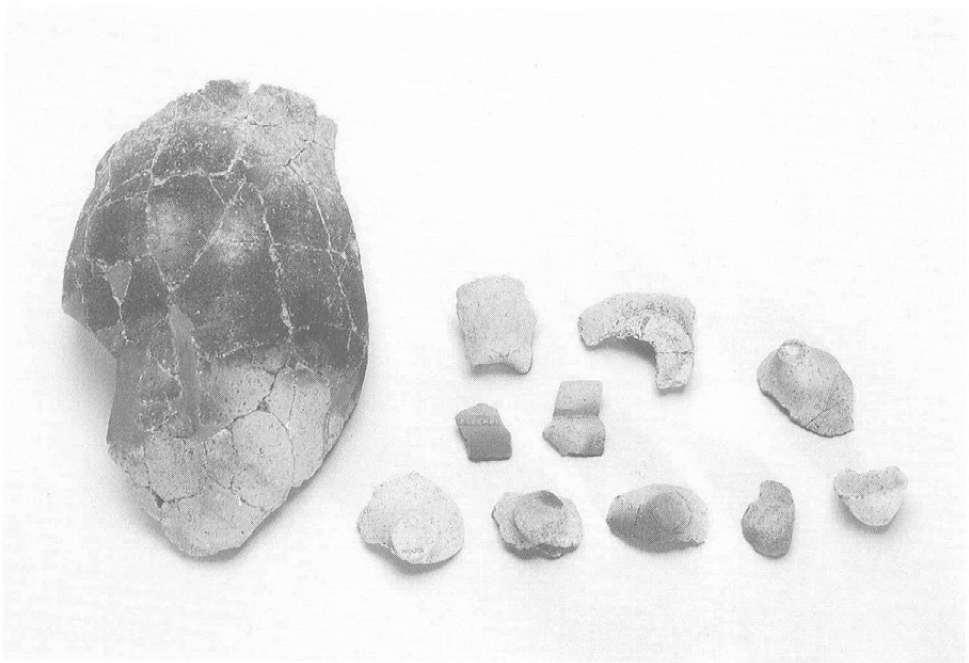
ＳＡ８出土土器

ＳＡ９出土土器

ＳＡ10・11出土土器



ＳＡ11出土土器



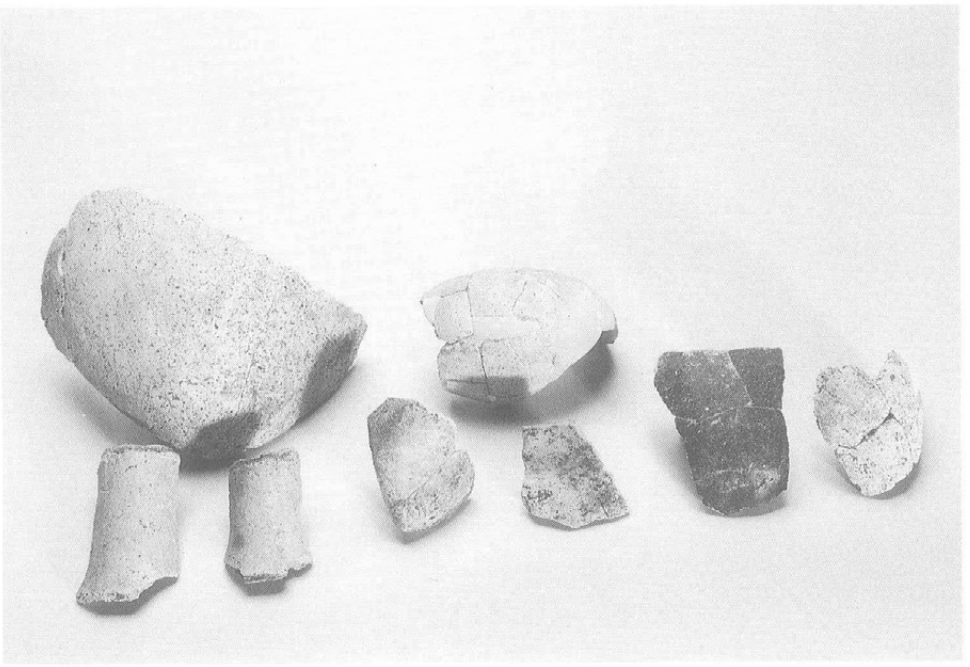
ＳＡ12出土土器

ＳＡ13出土土器

ＳＡ14出土土器

ＳＡ15出土土器

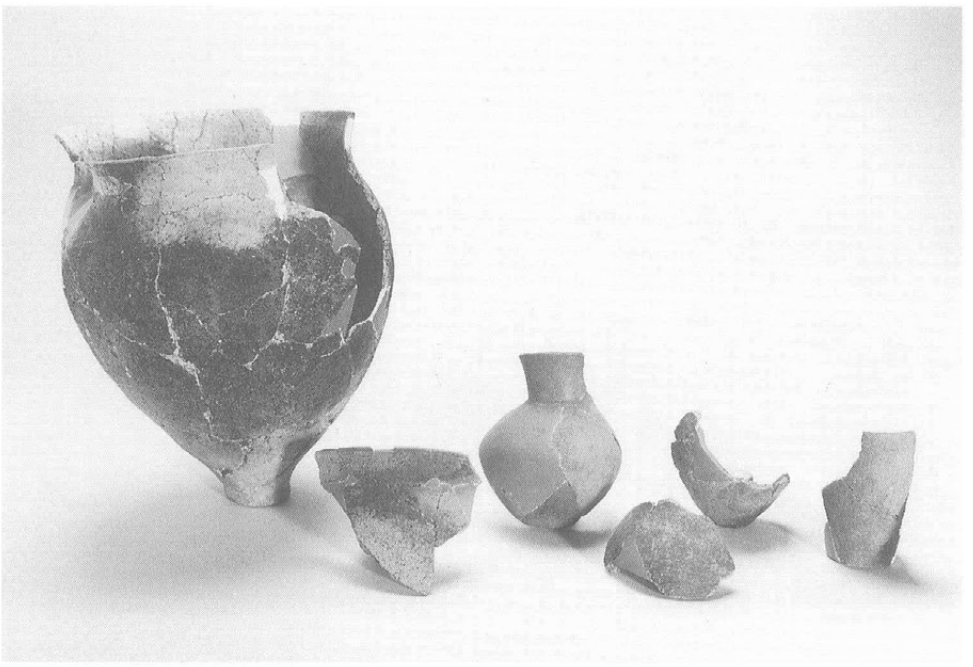
ＳＡ16・18・19
出土土器



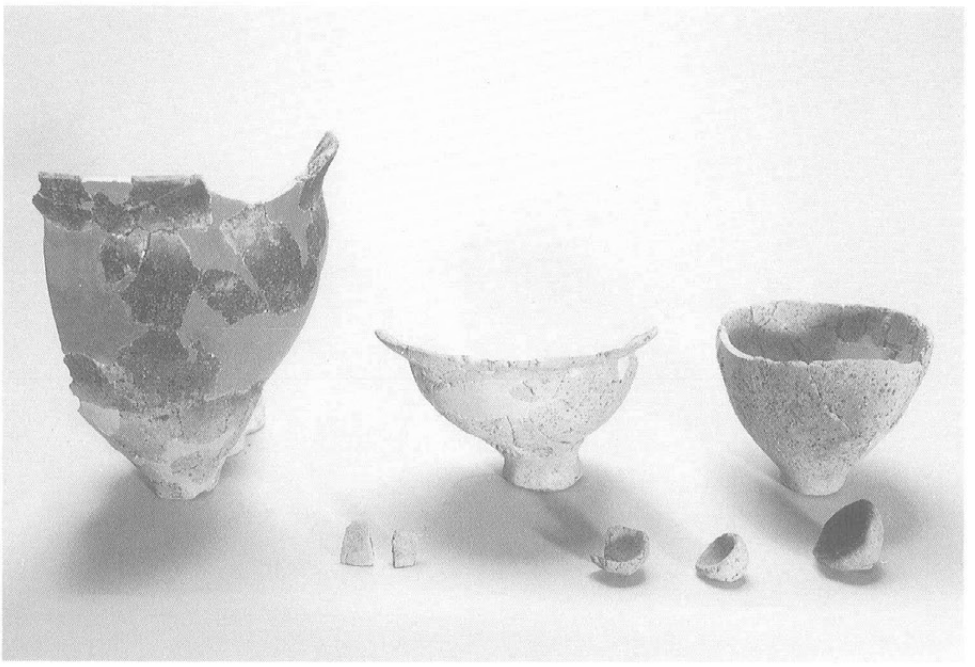
ＳＡ20・21
出土土器

図版20

ＳＡ22出土土器



ＳＡ25出土土器

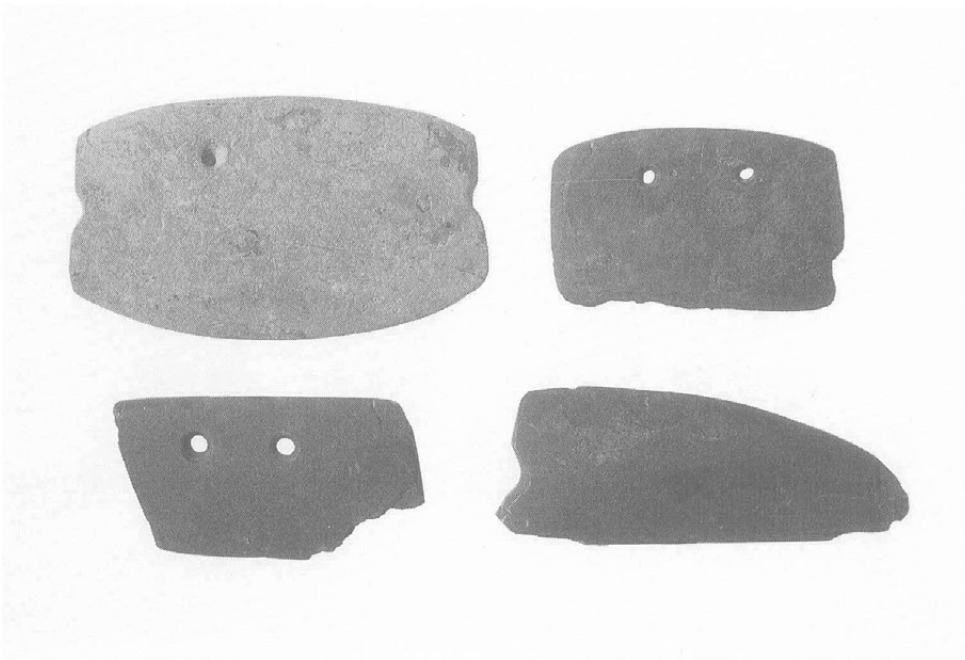


ＳＡ27出土土器

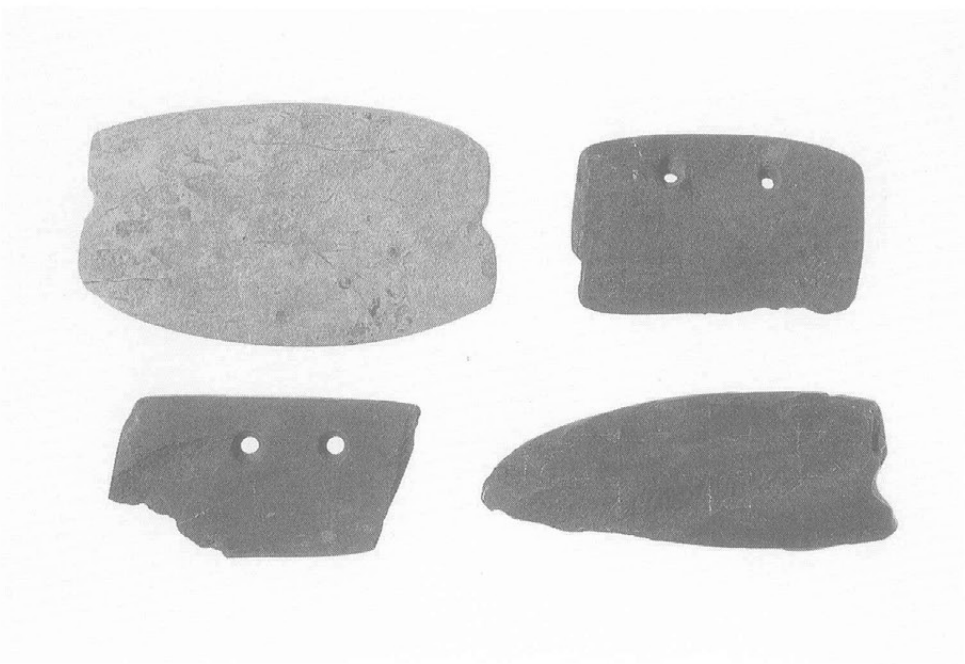
ＳＡ26・28・29
出土土器

ＳＡ30・33・38
出土土器

ＳＡ40出土土器



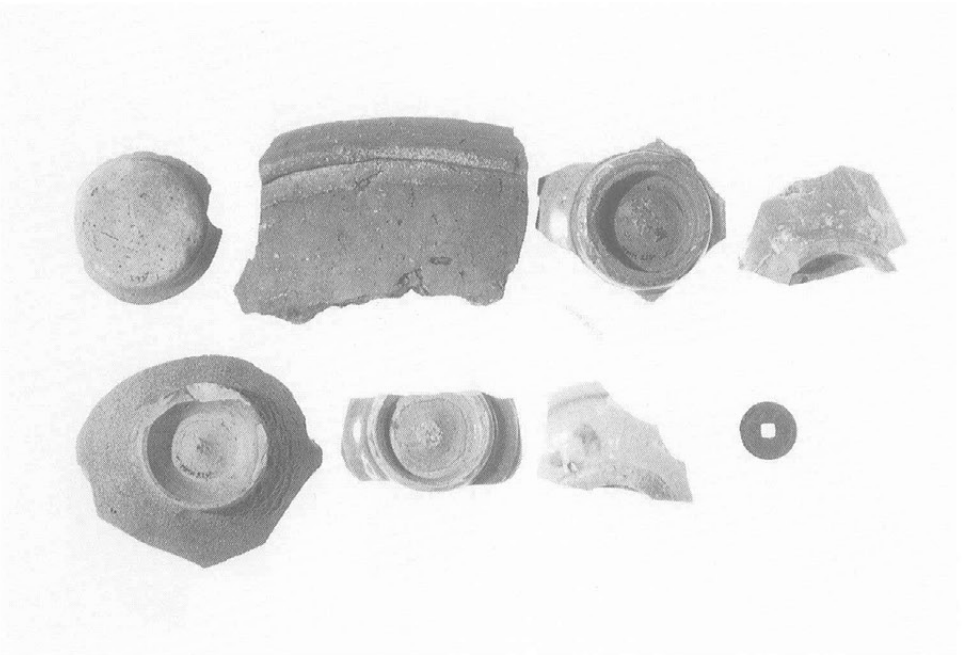
住居跡出土
石庖丁（表）



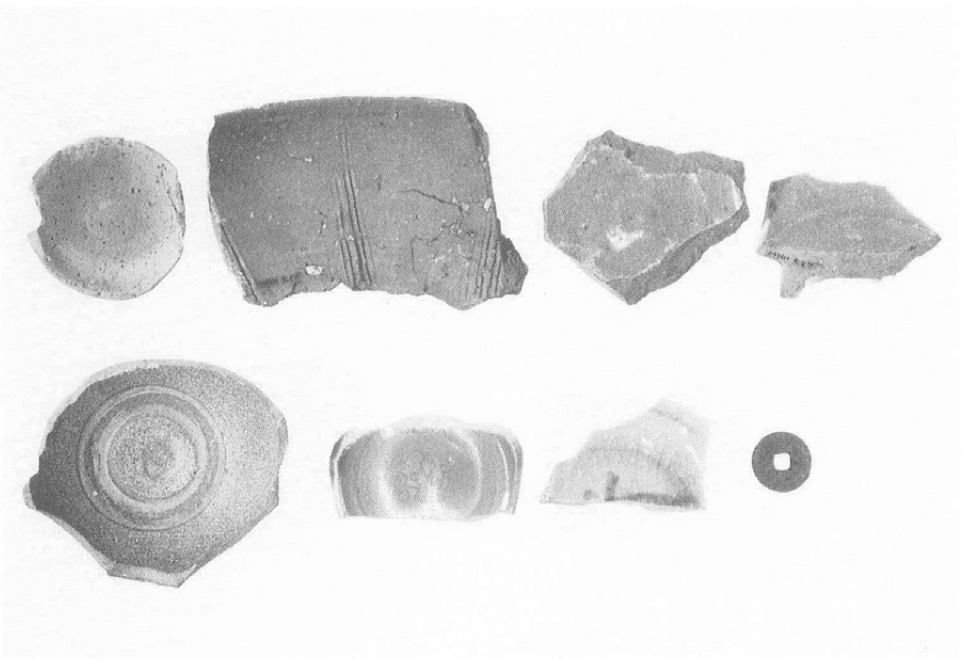
住居跡出土
石庖丁（裏）

SA1・3、SA3
出土遺物

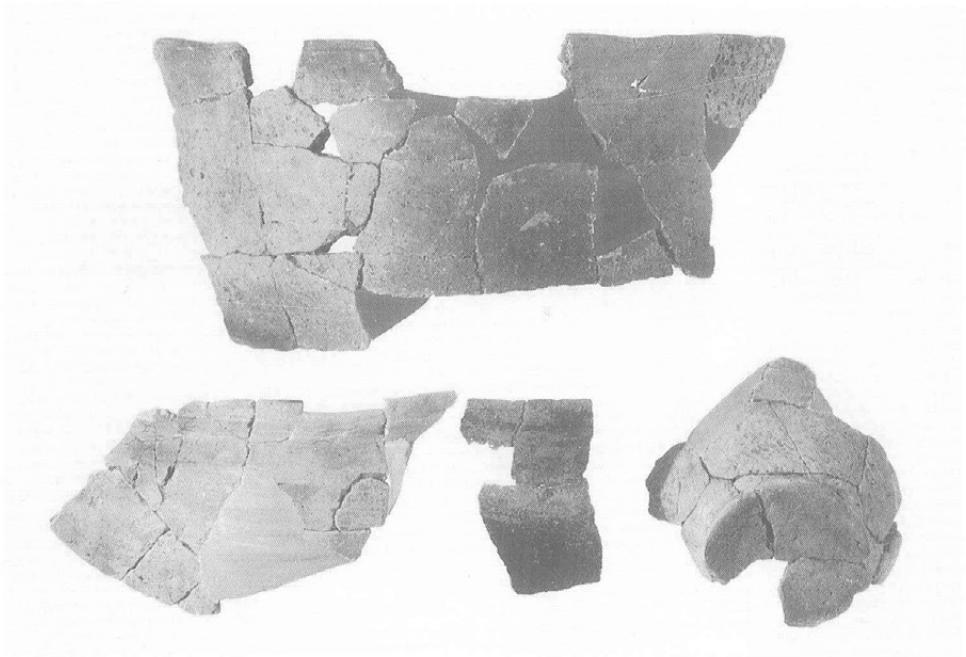
ＳＥ１出土
遺 物（外）



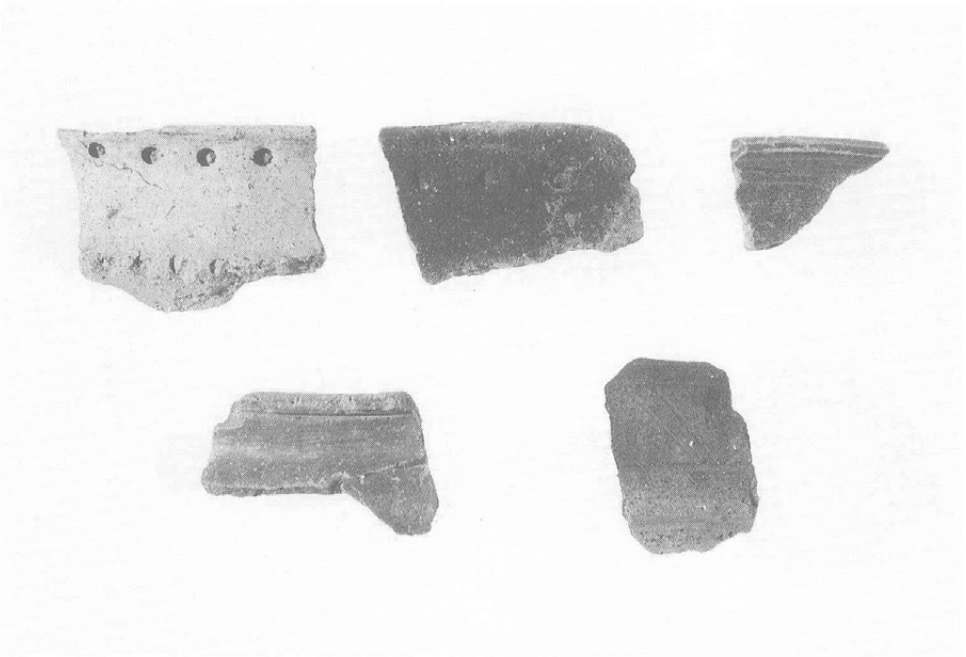
ＳＡ１出土
遺 物（内）



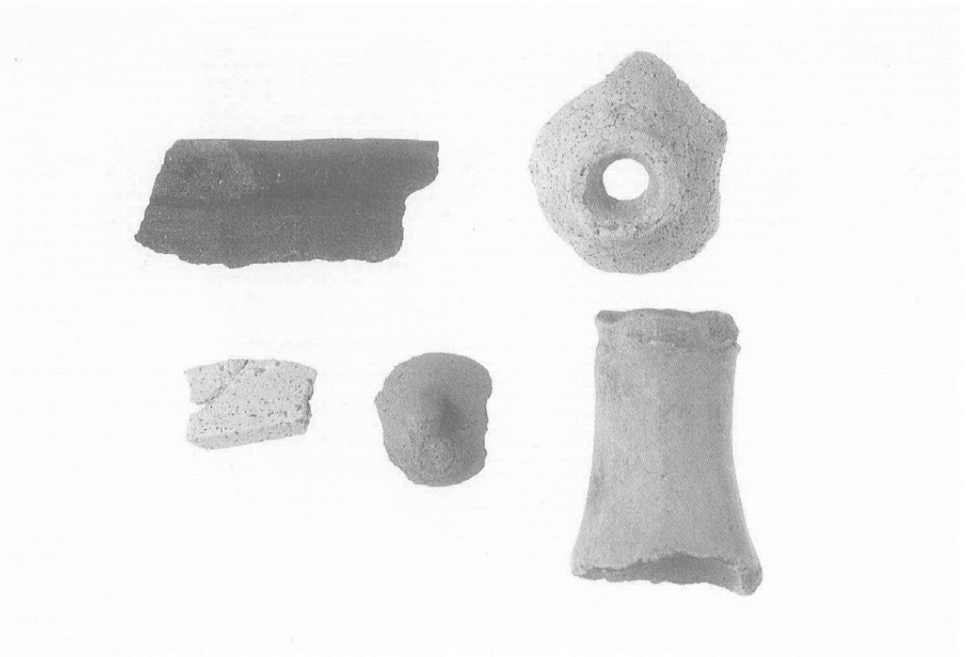
ＳＣ16出土
縄文土器(1)



ＳＡ16出土
縄文土器(2)

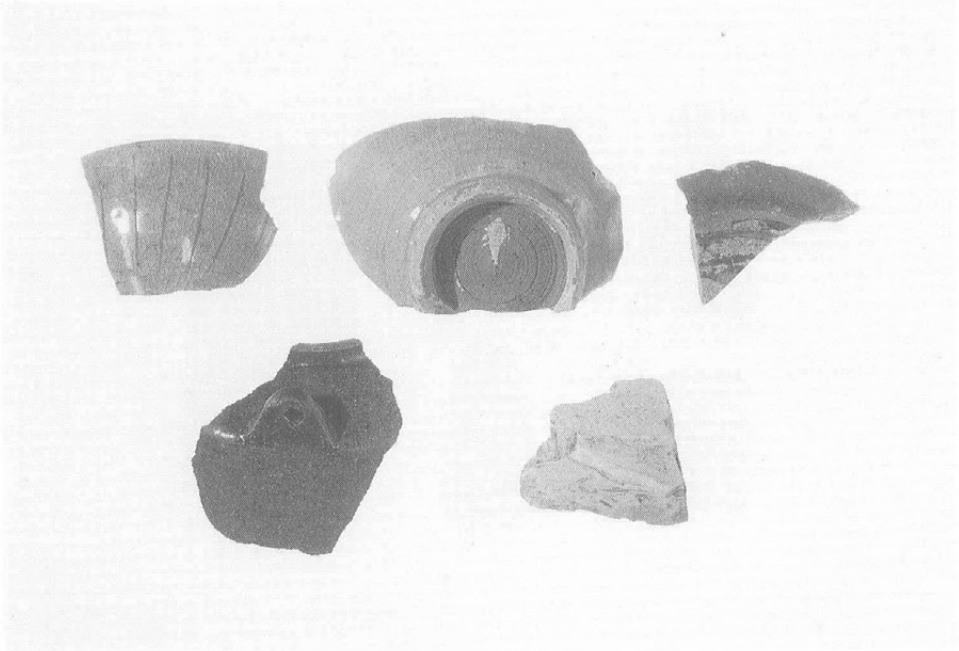


遺構外出土
縄 文 土 器

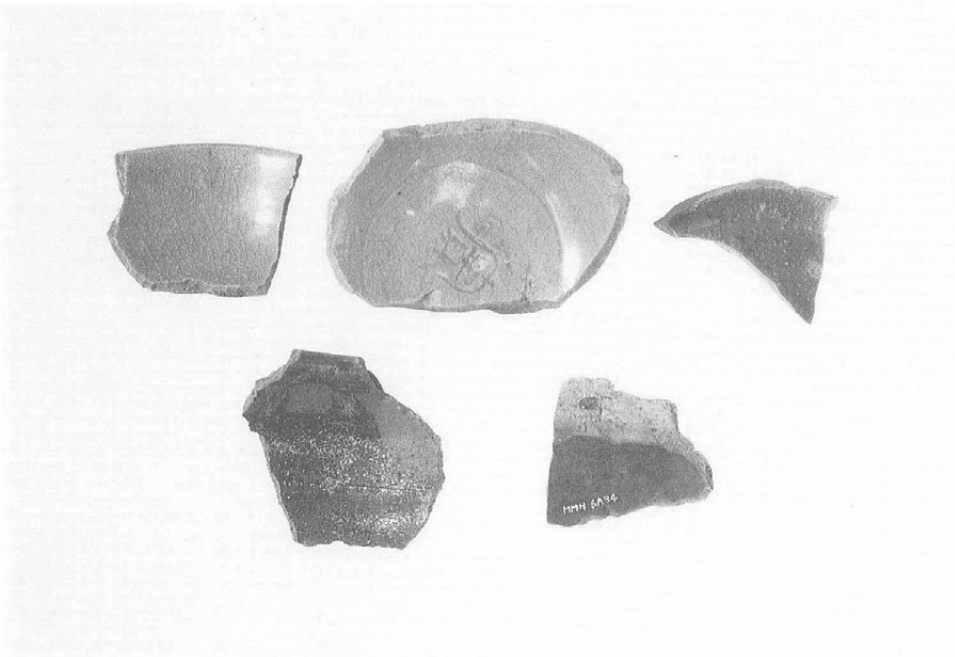


遺構外出土
弥 生 土 器

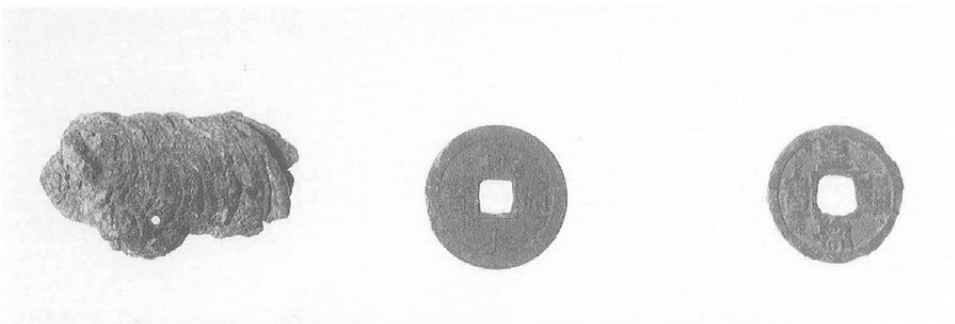
遺構外出土
陶磁器（外）



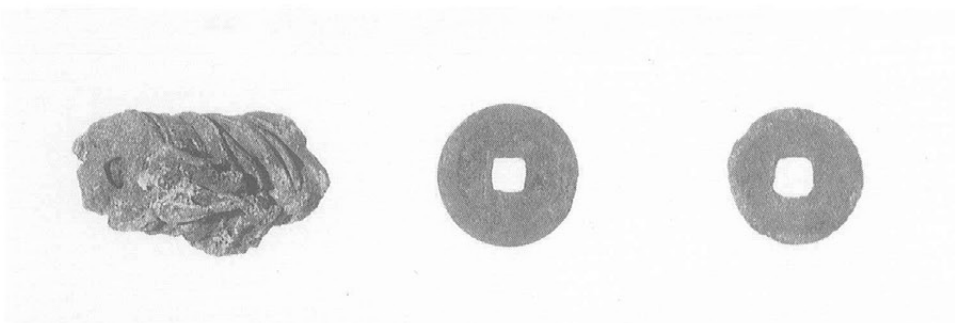
遺構外出土
陶磁器（内）

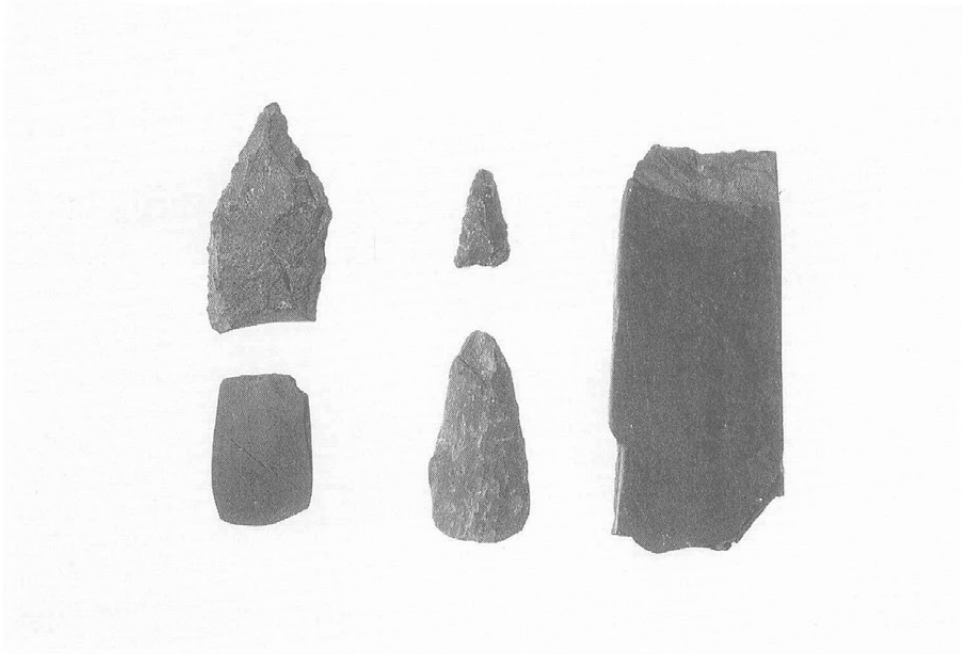


前畑遺跡
出土銭貨（表）

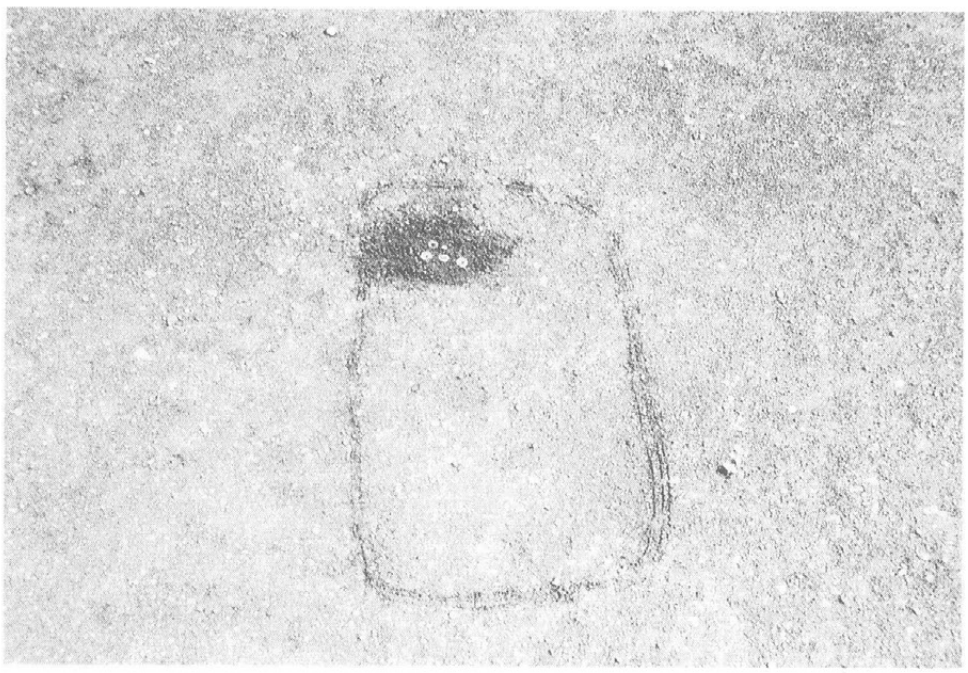


前畑遺跡
出土銭貨（裏）

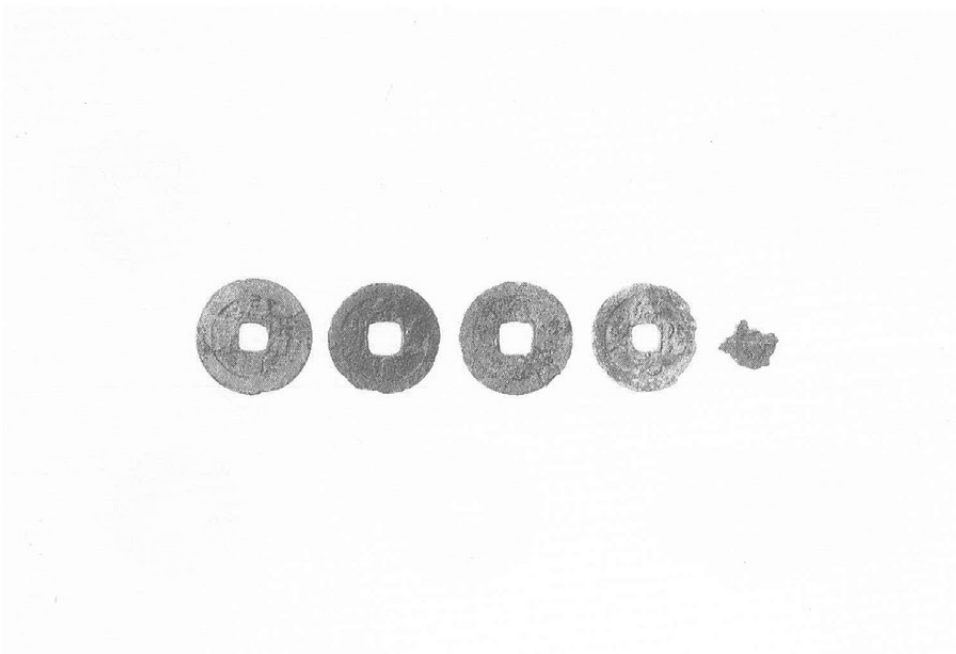




ＳＡ16・ＳＡ13
ＳＡ15・ＳＡ18
遺構外
出土石器



上大五郎遺跡
ＳＤ１



上大五郎遺跡
ＳＤ１出土銭貨

第6章　総　括　―丸谷地区遺跡群の変遷―

丸谷地区ほ場整備事業に伴い、平成3年度から5年度にかけて中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・上大五郎遺跡[1]・前畑遺跡の5遺跡の発掘調査が行われた。また、ほ場整備事業に並行して行われた河川改修事業では、宮崎県教育委員会により下大五郎遺跡・下川原遺跡・谷ノ口遺跡・渡り口遺跡の4遺跡が発掘調査されている[2]。前畑遺跡に隣接する山ノ田第1遺跡[3]は、平成6年度に県道改良工事に伴って宮崎県教育委員会により調査されている。これら一連の丸谷地区遺跡群の調査によりこの地域の歴史の一隅が明らかになってきた。ここでは、各遺跡の調査成果に基づいて丸谷地区遺跡群の変遷について簡単に触れておきたい。

丸谷地区遺跡群において縄文時代の遺構・遺物は、本池遺跡と前畑遺跡で見られた。本池遺跡B区包含層から松山式・指宿式・市来式といった後期の土器が出土した。前畑遺跡では、土坑1基が検出され、後期の土器が出土している。両遺跡ともに現河川からの比高差10m程度の低位段丘縁に立地している。後期以降の人の動きが僅かに見られるものの、他遺跡からは何らの遺構・遺物も検出されていない。中期以前の遺構・遺物については、厚く堆積した御池ボラ層の下となるため、ほ場整備という事業の性格上調査例が無く不明である。周辺遺跡を見渡すと、丸谷第一遺跡[4]では後期の包含層が確認されている。屏風谷第1遺跡[5]では早期の集石遺構と土器、石器、晩期の土器類が出土している。堂山遺跡[6]では早期の土坑、集石遺構、配石遺構、土器や石器が出土している。いずれの遺跡も、丸谷地区遺跡群に比して標高が20～30m高い台地や丘陵上に立地している。縄文時代の人間活動の中心が低位段丘上ではなく、比較的高位の台地や丘陵上であったものと推定される。

弥生時代中期以降、丸谷地区では多くの遺跡が展開する。本池遺跡からは中期から後期にかけての土器群が出土している。須玖式土器や亀の甲タイプの土器など他地域との交流を示すものに加え、分厚い器壁に多条の突帯を持つ粗製の甕など極めて在地的な土器が見られる。上大五郎遺跡では、中期末～後期初頭2基と古墳時代初頭1基の計3基の竪穴住居が検出された。各遺構間は数10mの距離があり散発的な分布状況を示している。中大五郎第1・第2遺跡、下大五郎遺跡では後期後半の集落が調査されている。中大五郎第1・第2遺跡は、竪穴住居、周溝状遺構、掘建柱建物から構成されるが、ほとんどの遺構は互いの距離を十分に保っており、切り合いや同時存在の可能性を否定する近接した検出状況を示すものは少ない。出土した土器からも明確な時期差を指摘し得ず、極めて短期間に営まれた単発的な集落であったことがうかがわれる。下大五郎遺跡は、竪穴住居12基、掘建柱建物2棟から構成される。いずれの遺構も他遺構との距離を十分に保っており、中大五郎第1・第2遺跡と同じく短期間に営まれた集落と推定される。また、この3遺跡で検出された竪穴住居の約半数はいわゆる花弁状住居であったことも特徴の一つである。3遺跡ともに丸谷川右岸で川に向かって張り出した低位段丘縁に立地する。これらの遺跡に対し、竪穴住居が密集し切り合いを見せる集落が前畑遺跡と山ノ田第1遺跡で調査されている。前畑遺跡では27基のうち11基が花弁状住居であり、花弁状住居同

志の切り合いなど他遺跡では例の無い検出状況を示していた。山ノ田第１遺跡では、12基の住居のうち花弁状住居２基を含む８基が密集して検出された。両遺跡は丸谷川左岸の低位段丘上に立地し、前述３遺跡からは約１㎞下流となる。出土土器から弥生時代末から古墳時代前期前半の年代が与えられる。弥生時代中期末から後期後半の時期の集落が、単発的に出現しているのに対し、弥生時代末から古墳時代前期にかけての時期には継続的な集落が営まれている。

歴史時代に入ると、本池遺跡において掘建柱建物群（７棟）が検出され、９世紀後半から10世紀を中心とする時期の大量の遺物群が出土している。土師質の坏、碗類には底部外面や体部外面に墨書を持つものが11点見られた。大量の須恵器、布痕土器（製塩や塩の運搬に関わるものと推定される。）や輸入陶磁器の存在は、比較的有力な集団の存在を想定し得よう。

隣接する上大五郎遺跡では、15世紀後半から16世紀にかけての館跡が調査された。２条の溝で段丘縁を長方形に区画し、内部には主殿的建物を伴う23棟の掘建柱建物群が検出された。３期に分類され、館の成立から解体までの過程を追うことができる。また、『荘内地理志』巻八十八によると付近に「丸谷某屋敷」という館が存在したことが知られる。南九州社会の政治的不安定を、丸谷地区の遺跡を通しても読み取ることができるのである。

下川原遺跡、谷ノ口遺跡、渡り口遺跡は、丸谷川に面した低地であり、中世以降の水田跡や島畑跡が検出・確認されている。集落遺跡ばかりでなく、こうした生産遺跡をも含めた検討により、村落としての地域の発達を理解し得るものと考えている。

一連の丸谷地区遺跡群の調査により得られた情報は計り知れないものがある。断片的ではあるにせよ、ある程度まとまった地域としての歴史像が垣間見られたのである。しかし、発掘調査段階から整理作業に至るまでの中に多くの不備があったことは否めず、引き出すことができず見落としてきた多くの情報があったものと思われる。広大な調査面積のため現場での取捨選択を余儀なくされ、整理作業の時間的制約の中で全ての遺構・遺物に対しての綿密な分析検討が行えなかった。貴重な情報を残して消えていった遺跡のために、その場に立ち会った者の責務として、また、霧島おろしの寒風の中、発掘作業に協力頂いた地元の方々の熱意に応えるために、今後もより多くの情報を引き出し公表する努力を続けていきたい。

註

(1) 都城市教育委員会　1995　『丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第31集

(2) 丸谷川河川改修事業に伴って宮崎県教育委員会が発掘調査を行った。未報告。

(3) 宮崎県教育委員会　1996　『山ノ田第１遺跡』県道高城・山田線緊急道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(4) 宮崎県教育委員会　1979　「丸谷第一遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』３

(5) 都城市教育委員会　1992　『屏風谷第１遺跡』都城市文化財調査報告書第17集

(6) 都城市教育委員会　1991　「堂山（南地区）遺跡」『平成２年度遺跡発掘調査概報』都城市文化財調査報告書第13集

調査時から整理段階に至るまで多くの方々に御指導・御協力頂いた。むすびにお名前を記して謝意を表したい。

飯田博之　石川悦雄　大橋康二　大盛祐子　岡本武憲　押川保子　面高哲郎　桑畑光博
米久田真二　重永卓爾　柴田博子　菅付和樹　高島英之　谷口武範　永山修一　北郷泰道
前田洋子　松浦由美　松崎幸子　松林豊樹　矢部喜多夫　横山哲英　和田理啓

（敬称略・五十音順）

フリガナ	マルタニチクイセキグン　ナカダイゴロウダイ1イセキ　ナカダイゴロウダイ2イセキ　モトイケイセキ　マエハタイセキ
書名	丸谷地区遺跡群　中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・前畑遺跡
副書名	丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第2集
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第34集
編集者名	重山郁子・東　憲章
発行機関	都城市教育委員会
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号
発行年月日	1996年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ナカダイゴロウ ダイ1 中大五郎第1	ミヤコノジョウシマルタニチョウ 都城市丸谷町 オオアザナカダイゴロウ 大字中大五郎	31°48′50″ 付近	131°4′39″ 付近	1991,10,23 ～ 1992, 2, 2	3,000㎡	農業関連

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代	竪穴住居　7 周溝状遺構　3 掘建柱建物　2 土坑　3	弥生土器	花弁状住居　3基

フリガナ 遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ナカダイゴロウ ダイ2 中大五郎第2	都城市丸谷町 大字中大五郎	31°48′50″ 付近	131°4′32″ 付近	1991,10,23 ～ 1992, 2, 2	6,000㎡	農業関連

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	弥生時代 中世	竪穴住居 6 周溝状遺構 3 掘建柱建物 10 土坑 2	弥生土器 土師質土器 陶磁器	・花弁状住居 2基 ・棟特柱掘建柱建物 1棟

モトイケ 本池遺跡	都城市丸谷町 大字上大五郎	31°48′55″ 付近	131°4′6″ 付近	1992,10, 5 ～ 1993, 1,29	8,000㎡	農業関連

集落	縄文時代 弥生時代 中世	竪穴状遺構 3 掘建柱建物 16 土坑 12 溝 1	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、布痕土器、輸入陶磁器、石器	墨書土器 11点 線刻土器 1点

マエハタ 前畑遺跡	都城市丸谷町 大字	31°48′33″ 付近	131°5′22″ 付近	1993,11,23 ～ 1994, 3, 2	4,000㎡	農業関連

集落 館跡	弥生～古墳 中世	竪穴住居 27 竪穴状遺構 6 溝状遺構 4 土坑 5 ピット 多数	弥生土器、土師器 土師質土器 陶磁器	花弁状住居11基 溝状遺構により区画 された館跡1区画

都城市文化財調査報告書第34集

丸谷地区遺跡群

中大五郎第1遺跡
中大五郎第2遺跡
本池遺跡
前畑遺跡

丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

1996年3月

発行　宮崎県都城市教育委員会
宮崎県都城市姫城町6街区21号

印刷　㈱みやこ印刷
宮崎県都城市大王町51-22